

鹿兒島県史料

忠義公史料

第三卷

例言

一本書は、東京大学史料編纂所蔵本「忠義公史料」（初稿本を含む一九〇冊）を底本とし、これを「鹿児島県史料 忠義公史料」全八巻として刊行するものである。時代の範囲は、安政六年から明治五年に至る十四年間で、第三巻は文久三（一八六三）年から慶応元（一八六五）年の内容を収めて刊行した。

一底本の巻ごとに頁を改め、上段の頭初にその表紙を記載し、扉については表紙のわきに註記した。

一原編者市來四郎の掲げた見出しはそのまま掲げ、見出しを欠くときには、新しく「 」で掲げた。

一原本および異本の現存するときは、努めてそれと対比して校訂し、文末に「 所蔵本にて校訂」などと註記した。

一刊行巻ごとに、見出しに一連番号を附した。一つの見出しが数種の内容を含むときは、小番号を文首に附した。

一固有名詞については、できるだけ正字を用いることにした。また、特殊文字の「 」（しめ）は、そのまま用いた。

一仮名は、原本または底本の体裁とおりとした。変体仮名は普通の仮名に改めたが、江だけはそのまま用いた。

一平出・抬頭および闕字は、原本または底本の体裁によった。闕字のときは一字あけにした。

一日記・新聞・会議録および但書は、原則として底本の体裁によった。

一地図および花押は、写真等により原本または底本のとおりとした。

一原註および原編者註（ ）は、できるだけ右脇に移したが、長文のものなどは底本の体裁によった。

一新に註を附するときは、「 」を附して、原編者の註と区別した。

一人名および地名については、国内国外を問わず適宜傍註を附した。その際、藩の呼称は維新史附録（維新史料編纂事務局編）により統一した。国内地名については、県内は昭和五十年現在の市郡名を用い、県外は主として都道府県名を用いた。なお、外国地名は片仮名書きとした。

一人名等については、原編者の明らかな誤記は、校訂者が訂正した。

一本文には適宜読点を附し、人名（外国人を除く）・地名・品名・数量等の連続するときには、並列点を附した。

一朱書は、その部分を「」で示し、「朱」と傍註を附した。

一頭註および付箋は、「」で行間に示し、「頭註」「付箋」と註記した。ただし、後筆のものは削除した。

一欠所部および解読困難な箇所は原編者註である本マ、と虫喰の箇所は、□で囲み、本マ、・虫喰または（○○カ）と傍註を附した。

一文意の通じない字または箇所には、〔ママ〕または〔衍カ〕・〔○○カ〕と傍註を附した。

一点線……の箇所は、底本の体裁によった。

一本文初めの内題、見出しの上の筆印、校正済・校了、第○○号の文字、後筆の傍線および傍点・鉤括弧、原編者が註記する予定の（ ）は、これを削除した。

一重複して掲げてある史料については、原則として註記して削除した。また、七七五号は編集の都合上第三巻に掲げた。

一欄外に掲げた年代は、それぞれの巻の表紙に記載してある年代である。

一見返しに、薩藩海軍史所収の「薩藩沿海防備図」と「集成館略図」を掲げた。

忠義公史料 第三卷 目次

例言

文久三年（癸亥）

一	藤井良節ヨリ中山實善へ書翰	正月二日	一
二	藤井良節ヨリ中山實善へ書翰	正月二日	二
三	近衛忠房・忠熙ヨリ島津久光へ書翰	正月	二
四	近衛忠熙ヨリ島津久光へ書翰	三
五	近衛忠熙ヨリ島津久光へ書翰	正月十六日	三
六	近衛忠熙ヨリ島津久光へ書翰	正月五日	四
七	將軍宛返書	正月二日	四
八	土岐出羽守宛返答	正月二日	四
九	藤井良節ヨリ中山實善へ書翰	正月六日	五
一〇	朝彦親王ヨリ島津久光へ書翰	正月二十一日	七
一一	鷹司輔熙ヨリ島津久光へ書翰	正月二十一日	七
一二	南部彌八郎報告	正月二十八日	七
一三	伊地知貞馨書翰	正月二十九日	九

- 一四 本田親雄ヨリ中山實善へ書翰 二月二日……………九
- 一五 徳川慶喜外三名連署届書 二月十四日……………一〇
- 一六 在京ノ諸大名江被相渡御書附ノ写……………一〇
- 一七 本田親雄ヨリ中山實善へ書翰 二月二十八日……………一〇
- 一八 本田親雄ヨリ島津久籌・中山實善へ書翰 二月二十八日……………一二
- 一九 本田親雄ヨリ島津久籌・中山實善へ書翰 三月晦日……………一二
- 二〇 鵜殿長銳取扱浪士等言上書 二月晦日……………一三
- 二一 島津忠寛宛書翰……………一四
- 二二 島津忠寛宛書翰……………一四
- 二三 島津久籌ヨリ大久保利通へ書翰 三月五日……………一五
- 二四 本田親雄ヨリ小松帶刀へ書翰 三月十二日……………一五
- 二五 近衛忠熙ヨリ島津久光へ書翰 三月二十八日……………一七
- 二六 近衛忠熙ヨリ島津久光へ書翰 三月二十九日……………一八
- 二七 内田政風ヨリ大久保利通へ書翰 三月二十九日(慶応三年カ)……………一九
- 二八 本田親雄ヨリ中山實善へ書翰……………二〇
- 二九 本田親雄ヨリ中山實善・大久保利通へ書翰 四月一日……………二〇
- 三〇 本田親雄ヨリ中山實善・大久保利通へ書翰 四月二日……………二〇
- 三一 本田親雄ヨリ中山實善・大久保利通へ書翰 四月二日……………二二

三二	税所篤ヨリ中山實善へ書翰	四月二日	二二
三三	中島源左衛門・東郷伊八郎口上覚	四月十九日	二三
三四	近衛忠熙ヨリ中山忠能・正親町三條實愛へ書翰	五月八日	二五
三五	近衛忠熙ヨリ中山忠能・正親町三條實愛へ書翰		二六
三六	近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰	五月十二日	二六
三七	本田親雄ヨリ小松帯刀へ書翰	五月十四日	二七
三八	本田親雄ヨリ小松帯刀へ書翰	五月十四日	二八
三九	本田親雄ヨリ中山實善・大久保利通へ書翰	五月十六日	三〇
四〇	本田親雄ヨリ中山實善・大久保利通へ書翰	五月二十日	三一
四一	村山齊助ヨリ藤井良節へ書翰	五月二十日	三二
四二	徳彦ヨリ圓へ書翰	五月二十一日	三三
四三	徳彦ヨリ圓へ別書	五月十九日	三五
四四	建碑ニ関スル書翰		三七
四五	異国船渡来長崎報	五月二十六日	三八
四六	近衛忠房・忠熙ヨリ島津久光へ書翰	五月二十六日	三九
四七	近衛忠房・忠熙ヨリ島津久光へ書翰	五月二十七日	四〇
四八	近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰		四一
四九	村上銀右衛門ヨリ中村善兵衛外二名へ書翰	六月二日	四二

- 五〇 攘夷沙汰書 六月……………四二
- 五一 喜入久高ヨリ小松帶刀へ書翰 六月十九日……………四三
- 五二 喜入久高ヨリ小松帶刀へ書翰 六月二十日……………四五
- 五三 近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰 六月二十二日……………四六
- 五四 村山齊助・井上長秋ヨリ中山實善・大久保利通へ書翰 六月二十五日……………四六
- 五五 吉井友實ヨリ中山實善・大久保利通へ書翰 六月二十五日……………四七
- 五六 蓑田傳兵衛ヨリ新納久脩・御軍賦役衆へ書翰 六月二十九日……………四八
- 五七 下關砲撃ニツキ中村武吉報告 六月二十七日……………四八
- 五八 近衛忠房・忠熙ヨリ島津久光へ書翰 六月下旬……………五一
- 五九 近衛忠熙ヨリ島津久光へ書翰……………五二
- 六〇 五代友厚藩庁宛報告書 六月……………五三
- 六一 近衛忠房外三名ヨリ島津久光へ書翰 六月……………五四
- 六二 近衛忠房・忠熙ヨリ島津久光へ書翰 六月……………五五
- 六三 近衛忠熙書翰……………五六
- 六四 近衛忠房・忠熙連署建白写 七月……………五七
- 六五 近衛忠房・忠熙ヨリ島津久光へ書翰 七月九日……………五七
- 六六 近衛忠房外二名ヨリ島津久光へ書翰 七月十一日……………五八
- 六七 岩下方平ヨリ島津久徵外家老四名へ書翰 七月十一日……………五九

六八	木村宗三ヨリ南部彌八郎へ書翰	七月十一日	五九
六九	伊地知貞馨ヨリ大久保利通へ書翰	七月十六日	六〇
七〇	近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰	七月二十七日	六一
七一	七月十二日宣達書		六一
七二	奈良原繁ヨリ中山實善・大久保利通へ書翰	八月五日	六二
七三	高崎正風ヨリ中山實善・大久保利通へ書翰	八月五日	六三
七四	内田政風ヨリ中山實善・大久保利通へ書翰	八月五日	六六
七五	宛名差出名不明書翰		七一
七六	高崎正風ヨリ中山實善・大久保利通へ書翰	八月八日	七二
七七	中路延年ヨリ内田政風へ書翰	八月九日	七三
七八	木場傳内ヨリ大久保利通へ書翰	八月十一日	七四
七九	高崎五六・重野安釋ヨリ中山實善・大久保利通へ書翰	八月十二日	七六
八〇	吉井友實ヨリ中山實善・大久保利通へ書翰	八月十二日	七七
八一	薩州京師警衛ノ達	八月十八日	七八
八二	近衛忠房・忠熙ヨリ島津久光へ書翰	八月十九日	七八
八三	近衛忠房・忠熙ヨリ島津久光へ書翰	八月二十二日	七九
八四	村山齊助ヨリ大久保利通へ書翰	八月二十二日	八〇
八五	内田政風ヨリ大久保利通へ書翰	八月二十二日	八一

- 八六 高崎正風ヨリ大久保利通へ書翰 八月二十三日…………… 八二
- 八七 吉井友實・重野安釋ヨリ大久保利通へ書翰 八月二十四日…………… 八二
- 八八 堀平右衛門ヨリ喜入久高・小松帶刀へ書翰 八月二十四日…………… 八三
- 八九 高崎五六外二名ヨリ大久保利通へ書翰 八月二十四日…………… 八四
- 九〇 吉井友實・重野安釋ヨリ大久保利通へ書翰 八月二十四日…………… 八五
- 九一 吉井友實ヨリ大久保利通へ書翰 八月二十四日…………… 八六
- 九二 近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰 八月二十五日…………… 八七
- 九三 近衛忠房・忠熙ヨリ島津久光へ書翰 八月二十九日…………… 八八
- 九四 近衛忠熙ヨリ島津久光へ書翰 八月…………… 八八
- 九五 内田政風ヨリ大久保利通へ書翰 八月二十九日…………… 八八
- 九六 林休左衛門ヨリ内田政風へ書翰 八月二十三日…………… 九一
- 九七 高崎正風ヨリ大久保利通へ書翰 八月二十九日…………… 九三
- 九八 内田政風ヨリ大久保利通へ書翰 八月二十九日…………… 九三
- 九九 内田政風ヨリ大久保利通へ書翰 八月二十九日…………… 九四
- 一〇〇 内田政風ヨリ大久保利通へ書翰 八月二十九日…………… 九五
- 一〇一 宛名差出名不明書翰…………… 九五
- 一〇二 内田政風ヨリ小松帶刀へ書翰 九月十四日…………… 九七
- 一〇三 内田政風ヨリ小松帶刀へ書翰 九月二十一日…………… 九八

目次

一〇四	内田政風ヨリ小松帯刀へ書翰	九月二十三日	九
一〇五	高崎正風ヨリ中山實善・大久保利通へ書翰	〇〇
一〇六	内田政風ヨリ小松帯刀へ書翰	九月二十六日	一〇一
一〇七	内田政風ヨリ小松帯刀へ書翰	九月二十三日	一〇三
一〇八	内田政風ヨリ小松帯刀へ書翰	九月二十七日	一〇三
一〇九	近衛忠房・忠熙ヨリ島津久光へ書翰	九月二十八日	一〇四
一一〇	正親町三條實愛ヨリ島津久光へ書翰	九月三十日	一〇四
一一一	道島五郎兵衛墓碑 道島家記鈔戊亥年モ合セ記ス	一〇五
一一二	口上手控 戊九月	一〇五
一一三	近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰	十月八日	一〇六
一一四	大原重徳ヨリ島津久光へ書翰	十月二十一日	一〇七
一一五	服部政次郎ヨリ内田政風へ書翰	十月二十五日	一〇八
一一六	銀山代官届書一	一〇八
一一七	銀山代官届書二	一〇九
一一八	銀山代官届書三	一一一
一一九	川又左一郎尋問ノ次第	一一二
一二〇	生野変覚一	一一三
一二一	生野変覚二	一一五

一三二	生野變覚三	一三五
一三三	近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰	十月二十八日	一三六
一三四	島津久光上京ニツキ沙汰書	一三七
一三五	島津久光上京ニツキ賜物	一三七
一三六	島津久光上京ニツキ沙汰書	一三七
一三七	土持平八ヨリ長野彦七外二名へ書翰	十二月二十九日	一三八
一三八	土持平八報告	十一月二十九日	一三〇
一三九	吉井信發・津輕承昭宛大目付達	十二月四日	一三〇
一四〇	島津久篤ヨリ京都詰御側役衆へ連絡	十二月五日	一三一
一四一	伊達慶邦宛廻状連絡	一三一
一四二	畠山助右衛門ヨリ木場傳内へ書翰	十二月二十八日	一四二
一四三	葛城彦一報告	十二月	一四三
一四四	江戸留守居ヨリノ幕府沙汰書	十二月	一四七
一四五	谷村昌武建白	十一月朔日	一三一
一四六	近衛忠房・忠熙ヨリ島津久光へ書翰	十一月五日	一三一
一四七	生野一件ニツキ木場傳内ヨリ得能良助へ報告	十一月七日	一三二
一四八	土持平八ヨリ大久保利通へ報告	十一月十四日	一三九
一四九	近衛忠熙ヨリ島津久光へ書翰	十一月十七日	一四一

一四〇	近衛忠房・忠熙ヨリ島津久光へ書翰	十一月十九日	一四二
一四一	近衛忠熙ヨリ島津久光へ書翰	十一月二十三日	一四二
一四二	島津久籌ヨリ伊集院平治・大久保利通へ書翰	十二月五日	一四二
一四三	島津久籌ヨリ大久保利通へ書翰	十二月五日	一四三
一四四	島津久籌ヨリ伊集院平治・大久保利通へ書翰	十二月五日	一四五
一四五	松平容保廻状	十二月九日	一四五
一四六	島津久籌ヨリ大久保利通へ書翰	十二月五日	一四七
一四七	近衛忠房ヨリ島津久光へ口述	十二月二十七日	一四七
一四八	横濱鎖港談判使節	一四八
一四九	土持平八報告	十二月晦日	一四八
一五〇	東郷伊八郎・中島源左衛門ヨリ即宗院住職へ書翰	十二月	一五五
一五一	徳川慶喜外七名連署建白	一五七
一五二	土持平八ヨリ琉球産物方掛へ報告	一五八

元治元年(甲子)

目次			
一五三	馬關ニ於テ汽船焼亡ニ就キ届書	京都二本松邸ニ於テ	正月二日
一五四	全上ニ就キ長州藩ヨリ届書	正月二日	一六三
一五五	全上ニ就キ肥後国大麻丸船頭ヨリ言上書	正月	一六四

一五六	奈良原・高崎長州へ汽船焼亡談判使命セラル	正月三日	一六四
一五七	山階宮御文	一六四
一五八	山階宮御還俗ニ就テ	正月	一六五
一五九	本田彌右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰 汽船焼亡云々	正月三日	一六六
一六〇	参考 安田助左衛門日記抄 元治二年正月二十九日	一六七
一六一	馬關ニ於テ蒸氣船焼亡ノ概況喜入攝津報知書	正月三日	一六七
一六二	高崎猪太郎書ヲ伊達公ニ呈ス 正月二十四日	一六八
一六三	参考 小松帯刀家内へ書翰 正月五日	一六九
一六四	禁中聞書 正月	一七〇
一六五	汽船安行丸買入達書 正月	一七〇
一六六	英夷ト和睦及扶助金ヲ与フ 正月八日	一七〇
一六七	英夷ト和睦及扶助金ヲ与フ 二月	一七一
一六八	久光公建言 近衛家蔵 正月七日	一七二
一六九	喜入攝津ヨリ在京小松帯刀へ報告 蒸氣船焼亡ニ就テ	正月九日	一七三
一七〇	汽船焼亡ノ顛末問答ノ概要 市來日記参照	一七四
一七一	折田要蔵建言 正月九日	一八二
一七二	九州各所視察ノ事実報告書 正月十日	一八三
一七三	道島正亮紀事抄 汽船焼亡事件長藩書翰 正月	一八五

一七四	全上ニ対シ返書	正月	一八六
一七五	久光公登營ノ予達	正月十三日	一八八
一七六	久光公從四位下左近衛權少将推任叙宣下	正月十三日	一八八
一七七	久光公朝議参予任命	正月十三日	一八九
一七八	久光公中川宮其他ニ叙任ヲ謝ス	正月十四日	一八九
一七九	久光御参内御心得非藏人ヨリ内達	正月十四日	一八九
一八〇	正月十四日ヲ以テ小倉滞在園田彦左衛門届書 汽船焼亡	正月十四日	一八九
一八一	汽船砲撃ニ就キ幕府達書	正月十五日	一九一
一八二	御城下各砲台大操練	正月十五日	一九二
一八三	新鑄長砲実檢	正月十五日	一九二
一八四	参考 小松带刀家族へ書翰	正月十五日	一九二
一八五	高崎正風山階宮諸大夫格ニ被加	正月十五日	一九三
一八六	長藩ノ暴為説 全上	一九三
一八七	御馬拝領御届書	正月十七日	一九三
一八八	英艦撃退ノ賞賜	正月十七日	一九四
一九〇	英艦撃退藩士賞金ヲ賜フ	正月十七日	一九五
一九一	久光公叙位ニ就キ公卿御廻訪	正月十八日	一九五

- 一九二 久光公二條城ニ於テ將軍家懇遇ヲ受ケ玉フ 正月十八日……………一九五
- 一九三 汽船焼亡ニ就キ前田孫右衛門照会書 正月十八日……………一九五
- 一九四 京都ニ於ケル達書 正月十九日……………一九七
- 一九五 市來正右衛門届書 正月二十日……………一九七
- 一九六 久光公御登城予達布告 正月二十四日……………一九八
- 一九七 綿商法ニ就キ注意 正月二十五日……………一九八
- 一九八 大久保一蔵ヨリ小松帯刀へ書翰及ヒ国風 正月二十六日……………二〇〇
- 一九九 下ノ關ニ於テ長州人汽船砲撃ニ就テ布達 正月二十七日……………二〇〇
- 二〇〇 参考 寺島宗則自記鈔……………二〇一
- 二〇一 松平大膳大夫家來差出候書付 汽船砲撃ニ就テ 正月二十九日……………二〇一
- 二〇二 長藩ヨリ外国船砲撃否ヤ伺并御指令 正月二十九日……………二〇二
- 二〇三 在京村山齊助書翰 宛名詳ナラスト雖モ小松・大久保両氏へ乎……………二〇三
- 二〇四 久光公御推任叙……………二〇六
- 二〇五 久光公大隅守御改名布告 二月……………二〇六
- 二〇六 久光公大隅守御改名布告 二月……………二〇六
- 二〇七 参考 道島正亮紀事鈔 二月……………二〇六
- 二〇八 本藩汽船馬關ニ於テ砲撃セラレタルヲ詰問使ヲ派遣セントス……………二〇七
- 二〇九 長州人濱崎カ綿積船ヲ焼ク……………二〇七

目 次

二二〇 兵庫在勤海軍教授頭取勝安房守万国公法奉呈ノ書牘 二月六日(慶応二年九)……………二〇八

二二一 益満休之助柴山良助ニ送ル書翰 二月八日……………二〇八

二二二 大坂留守居交迭ニ就テノ書翰 二月九日……………二〇九

二二三 久光公御官位宣下少将様卜称フヘク達書 二月九日……………二〇九

二二四 久光公推任叙布告 二月……………二二〇

二二五 久光公推任叙届書 二月十日……………二二〇

二二六 久光公御鞍置御馬拝領御届書 二月十日……………二二〇

二二七 久光公御参内御馬御拝領 二月十一日……………二二〇

二二八 久光公初テ二條城ヘ御登宮 二月十一日……………二二一

二二九 久光公特旨鯉魚数尾拝戴……………二二二

二三〇 諸郷私領ノ者勤方云々達書 元治二年二月十一日……………二二二

三二一 長州征討達書 二月十一日……………二二二

三二二 小倉在勤土持平八探訪届書 綿積船焼亡 二月十二日……………二二三

三二三 幕議内聞……………二二五

三二四 越・土・宇及ヒ久光公連署建言 十一日……………二二六

三二五 大坂留守居木場傳内ヨリ大久保一蔵ヘ書翰 二月十二日……………二二七

三二六 久光公御官位宣下布告 二月十二日……………二二九

三二七 徹夜ノ朝議……………二二〇

二三八	御城下数ヶ所砲台操練	二二一
二二九	久光公御用部屋通達書 二月十六日	二二一
二三〇	久光公参内心得	二二一
二三一	久光公御建言 二月	二二一
二二三	久光公御在京中在邸人員へ諭達 二月	二二三
二二三	四侯尹宮へ推参	二二四
二三四	長州征討達書 二月十六日	二二五
二三五	勝麟太郎方江入塾ノ徒給与伺 二月十七日	二二七
二三六	堺町・丸太町同所へ書付 二月十七日	二二七
二三七	二月十七日朝九條殿南之壁江墨ニテ大字ニ書付	二二八
二三八	二月十八日丸太町閑院宮御築地ニ書付	二二八
二三九	二月十九日水野殿へ御呼出申渡 折田要蔵呼出	二二九
二四〇	茂久公御刀御拝領 二月二十二日	二二九
二四一	久光公御刀御馬御拝領ノ布告 二月二十九日	二二九
二四二	二月二十三日三條大橋張札	二三〇
二四三	薩商大谷仲之進梟首及ヒ捨札 二月	二三一
二四四	銭相場布告 二月二十七日	二三四
二四五	火操練御出馬	二三四

目 次

二四六	長州征伐発表 二月二十七日	二三四
二四七	長州征討達書 二月二十七日	二三五
二四八	長州征伐出軍人名	二三六
二四九	在京兵操練久光公親臨	二五二
二五〇	島津少将大砲献上 二月二十九日	二五二
二五一	三月二日朝寺町三條下ル町升屋喜右衛門表戸ニ張紙	二五三
二五二	久光公ヨリ容堂公へ書翰 正月三日	二五四
二五三	本田親雄ヨリ大久保一蔵へ書翰 三月三日	二五四
二五四	折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ書翰 楠公社云々 三月四日	二五五
二五五	折田・三島ノ二名ヨリ大久保・伊集院へ書 大坂砲台事件 三月六日	二五六
二五六	在小倉土持探訪報告 三月八日	二五七
二五七	久光公ヨリ伊達宗城公へ御書翰 二月九日	二五八
二五八	久光公舞楽陪覽并詠歌 三月九日	二五八
二五九	將軍家在京中参内及ヒ式事ノ概略	二五八
二六〇	市來ヨリ寺師へ与ル書翰 三月九日	二五九
二六一	大島吉之助上申書 三月	二六〇
二六二	折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ書翰 三月十五日	二六二
二六三	道島正亮建言 三月十五日	二六三

- 二六四 久光公ヨリ伊達宗城公へ書翰 正月二十一日……………二六五
- 二六五 久光公ヨリ伊達宗城公へ書翰 三月二十六日……………二六五
- 二六六 銅銭式文通融云々藩令 三月二十七日……………二六六
- 二六七 三月晦日ヲ以テ重野厚之丞安長防事情探訪報告……………二六六
- 二六八 薩州御屋敷内へ廻文之写 三月……………二七六
- 二六九 久光公ヨリ伊達宗城公へ御書翰 四月三日……………二七八
- 二七〇 久光公ヨリ伊達宗城公へ御書翰 四月三日……………二七八
- 二七一 長州征討軍隊大操練……………二七八
- 二七二 御城下各所礮台操練……………二七八
- 二七三 久光賜暇御沙汰書 四月八日……………二七八
- 二七四 市來ヨリ寺師へ通信 四月八日……………二七九
- 二七五 蓑田傳兵衛ヨリ大久保一藏へ書翰 四月九日……………二八一
- 二七六 久光公御帰国之布告 四月十一日……………二八二
- 二七七 久光公其他御叙任……………二八三
- 二七八 元治元年四月十三日ヲ以市來正右衛門藝州廣島ヨリ遣シタル書翰ノ写……………二八三
- 二七九 久光公二條城へ御登宮 四月十四日……………二八六
- 二八〇 小松帶刀外二名二條城出頭ヲ命ス 四月十六日……………二八六
- 二八一 英艦卜戦争ノ褒賜 藩令 四月十六日……………二八六

二八二	日向国細島御預ケ所ニ被仰付	二八六
二八三	日向国細島御預リ所達書	二八七
二八四	大原重徳卿書翰 四月十八日	二八七
二八五	柴山彌八郎通信	二八八
二八六	久光公御帰国	二八八
二八七	久光公御帰国布達 四月二十日	二八九
二八八	海江田武次ヨリ大久保一藏へ書翰 四月二十三日	二八九
二八九	江戸知邸新納嘉藤次探訪報告 四月二十七日	二八九
二九〇	久光公下向達 四月二十八日	二九一
二九一	江戸知邸新納嘉藤次ヨリ大久保へ私翰 四月二十九日	二九一
二九二	江戸ニ於テ久木山泰蔵探訪報告 四月二十九日	二九三
二九三	四月二十九日將軍へ賜ハル処ノ詔書	二九三
二九四	久光公天盃頂戴ノ趣幕府へ届書	二九五
二九五	高割ヲ軍賦云々藩令 四月	二九五
二九六	或来状ノ中ノ抜書 島津三郎云々	二九五
二九七	源忠毗ヨリ小松帯刀へ書翰	二九六
二九八	薩州功罪案	二九六
二九九	久光公御退京ニ臨ミ御訓誡	三〇七

三〇〇	小倉滞在土持平八報告 汽船焼亡	五月三日	三〇九
三〇一	五月初旬洛中ノ形況報告	五月四日	三一四
三〇二	久光公御着城	三一五
三〇三	新納嘉藤次ヨリ中濱万次郎へ照会	五月九日	三一五
三〇四	御城下各所礮台遠撃操練	三一六
三〇五	五月十一日ヲ以テ井上大和報告	三一六
三〇六	五月十二日ヲ以テ在京西郷ヨリ大久保へ書牘	三一七
三〇七	五月十二日小松帶刀京師ノ事情大久保一蔵へ報告	三一八
三〇八	長州征討軍隊操練	三二二
三〇九	木場傳内ヨリ大久保一蔵江書翰	五月十六日(慶応二年カ)	三二二
三一〇	木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰 兵庫窮民云々	五月十六日(慶応二年カ)	三二三
三一一	江戸詰藩史年限縮小達書	五月十七日	三二四
三一二	小倉滞在園田探訪報告	五月十八日	三二四
三一三	五月二十一日天神橋へ張紙	三二五
三一四	折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ脇差ヲ贈ル 第一	五月二十一日	三二五
三一五	折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ脇差ヲ贈ル 第二	五月二十三日	三二六
三一六	大坂堂島張紙	三二六
三一七	江戸ニ於テ將軍家親書ヲ以テ閣老若年寄へ達書 藩内布達	五月二十八日	三二六

三二八	在京国老小松帶刀ヨリ喜入攝津へ私翰	五月二十九日	三二七
三一九	四月十三日長州ヨリ津和野江返翰 重野探偵	五月	三三〇
三三〇	御城下諸所操練	六月朔日	三三一
三三一	当時ノ物価 鹿兒島	六月朔日	三三一
三三二	議政所創立ノ達書	六月	三三二
三三三	議政所取建上申書	……	三三四
三三四	在京小松ヨリ急報 長藩多人數出京	六月二十七日	三三五
三三五	在江戸久木山泰藏 <small>行</small> 探訪書	六月十三日	三三五
三三六	勸農布達 藩達	六月十三日	三三七
三三七	六月五日夜京都騒動之一条本田様御家来ヨリ薩州御家来へ之来翰写	八月十三日	三三七
三三八	江戸知邸新納嘉藤次ヨリ大久保一藏へ報告	六月十四日	三四〇
三三九	水戸殿家来筑波屯集ノ輩取締	六月十六日	三四一
三三〇	淀辺へ人数差出云々 藩達	……	三四二
三三一	海江田彦之丞京地騒動一条見聞覚	六月二十六日	三四三
三三二	長藩暴発ノ形勢切迫ノ事実小松ヨリ大久保へ通信	六月二十七日	三四四
三三三	長藩京師暴動ノ形勢報告	六月二十七日	三四五
三三四	大島吉之助ヨリ大久保一藏へ贈ル書牘	六月二十七日	三四六
三三五	道島正亮存寄書	六月二十八日	三四七

三三六	鹿兒島米価	六月二十八日	三三八	
三三七	六月下旬大坂藩邸探訪届書		三三八	
三三八	近日雜報		三三九	
三三九	道島正亮家記抄	長州人入京ノ説ニ就テ藩兵上京等	七月十五日	三五一
三四〇	在京小松帯刀ヨリ大久保へ書牘	七月四日	三五二	
三四一	西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ報告	七月四日	三五二	
三四二	小松帯刀報告	七月四日	三五三	
三四三	七月四日大島吉之助ヨリ大久保一蔵へ送リタル書牘		三五五	
三四四	七月四日伊地知正治ヨリ大久保一蔵へ書牘		三五八	
三四五	七月四日ヲ以園田彦左衛門・鈴木壮七防長之事情探訪之届		三五九	
三四六	大坂辺へ被差出人数へ太守様御盃被下	七月六日	三五九	
三四七	天龍寺在陣ノ長州藩へ説得	七月八日	三六〇	
三四八	七月大坂辺へ一陣ノ人数至急出軍ニ付テ彈藥賦銃藥局上申	七月八日	三六〇	
三四九	在京小松帯刀ヨリ大久保一蔵へ照会	七月九日	三六三	
三五〇	大島吉之助ヨリ大久保一蔵へ書牘	七月九日	三六六	
三五一	木場傳内長州人上京云々ノ書翰	七月十日	三六八	
三五二	木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰	七月十一日(慶応二年カ)	三六九	
三五三	木場傳内ヨリ大久保一蔵へ楠公社御造立ニ就テ書翰	七月十日	三七〇	

三五四	黒田嘉右衛門書翰 七月十日	三七〇
三五五	木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰 七月十二日	三七一
三五六	七月十三日御軍賦役大山格之助從浪華來翰写 市來廣貫へ	三七一
三五七	天龍寺討手配	三七三
三五八	木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰 兼春一条(明治二、三年カ)	三七四
三五九	天龍寺へ楯籠ル長軍乱入	三七四
三六〇	勅使九州御下向ニ就テ云々 七月十八日(文久三年カ)	三七六
三六一	大久保一蔵ヨリ小松帶刀へ書翰 七月十九日(慶應元年カ)	三七九
三六二	七月十九日薩藩戦争之次第同藩ニテ取調候書付	三八〇
三六三	宮内・野村戦死 七月十九日	三八三
三六四	町田民部 <small>成久</small> 同僚へ報告	三八三
三六五	在京御軍賦役報告	三八四
三六六	御褒賞 七月	三八六
三六七	禁闕守護兵出発	三八六
三六八	小松帶刀殿ヨリ志々目獻吉殿直話ヲ承り同人ヨリ承り候話	三九〇
三六九	七月十九日長藩士及ヒ浮浪犯闕ノ事実本藩士前田十郎當時在京尹宮附屬ノ員ニアリテ	
	宮ノ御親話及ヒ親シク見聞ノ譚	三九一
三七〇	道島正亮家記抄 或ル大夫ノ話	四〇九

三七一	舊邦秘録 本藩戦功御褒賞 七月二十日	四一〇
三七二	小松帯刀ヨリ大久保一蔵へ書翰 七月二十日	四一一
三七三	小松帯刀ヨリ大久保へ戦況報告 七月二十日	四一二
三七四	小松帯刀ヨリ大久保一蔵へ戦況概報 七月二十日	四一四
三七五	七月二十日小松帯刀ヨリ大久保一蔵へ書状	四一四
三七六	大島吉之助ヨリ大久保一蔵へ京師戦況概報 七月二十日	四一四
三七七	七月二十日在京御兵具方肝煎職 <small>足輕頭</small> 席ノ川路正之進利 <small>良</small> 戦争事家族へ通信書牘	四一六
三七八	内田氏宿許へノ書状写 七月二十日	四一七
三七九	薩藩天龍寺討伐ノ概況 七月	四一九
三八〇	薩州之手ニ分取品ノ内軍令状	四二〇
三八一	川上助八郎接戦	四二一
三八二	長賦山崎天王山敗走之時捨置タル書 七月	四二一
三八三	四藩連署建言 長州処分ニ就テ	四二五
三八四	大山格之助書翰 七月二十一日	四二六
三八五	御軍役奉行伊地知正治書状写 七月二十三日	四二八
三八六	七月二十三日ヲ以テ長藩征討ノ発令	四三二
三八七	舊邦秘録 七月二十二日	四三二
三八八	薩州京師屋敷留守居ヨリ江戸留守居江之書状写 七月二十六日	四三四

三八九	薩州分捕届書 七月二十六日	四三五
三九〇	七月二十六日仙臺留主居ヨリ廻達写	四三六
三九一	小松帶刀ヨリ大久保一藏へ送ル書牘 七月晦日	四三七
三九二	舊邦秘録 七月	四四〇
三九三	島津備後・同圖書某詩歌	四四〇
三九四	大島吉之助ヨリ大久保一藏へ贈ル書牘 八月朔日	四四二
三九五	舊邦秘録	四四四
三九六	八月於京都御届宮内彦二其外戦死及ヒ分捕品届書	四五〇
三九七	長賊撃退戦功褒賞 本藩 八月三日	四五一
三九八	琉球国王代替云々八月十五日因幡守様へ被差出之	四五二
三九九	小倉滞在御裁許掛園田彦左衛門殿届書 八月四日	四五二
四〇〇	藩達 長防開戦ニ就テ 八月五日	四五七
四〇一	馬關戦争 八月五日	四五七
四〇二	薩州借り船下ノ關近海ニ難船ノ顛末 八月五日	四六一
四〇三	馬關景況在京高橋縫殿報告 八月五日・七日	四六一
四〇四	長州へ夷船襲来及戦争候形行小倉滞在園田彦左衛門聞合書写 舊邦秘録 八月八日	四六三
四〇五	長崎在勤汾陽次郎右衛門戦況報告 舊邦秘録 八月十三日	四六五
四〇六	小倉出張園田彦左衛門馬關戦況見聞届書 舊邦秘録 八月十三日	四六七

四〇七	久光公照國神社御祭文……………	四六九
四〇八	長州征伐出軍人名 八月二十五日……………	四七〇
四〇九	舊邦秘録 八月二十六日……………	四八四
四一〇	討手ノ諸侯 八月二十五日……………	四八五
四一一	島津又六郎以下長州征討總督人名……………	四八五
四一二	長州征伐出陣名簿 八月……………	四八六
四一三	小松帶刀御褒賞 八月二十八日……………	四八八
四一四	木場傳内ヨリ大久保一藏へ書翰 八月二十八日……………	四八九
四一五	本藩国老小松帶刀於京師長州処分意見上申……………	四八九
四一六	一橋慶喜公褒賞書 八月……………	四九〇
四一七	全上幕府ヨリ……………	四九一
四一八	本藩ヨリ幕府へ窺書 八月……………	四九一
四一九	長州征伐出軍期日其外達書 八月……………	四九一
四二〇	一橋中納言殿ヨリ褒賞 八月……………	四九二
四二一	中川修理大夫殿ヨリ使者ヲ以御送り相成候目錄……………	四九二
四二二	川上助八郎所有刀劍ニ題シ久光公之御作……………	四九三
四二三	嘉永七年五月八日ヲ以テ水戸烈公ヨリ照國公ニ送ラレシ書牘……………	四九三
四二四	照國公ヨリ水戸烈公へ送ラレシ御書 嘉永七年四月十二日……………	四九八

四二五	照國公ヨリ伊達宗城公へ答書	安政四年十月二十九日	五〇四
四二六	万石以上之面々江戸在住復旧達書	九月朔日	五〇八
四二七	御城下六組ノ組織變更達書	九月	五〇九
四二八	本藩征討軍賦		五〇九
四二九	長州征討御手配之次第		五一二
四三〇	藩内錢相場達書	九月三日	五一六
四三一	島津圖書御感狀	九月五日	五一六
四三二	小松帶刀へ御感狀	九月五日	五一七
四三三	桂右衛門大目付ニ昇進	九月	五一七
四三四	地頭職復旧布達	藩令 九月八日	五一七
四三五	議政所中止	九月八日	五一八
四三六	西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰	九月八日	五一八
四三七	島津仲大目付格ニ昇進	九月十六日	五二〇
四三八	西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰	勝安房守へ面晤賞讃	九月十六日
四三九	太守様御鞍置御馬御拝領ノ照會	九月十七日	五二三
四四〇	安田助左衛門日記抄	九月十九日	五二四
四四一	地頭職被命人名		五二五
四四二	蛤御門戦争御褒賞	九月二十日	五二七

四四三	飯野澤原開墾地……………	五二七
四四四	在崎汾陽報告及外國新聞紙 九月二十日……………	五二七
四四五	大坂城ニ於テ軍議ニ列シタル諸藩人名……………	五二八
四四六	大久保一藏ヨリ西郷吉之助ヘ書翰 九月二十三日(慶応二年カ)……………	五三一
四四七	大樹公外國人応接云々上奏書 九月二十六日……………	五三一
四四八	安田助左衛門日記抄人吉異変……………	五三一
四四九	言路ヲ開カル 藩令 九月晦日……………	五三一
四五〇	松木・五代ノ兩人横濱ニ放タル……………	五三二
四五一	長州征伐ノ紀事……………	五三三
四五二	吉川監物ヨリ本藩高崎ヘ依頼ノ書牘 十月二日……………	五三四
四五三	小松ヨリ大久保ヘ贈ル書牘 十月八日……………	五三四
四五四	西郷吉之助ヨリ大久保一藏ヘ贈ル書翰 十月八日……………	五三六
四五五	木場傳内ヨリ大久保一藏ヘ書翰 十月八日……………	五四〇
四五六	十月十二日小松ヨリ大久保ヘ書牘……………	五四一
四五七	安田助左衛門日記抄 十月十四日……………	五四二
四五八	十月十五日折田要藏ヨリ大久保一藏ヘ送ル書牘ノ略……………	五四三
四五九	御城下各砲台遠撃試験……………	五四六
四六〇	在崎汾陽報告 十月十九日……………	五四六

四六一	町田民部褒賞	十月十七日	五四六
四六二	小松帶刀家内へ書翰	十月二十日	五四七
四六三	十月二十一日小倉出張園田報告		五四八
四六四	大島吉之助ヨリ総督尾州侯へ呈出ノ書	十月二十二日	五四九
四六五	在京西郷ヨリ蘆屋在陣副惣督島津主殿へ照会	十月二十三日	五五〇
四六六	喜入攝津長州征伐ニ付出陣被命	十月二十三日	五五〇
四六七	西郷吉之助ヨリ小松帶刀へ照会	十月二十五日	五五〇
四六八	江夏蘇助ヨリ海江田武次へ書翰	十月二十八日	五五一
四六九	十月二十九日太守公御親書ヲ以御布令		五五二
四七〇	津田山三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	十月二十九日	五五二
四七一	征討軍出發日割		五五三
四七二	長州討伐之諸隊出發日限布達	十月	五五六
四七三	大久保一蔵ヨリ小松帶刀へ書翰		五六一
四七四	海陸軍奨励		五六二
四七五	地頭職年頭八朔等ノ次第	十月	五六三
四七六	尾張大総督諸藩へ示達		五六四
四七七	外国米輸入	十月	五六六
四七八	黒田嘉右衛門 <small>清綱</small> 旧名小倉其他事情探訪報告	十月	五六六

四七九	折田要蔵探訪報告	五七四
四八〇	銃薬製造掛上申書	五八〇
四八一	銃薬製造掛上申書第二	五八二
四八二	救助方上申	五八八
四八三	救助方上申第二 正月(慶応二年カ)	五八九
四八四	改正軍隊職制 正月(慶応二年カ)	五九〇
四八五	海軍會計	五九一
四八六	奈良原幸五郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	五九四
四八七	京都在營薩兵長州発途其他報告	五九四
四八八	在江戸柴山良助報告 十月朔日	五九五
四八九	薩州兵近日軍装ニテ行軍致スニ付市中へ触達	五九七
四九〇	蘆屋在陣黒田嘉右衛門 <small>清綱</small> 報告 十一月五日	五九七
四九一	小松帯刀報告 十一月六日	五九九
四九二	諸大名参勤妻子在府復旧云々永田・大野ノ書翰	六〇一
四九三	銅錢価騰貴藩達 十一月十一日	六〇二
四九四	伴勝三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰 蘆屋陣中ニ於テ	六〇二
四九五	大山格之助 <small>良綱</small> 信書ノ略 十一月十三日	六〇二
四九六	酒井十之丞ヨリ黒田嘉右衛門へ軍議并攻入期日云々書翰	六〇三

四九七	西郷隆盛報告 十一月十五日	六〇三
四九八	伴勝三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書状 十一月十六日	六〇三
四九九	中津藩菅沼ヨリ黒田へ書翰 十一月十六日	六〇四
五〇〇	小松帯刀ヨリ島津主殿外二人へ書翰 十一月十七日	六〇四
五〇一	島津主殿ヨリ市來廣貫へ蘆屋陣中ヨリノ書翰 十一月十九日	六〇五
五〇二	木場直右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰 十一月二十一日	六〇七
五〇三	本藩出軍各隊へ達 十一月二十一日	六〇七
五〇四	三暴臣首級実檢之藩達 十一月二十日	六〇八
五〇五	御両殿様御親諭	六〇八
五〇六	西郷隆盛ヨリ大久保一蔵へ与ル書 十一月二十五日	六〇八
五〇七	海江田武次ヨリ大久保一蔵へ書翰 十一月二十六日	六一〇
五〇八	総督尾州侯ヨリ廻達 十一月二十七日	六一〇
五〇九	長州征討ノ軍令 藩令 十一月	六一一
五一〇	長州征伐ニ付出軍ノ面々武運長久之御祈願云々 十一月	六一三
五一一	筑前国蘆屋中ニ布告	六一四
五二二	五卿各藩へ御預ケ達書	六一四
五二三	長州御征伐ニ就キ萩表海道先鋒之御受書	六一四
五二四	黒田嘉右衛門報告	六一四

五二五	西郷吉之助長州処分建議	六一五
五二六	尾州惣督ヨリ蘆屋陣営へ達	十一月.....	六一六
五二七	蘆屋陣中布達	十一月.....	六一七
五二八	官軍配兵	六一八
五二九	天賜御剣之御拵書	六一八
五三〇	江戸在勤市來次十郎報告	<small>番頭兼用人</small> 十二月二日.....	六一〇
五三一	長防征討出軍伊地知正治届書	十二月三日.....	六一〇
五三二	染川五郎左衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	蘆屋陣中ヨリ 十二月三日.....	六一一
五三三	大坂東町奉行松平駿河守赴任ノ報	十二月五日.....	六一二
五三四	小松帯刀報告	十二月七日.....	六一二
五三五	蘆屋在陣人数賄一件黒田嘉右衛門ヨリ問合	十二月八日.....	六一三
五三六	三條初請取方等ノ儀筑前へ御達	六一四
五三七	海江田信義ヨリ大久保一蔵へ書翰	十二月十日.....	六一四
五三八	子之十二月薩州ヨリ岩國へ使節口上写	六一五
五二九	安田助左衛門日記抄	十二月十日.....	六一八
五三〇	五卿月形洗蔵・早川養敬へ依頼状	十二月十二日.....	六一九
五三一	海江田武次ヨリ大久保一蔵江書翰	十二月十三日.....	六二九
五三二	安田助左衛門日記抄	十月(十二月九).....	六三〇

目次

五三三	總督ヨリ以使者出軍ノ各藩へ通達……………	六三二
五三四	總督尾州侯ヨリ三條實美以下五名へ達文……………	六三一
五三五	兩御旗本并御先手等ノ諸隊操練……………	六三二
五三六	常野脱走ノ浮浪登京ノ風分アルニ依リ洛中ノ警衛……………	六三一
五三七	御城下各所砲台操練……………	六三三
五三八	番兵各隊操練……………	六三三
五三九	筑波山暴動ノ始末或人通報……………	六三三
五四〇	毛利家所刑ノ届書……………	六三五
五四一	蘆屋陣中ヨリ在陣人数賄一件返書……………	六三五
五四二	物価届書……………	六三六
五四三	小倉出張吉井幸輔報告……………	六三九
五四四	柴山良助書牘……………	六四〇
五四五	鹿兒島諏訪神社社司本田三位願書……………	六四二
五四六	總督尾張殿ヨリ達……………	六四二
五四七	黒田嘉右衛門同僚へ贈ル書牘……………	六四二
五四八	島津主殿ヨリ島津又六郎へ五卿請取一条之照会……………	六四六
五四九	城下士五人組ノ命令……………	六四六
五五〇	諸郷大砲備一組……………	六四七

- 五五一 諸郷征討軍隊長以上人名…………… 六四八
- 五五二 在陣人数へ被下賄料一件…………… 六五〇
- 五五三 征討軍出發宿泊割…………… 六五〇
- 五五四 戦地里程…………… 六五一
- 五五五 鹿兒宿陣…………… 六五一
- 五五六 長崎通信 外国新聞紙抄案…………… 六五二
- 五五七 近衛忠房・忠熙ヨリ島津久光へ書翰 正月十六日…………… 六五四
- 五五八 島津久光・茂久褒賞…………… 六五四
- 五五九 近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰…………… 六五五
- 五六〇 野宮定功ヨリ島津久光へ書翰 二月五日…………… 六五五
- 五六一 長州征伐事件書付…………… 六五六
- 五六二 坊城俊克・野宮定功ヨリ島津久光へ書翰 二月十三日…………… 六五六
- 五六三 野宮定功・坊城俊克ヨリ島津久光外二名へ書翰 二月十三日…………… 六五六
- 五六四 坊城俊克・野宮定功ヨリ島津久光へ書翰 二月十五日…………… 六五七
- 五六五 小笠原家留守居山田平右衛門覚書 二月二十八日…………… 六五七
- 五六六 近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰 二月十五日…………… 六五八
- 五六七 御賜物覚 二月…………… 六五八
- 五六八 近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰 三月二十五日…………… 六五九

目次

五六九	近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰	四月六日	六五九
五七〇	近衛忠房・忠熙ヨリ島津久光へ書翰	四月八日	六六〇
五七一	大原重徳ヨリ島津久光へ書翰	四月十日	六六〇
五七二	大原重徳ヨリ大久保利通へ書翰	四月十四日	六六〇
五七三	伊地知正治ヨリ伊地知貞馨へ書翰	四月十七日	六六三
五七四	大原重徳ヨリ島津久光へ書翰	四月十八日	六六三
五七五	近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰	四月十七日	六六五
五七六	近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰	五月六日	六六五
五七七	大原重徳ヨリ島津久光へ書翰	五月八日	六六六
五七八	大原重徳ヨリ島津久光へ書翰	風説書	六六六
五七九	伊地知貞馨ヨリ大久保利通へ書翰	五月十二日(慶応三年カ)	六六九
五八〇	久光公ヨリ小松帶刀へ与ル書	五月十四日	六六九
五八一	新納嘉藤二ヨリ吉井友實へ書翰	五月十九日	六七〇
五八二	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰	六月朔日	六七〇
五八三	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰	六月朔日	六七一
五八四	西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰	尹宮及献錢等ノ事	六七三
五八五	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰	七月六日(明治四年カ)	六七五
五八六	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰	六月二日	六七五

- 五八七 西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰 六月六日……………六七六
- 五八八 西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰 六月十四日……………六七六
- 五八九 西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰 六月十四日……………六七八
- 五九〇 木場傳内ヨリ西郷隆盛へ書翰 六月二十一日……………六七九
- 五九一 西郷隆盛ヨリ国許御側御用人衆等へ書翰 六月二十五日……………六七九
- 五九二 西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰 六月二十五日……………六八〇
- 五九三 西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰 六月二十八日……………六八一
- 五九四 議政所之事 認者不明……………六八一
- 五九五 飛鳥井雅典・野宮定功ヨリ島津久光へ書翰 七月三日……………六八二
- 五九六 西郷隆盛ヨリ木場傳内へ書翰 七月九日……………六八三
- 五九七 島津久光ヨリ飛鳥井雅典・野宮定功へ返翰 七月二十一日……………六八三
- 五九八 近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰 八月五日……………六八四
- 五九九 近衛忠房ヨリ島津久光・茂久へ書翰 八月十二日……………六八五
- 六〇〇 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰 八月十七日……………六八六
- 六〇一 島津久光上洛ヲ促ス建言書……………六八七
- 六〇二 西郷隆盛ヨリ島津主殿・求馬へ書翰 十一月二十日……………六八八
- 六〇三 島津主殿ヨリ島津又六郎外二名へ書翰 十一月二十三日……………六八九
- 六〇四 近衛忠房ヨリ島津久光・茂久へ書翰……………六九〇

慶應元年（乙丑）

六〇五	舊邦秘録	正月	六九三
六〇六	各所砲台大操練	六九三
六〇七	藩内雜報	道島家記抄	正月十五日	六九三
六〇八	橋口吉之丞外六名歎願書	正月	六九四
六〇九	復古記	（明治元年カ）	六九六
六一〇	諸大名參勤交代復旧達書	正月	六九七
六一一	大久保一蔵ヨリ西郷吉之助・蓼田傳兵衛へ書翰	<small>五卿太宰府へ移住</small>	二月二日	六九八
六一二	吉井幸輔ヨリ西郷吉之助・蓼田傳兵衛へ書翰	<small>五卿太宰府へ移住</small>	二月二日	六九九
六一三	西郷吉之助ヨリ蓼田傳兵衛へ書翰	二月五日	七〇〇
六一四	舊邦秘録	二月	七〇一
六一五	五卿御預ケノ達書	二月十四日	七〇一
六一六	海江田武次ヨリ蓼田傳兵衛へ書翰	二月十七日	七〇二
六一七	道島家記抄	二月十八日	七〇三
六一八	道島家記抄	<small>京攝雜報</small>	七〇四
六一九	小松帶刀ヨリ西郷・蓼田へ書翰	二月二十四日	七〇五
六二〇	大久保一蔵ヨリ西郷吉之助・蓼田傳兵衛へ書翰	<small>阿部松平兩閣老上京事件其外</small>	二月二十四日	七〇六
六二一	吉井幸輔ヨリ西郷吉之助・蓼田傳兵衛へ書翰	二月二十四日	七〇九

六二二	舊邦秘録	二月	七二〇
六二三	三條初御呼寄ノ儀暫御猶子ノ儀幕へ御達	二月	七二二
六二四	道島家記抄		七二二
六二五	舊邦秘録	二月	七二二
六二六	高島右衛門ヨリ小松・大久保へ書翰	三月六日	七二二
六二七	大久保一蔵ヨリ西郷・蓼田へ書翰	三月六日	七二三
六二八	鹿兒島ノ形勢	六月十七日	七二四
六二九	大久保一蔵ヨリ蓼田傳兵衛へ書翰	三月十五日	七二四
六三〇	寺島宗則自記抄	<small>留學生及王政復古ノ事ヲ 英國外務大臣ニ説得ス</small>	七二五
六三一	道島家記抄	藩内雜事 三月	七二七
六三二	小松帶刀ヨリ大久保一蔵へ書翰	三月二十五日	七二七
六三三	道島家記抄		七二八
六三四	和田権五郎外二名ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	四月十四日	七二九
六三五	久光公御登城云々	四月晦日	七二〇
六三六	舊邦秘録	大原重徳卿ヨリ久光公へ書翰	五月八日
六三七	土持平八報告	防長ノ形勢探訪	五月十一日
六三八	小倉出張土岐新兵衛報告	長防探訪	五月十一日
六三九	道島家記抄	陸小姓上京	五月
			七三〇

六四〇	西郷隆盛ヨリ黒田清綱へ書翰	五月二十六日	七三一
六四一	土岐新兵衛小倉ヨリ報告	閏五月六日	七三一
六四二	島津主殿・關山胤宗門掛	閏五月	七三二
六四三	土岐新兵衛小倉ニ於テ探訪報告	閏五月十二日	七三三
六四四	江戸通信 錢相場	七三五
六四五	幡島三郎ヨリ黒田清綱へ書翰	黒田氏書類 閏五月二十八日	七三五
六四六	蓑田傳兵衛ヨリ黒田嘉右衛門へ書	太宰府へ云々 黒田氏書類 閏五月二十九日	七三七
六四七	長州討入来ル五日ト決定云々達書	舊邦秘録	七三八
六四八	園田彦左衛門・土持平八小倉ニ於テ探問報告	六月十二日	七三八
六四九	當時ノ米価 鹿兒島	七四一
六五〇	道島正亮建言	六月中旬	七四一
六五一	本藩士某勝安房守對話ノ要点	舊邦秘録	七四二
六五二	長防ノ動靜探訪報告	六月十八日	七四三
六五三	文久二壬戌ヨリ本年ニ至ル出来事	舊邦秘録 六月十八日	七四七
六五四	藩内雜事 道島家記抄	六月二十四日	七四八
六五五	藩内事情 道島家記	七四八
六五六	内山伊右衛門書状略写	道島家記	七四八
六五七	會薩離間策ニ就テ洛中市街へ内示書	七四九

六五八	道島家記鈔	七五〇
六五九	中路権右衛門報告 大坂ノ風説	七月朔日	七五〇
六六〇	七月朔日大御目附御廻文写	七五四
六六一	藩内物価 道島家記抄	七五四
六六二	小倉滞在園田彦左衛門届書	七月二十七日	七五五
六六三	出兵御賞詞 舊邦秘録	七五七
六六四	大奥取締令 藩令近衛家付ケ女中へ 舊邦秘録	七月	七五七
六六五	毛利淡路吉川監物上坂ノ上旅宿云々達書 舊邦秘録	七月	七五九
六六六	鹿兒島物価 道島家記抄	八月九日	七六一
六六七	長州進発ニ付テ風説	七六一
六六八	落首	七六一
六六九	佛国ニ於テ薩藩家老石垣銳之助商社締結約条書	八月二十六日	七六一
六七〇	土持平八廣島ヨリ報告	八月二十日	七六三
六七一	道島家記抄 藩内ノ事情	八月二十五日	七六五
六七二	薩州為替金事件 赤松大三郎書翰參看	七六六
六七三	紡織取扱人ホーム雇ヒ書之事	十二月二十二日	七六七
六七四	鉄製軍艦詠文証書	十二月二十二日	七六八
六七五	種々機械及ヒ各種ノ事業開發セムトス	七六九

目次

六七六	西郷吉之助ヨリ大久保・菱田へ書翰	八月二十八日	七七二
六七七	西郷吉之助ヨリ大久保・菱田へ書翰	八月二十八日	七七三
六七八	征長解兵一件	七七四
六七九	長州人上京探聞届書	九月六日	七七八
六八〇	毛利父子島津へ書翰	九月八日	七七八
六八一	舊邦秘録 大小監方ヨリ宍戸備後之介并諸隊へ御札問之条目	九月九日	七七九
六八二	京都飛脚便	九月八日	七七九
六八三	島津兄弟御褒賞	九月十一日	七八〇
六八四	市來次十郎英・佛・蘭三国ノ軍艦攝海へ廻航ノ報	九月十三日	七八〇
六八五	舊邦秘録 藩内事情	七八一
六八六	道島家記抄 京都ノ説	九月二十三日	七八一
六八七	薩州家来ヨリ建白 内田仲之助名	九月二十九日	七八一
六八八	舊邦秘録	九月二十九日	七八二
六八九	鹿兒島雜報	九月十九日	七八四
六九〇	菱田傳兵衛ヨリ大久保一蔵へ鹿兒島ノ形況ヲ報ス	九月二十九日	七八五
六九一	菱田傳兵衛ヨリ西郷へ送ル書	九月二十九日	七八六
六九二	樺山資紀書翰	九月二十九日	七八七
六九三	舊邦秘録 藩内軍賦	九月	七八八

六九四	西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	九月二十五日	八〇〇
六九五	阿部松前謹慎云々之照会	十月三日	八〇二
六九六	道島家記抄 当時鹿兒島ノ形況	八〇二
六九七	肥後人吉藩内訌	十月九日	八〇二
六九八	肥後国求磨紛乱事実大口郷地頭談合役木脇次郎右衛門探偵届書	十月九日	八〇四
六九九	五代才助巴理斯ヨリ桂右衛門へ書翰	十月十三日	八〇七
七〇〇	吉井幸輔ヨリ西郷・蓑田へ報告	十月十九日	八〇九
七〇一	蓑田ヨリ西郷・大久保へ書翰	十月二十日	八一〇
七〇二	小倉在勤土岐新兵衛探聞報	十月晦日	八一
七〇三	内田仲之助兵庫開港不可建言 先鋒願	八二
七〇四	攝海へ異船渡来云々藩令	十月	八二
七〇五	道島家記抄 鹿兒島ノ形況	十一月三日	八二三
七〇六	拙修蟻睡へ英国ヨリノ書翰	十一月八日	八二三
七〇七	英国ノ事情報告 五代才助	八二四
七〇八	在英国關研蔵書翰	十一月八日	八二五
七〇九	幕府ヨリ尋問ノ節御答振ノ大略 前紙ノ別紙	八二七
七一〇	江戸邸引払説 道島家記抄	八二九
七一一	關研蔵英国龍動府ヨリ野村壮七へ書翰	十一月十一日	八二〇

目次

七二二	西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛へ京坂ノ事情ヲ告ク	十一月十一日	八二三	
七二三	在廣嶋土持左平太探聞報告	十一月十一日	八二四	
七二四	田沼攝海へ来ル云々	西郷ヨリ黒田へ書翰	十一月十四日	八二六
七二五	全上	十一月七日	八二六	
七二六	黒田嘉右衛門ヨリ西郷吉之助へ書翰	福岡内証ヲ報ス	十一月十五日	八二六
七二七	琉球国領主トモムプラント契約	十一月十九日	八二七	
七二八	薩隅日三州兼琉球国太守家臣石垣銳之助等白山ト条約		八二七	
七二九	在廣嶋土持左平太防長事情探聞報告	十一月二十日	八二八	
七二〇	於横濱木村道之助・古屋作右衛門ヨリ直話承候次第	寅正月三日廻ル	十一月二十一日	八三四
七二一	道島家記抄 御封書写	十一月七日	八三六	
七二二	小倉在勤土岐新兵衛報告	十一月晦日	八三六	
七二三	桂右衛門ヨリ島津求馬・伊集院左中へ書翰	長崎及ヒ京攝ノ事情	十二月六日	八三九
七二四	國泰寺ニ於テ穴戸等糺問之次第	土岐新兵衛報告	十二月六日	八四二
七二五	道島家記抄		八四四	
七二六	西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰	京都ノ動靜報告	十二月六日	八四四
七二七	西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰	十二月六日	江戸邸引松云々	八四六
七二八	在英国出泉水蔵ヨリ中原猶介へ書翰	出水ハ寺島宗則菱名	十二月七日	八四七
七二九	在廣嶋土持佐平太探訪報告	十二月九日	八五三	

七三〇	小倉滞在土岐新兵衛探訪報告	十二月九日	八五七
七三一	黒田嘉右衛門ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰	大坂ヨリ	八五八
七三二	十二月十六日一橋中納言殿ヨリ御礼		八六一
七三三	伊達遠江守ヨリ桂右衛門へ書翰	十二月十七日	八六一
七三四	道島家記抄		八六二
七三五	本藩歳入調	十二月	八六二
七三六	御船奉行届書船頭水手切米払増減	十二月	八六三
七三七	道島家記抄	鹿兒島事情	八六三
七三八	薩藩長州ニ密使ヲ派遣シテ連衡ヲ謀ル		八六四
七三九	当時各藩評判		八六六
七四〇	乙丑十二月頃京攝事情	記者詳ナラス蓋村山下総ナラン乎	八七一
七四一	横濱来書中異人ノ説話	薩州学生十五人云々	八七二
七四二	風悔情事申渡	無名	八七三
七四三	夢マボロシ記		八七五
七四四	石腦油ノ効用	英国刊タイムスト名付ル新聞紙ヨリ抄出ス	八八〇
七四五	西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛へ書翰	蘆屋陣中	八八一
七四六	長州処分	正月	八八一
七四七	木場傳内ヨリ大久保利通へ書翰	二月朔日	八八二

七四八	今井榮ヨリ黒田清綱・星山矢之助へ書翰	二月十日	八八三
七四九	對馬藩平田大江ヨリ西郷吉之助へ書翰 藩内紛擾ヲ告ク	二月二十五日	八八三
七五〇	慶應元年吉村才之丞・寺師次右衛門・伊集院四郎建言	二月	八八三
七五一	太宰府在營三原・關山ヨリ黒田へ書翰	三月五日	八九五
七五二	黒田彦左衛門ヨリ同嘉右衛門へ書翰 以下三十二通	三月五日	八九六
七五三	幡島三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	三月九日	八九七
七五四	西田彌四郎外一名ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	三月九日	八九八
七五五	大山彦太郎ヨリ黒田嘉右衛門へ面会ヲ請フノ書翰	三月九日	八九八
七五六	蓑田傳兵衛ヨリ黒田嘉右衛門外二名へ書翰	三月十三日	八九九
七五七	黒田嘉右衛門ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰	三月十七日	八九九
七五八	關山新兵衛・三原次郎左衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	三月十七日	九〇〇
七五九	今井榮ヨリ黒田嘉右衛門・星山矢之助へ書翰	三月十九日	九〇〇
七六〇	今井榮・磯部勘平ヨリ黒田嘉右衛門・星山矢之助へ書翰	三月二十二日	九〇一
七六一	黒田嘉右衛門宛因許御軍役奉行・御軍賦役沙汰書	三月二十八日	九〇二
七六二	今井榮ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	四月六日	九〇三
七六三	黒田嘉右衛門ヨリ横井・大里・和田へ書翰	四月十四日	九〇四
七六四	對州藩多田莊藏ヨリ黒田嘉右衛門外二名へ書翰	四月十四日	九〇四
七六五	新納嘉藤ニヨリ大久保利通へ書翰	四月二十七日	九〇五

七六六	伊地知貞馨ヨリ大久保利通へ書翰	四月七日(明治元年カ)	九〇六
七六七	南大一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰	五月八日	九〇八
七六八	企上南カ書ニ対シ本澤甚兵衛鞍掛馬十郎ヨリ黒田へ書翰	五月八日	九〇八
七六九	近衛忠熙書翰	五月十日	九〇九
七七〇	ジャパNDERリーヘラルド紙抄訳	五月三十日(明治四年カ)	九〇九
七七一	台湾事件関係交渉(明治六年カ)		九〇九
七七二	新納嘉藤ニヨリ大久保利通へ書翰	六月二十九日	九一二
七七三	砲術館造立付砲術稽古被仰付	六月	九一三
七七四	督府江建白写一	七月	九一四
七七五	督府江建白写二	八月	九一四

〔表紙〕

忠義公史料

文久三年 自一月
至四月

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

一〔藤井良節ヨリ中山實善へ書翰〕

此般

御贈官御一条ニ付、

宣旨・位記・口

宣案御受之手続キ委細承合、早々申上越候様御掛合之

趣逐一致承知、即刻参 殿、極内

〔近衛忠経〕
関白様江奉窺候処、從

上卿識事武伝へ被相渡、御月番之從伝

奏直ニ御渡しニ可被成事と被 思召候得共、当伝

奏ニて承合可申旨 仰候ニ付、早速野々宮家へ参り、

雜掌へ出会申入候処、此内水戸御贈官之例有之候得共、

是は御三家之先例として、從伝

奏諸司代^前を被召御渡しニ相成事候得共、薩州家のはい

か、可相成哉之旨ニて、委細相窺為知可申との事故、

尚申入置候は、此度薩州家御贈官之義は

勅諭ニ出候事ニて、申望候例とハ訳も相變り候御事ニ

付、何卒從伝

奏御直ニ相渡しニ相成処ニ被仰付度旨、申述置申候、

尤無左候ては

叡慮ニ出候所詮も無御座候間、屹と其運ニ相成候様請

合可申との事ニ御座候、尚又

殿下并議

奏方へも相願置可申候間、御使之義は早く御差立ニ相

成候様有御座度奉存候、

一女房奉書と申義於 御国申馴候事ニ御座候へ共、御昇

進等之事ニ一向無之筋ニ付、段々承合申候へ共相分り

不申、依之勘考仕申候ニ、第一

御贈官之

宣旨一通、次ニ位記一通、口

宣案一通此一通之事ヲ女房奉都合三通御渡し御定規ニ御座候由、しかし御家ニ付て何そ

御訖柄被為在、女房

奉書と申事御座候哉承知仕置度奉存候、

右は承合候手続極急飛脚を以早々申上越候、以上、

正月二日辰ノ刻

藤井良節正徳

中山中左衛門殿

島津忠承氏所藏本にて校訂

二〔藤井良節ヨリ中山實善へ書翰〕

〔松平慶永〕 〔山内豊信〕

春嶽様・容堂様御事、正月十二三日比蒸気船より大坂

へ御乗廻之処ニ御決定相成、二十日比迄ニは御着之賦

ニ候旨、十二月二十五日仕立飛脚を以、岩下〔佐次〕右衛

門より申越申候、御国へは別段申上候旨ニ候得共、為

念申上候、一橋卿等之義も御座候間、別紙書面其俣奉

入御覽候、紀州云々之義は国弊嘆願之義有之、從

関白様も御縁家之事ニて難被捨置、乍高猪持参ノ御返

書春嶽様へ被仰遣候義ニ御座候、尚い細は跡より可申

上候、

一只今御滞

京之大小名、〔池田慶徳〕

因州公・宇和嶋御隠居伊豫守

様・阿州〔須賀茂徳〕淡路守

・肥後長岡良之助殿・長州両公・土佐守

〔中川久昭〕

様・中川侯等也、内因州并宇和島・阿州・長岡家等は

何も御同論之由ニて、第一長州始御暇之御建白被為在

候由、就て因州ニは、最早大坂之様御引取ニ相成筈之

由ニ御座候、伊豫守様・阿州・長岡家、

三郎様御上 京頻ニ御待ニ御座候、ひどく御したひ之

御模様ニて難有事ニ御座候、于今長州・土州之議論ニ

は、誠ニ不言心配仕申候、

一関白様御辞職事も、先御 聞濟無之様、從関東御願ニ

相成候旨ニ御座候、

右は急キ差かゝる事のミ申上候、大事之本田留守中

誠ニ苦心仕申候、御察可被下候、以上、

正月二日

藤井良節

中山中左衛門殿

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

三〔近衛忠房忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

尚以春寒難去御自愛之様存候也、

年甫之嘉章申入候、弥御勇猛超歳之条令珍賀候、抑此

別紙御一覽可給候、扱々苦心之事情、何分方今其許御

上京不相成ハ、甚形勢六ヶ敷次第、何卒草々御登京待

入存候也、

正月

嶋津三郎殿

御下

(近衛)

忠熙

(同上)

忠房

(嶋津忠承氏所藏)

四〔近衛忠熙ヨリ嶋津久光へ書翰〕

尚々春嶽最早上京之儀、何卒其許御上京之様、偏二
く待入候、左無てハ甚形勢心痛之事共ニ候、実ニ
天下之安危何卒方今ハ必々御上京之様、分て申入候
事、

先般市蔵上京ニテ大樹上洛ノ儀段々御趣意共承、至極
御尤ニ存、何卒被行候様青門共々ニ勤考仕候へ共、何
分 勅使帰京ニテ、弥二月上洛之由言上ニモ及候折^(西)柄
ニテ、迎モ唯今ト相成難被申出甚苦心、乍去市蔵へ申
含、春嶽迄差下シ内々尋問候処深難在 觀念、何卒御
都合被為出来候テ被仰下候ハ、重疊ト申返答之由、
且春嶽ヨリ之書状モ市蔵此頃持帰候事、其上一橋過日
入来之砌、極密吐露ニ及候処、其御沙汰ニ相成候ハ、
於関東深畏候事之由咄ニテ、其後又候入来之節ハ、過
日之吐露之儀ハ甚心配、何分今少し早ク候へハ重疊之

義、唯今ト相成候テハ人心動揺、如何様之儀出来モ難
計、扱々心配懸念之旨ニテ、是ハ先不被仰下方ニ願度
由被申候事ニ候、乍併何卒周旋可仕ト忠熙存込、色々
ト心配廻考慮候得共、迎モ発言致不被行ト扱々苦心、
青門ニモ大ニ苦心、鷹司前右大臣^(輔熙)ニモ大ニ苦心、三人
種々ト申合セ候得共、兎角被行候見込不相付、扱々苦
心、折角其許之御趣意実ニ至当ノ事ト、御尤ニハ存候
得共、甚其辺難被行次第ニテ実ニ心痛候、不惡御承知
之程御頼申入候、仍前右府・青門等ヨリモ、以別封被
申入候間、内々御伝申入候、尚書外市蔵より御聞取可
給候、扱帶刀上京ニテ御伝言ノ内、青門之儀一橋より
も以書取、大樹公より御願之旨申出候、是ハ不遠前右
府ト申合セ、可被行様可取計存候、先ハ急要用事如此
候也、

嶋津三郎殿

忠熙

極内密々

(嶋津忠承氏所藏本にて校訂)

五〔近衛忠熙ヨリ嶋津久光へ書翰〕

修理大夫出府之儀、猶予ニ相成候ニ付ては、其許早々
上京在之候様

御沙汰ニ候間、御達申入候也、

正月十六日

忠熙

嶋津三郎とのへ

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

六〔近衛忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

尚々春寒難去、御自愛之様存候、

忠熙従旧冬風邪甚発声六ヶ敷、唯今微声甚難洩之事

二候、甚乍略儀代筆之条免可給候也、

乍略紙申入候、新年之嘉儀何方も同然ニ候、先以御勇

猛珍重之至ニ候、抑旧臘ハ市蔵上京御伝言之趣承知仕

候、尚又喜入攝津上京御伝言等も承候、何分其許一日

も早ク御上京無之てハ甚苦心難堪候、扱土岐出羽守上

京、大樹直書ヲ以辞官位之事被申上、右ニ付テハ区々

之説甚心痛之事ニて、先被召止候ニ御治定ト相成、大

ニ安心仕候、仍 御返答之写御一覽之様進入候、扱又

忠熙辞職之儀、

主上ニは被聞召大ニ安心ニ存居候処、未関東不相濟甚

々懸念心配々々之事ニ候、何モ申入度事共海山在之候

得共難認取、尚御登京待入存候也、

正月五日認

嶋津三郎とのへ

内密

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

七〔將軍宛返書〕

正月二日

大樹公江御返書

土岐出羽守へ渡す
忠熙 御代筆相勤

征夷將軍源朝臣奉職以來、政刑錯乱失職掌之条惶懼之

余、今度正刑典且辞官位一等之旨、其志意神妙如此、

有悔悟之上は不及辞退候、尚不誤征夷之任、早決策略

可拒絶戎虜者也、

檀紙堅物八折計同紙表包

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

八〔土岐出羽守宛返答〕

正月二日

土岐出羽守江

御返答

〔徳川慶頼〕
田安大納言

後見中彼は心得違有之、恐懼ニ付辞官位一等可退隠之

由被

聞食候、依大樹若年為後見之処、失其職掌政刑錯乱如

何之儀被

思食、依之辞官位共一等退隱之旨、何之通被

仰下候事、

大奉書三ツ折表包同紙

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

九〔藤井良節ヨリ中山實善へ書翰〕

(徳川慶喜)

昨五日午ノ刻一橋中納言様御上 京、東本願寺御旅館

相成申候、同日淡路守様(島津忠寛、佐土原藩主)ニも御上

京、四條寺町大雲

院御滞在御座候、高崎(正風)左太郎就上迄御出迎申上候、今

朝

御直書御廻しニ相成申候間差上申候、

一昨秋より御相談相成居申候 近衛様江御献金之事、進

藤式部権少輔殿より、又々承申候、いかゞ相答へ可申

哉、被 仰越被下度、小松家御滞 京中伺置可申之処

失念仕、不行届之次第ニ御座候、宜敷御評議被下度奉

存候、

一(利通)大久保一蔵江之御内用封は早速飛脚差立、江戸へ相廻

し申候、いまた從江戸之一左右無御座、彼是と案痛仕

申候、

御当地へ御滞之御方々之内、去ル三日参

内被 仰出候向は、

(毛利元徳)

(池田慶徳)

(伊達宗城)

長門守様始相摸守様・伊豫守様・

阿州若君・淡路守様・

(島津忠寛)

(元善、徳山藩主)

右之内相摸守様

ニは兼て御暇御願ニ相成居候よしにて、御願通被 仰

渡翌日御出立、大坂之様御下り相成申候、大膳大夫様

ニも兼て参 内被 仰出居候得共、御重服中にて御断ニ被成申候、

此節は御父子とも一往御暇御願出ニ相成候由、然ルニ

長門守様丈は何とか御引留之御模様と被伺、乍恐段々

存寄之義とも、極内言上も仕候得共、御父子御一同御

暇は被下兼候御様子ニ御座候、国事掛と申公卿かた式

拾人余も御出来ニ付、却て

朝議も御一決成兼候御模様、甚奉恐入御事ニ御座候、

宮ニもいまだ御順快ニ不被為向、深重御案痛申上候義

ニ御座候、乍御病中色々 御苦心被遊、御不平筋も不

被少御模様ニ相伺、其上

関白様御所勞御風邪氣にて御座候処、旧冬月追(二十七比)

り御声出不申、御言語伺取兼申位被為在、到比日全く

伺得不申程にて、去ル二日山本典彙大掾相親、御肺腑

江御掛り被遊候ニ付、屹と御養生頂キ度旨被申上候由、

一昨四日 左大将様被 仰候、尤私共

拜謁も難被 仰付旨ニ付、彼是苦心不一方御賢察被下
度大事之時節候、色々心配筋差起困苦仕申候、本田氏・
村山無余義事とは乍申、此節之留主は重大之事件のミ
相重り、愚鈍短才之小臣 昼夜苦心御察被下度、何分早
目ニ上 京相成候様深重奉願候、

一先日申上候

御贈官ニ付、

宣旨・位記・口

宣案御渡之義はいよく 伝奏衆より直々御渡之処ニ
御座候間、御申受之御方ハ早く御上 京相成候て可宜
奉存候、且は

三郎様御上 京之節御直々御受被遊候御手続なれハ、
尚格別之御都合欵、右は乍恐存付之俣申上候、

一守衛人数御暇之上引取之義

朝廷御都合之処、攝津殿御内話承知仕候御模様次第ニ
は御座候へとも、到爰は同済之上、公然と多人数一同
右門被召列、行粧正しく御引取相成候方可宜哉と内評
も仕申候へとも、今少し形勢見合不申候ては相済申間
敷やと奉存候、

思召之次第も被為在候ハ、攝津殿へ被 仰越候方欵

と奉存候、一橋卿御上 京之上大坂城へ被為入、第一
海防義 御裁判之為、別紙之通多人數被召列旁ニ付て
有志諸生輩之異論紛々、誠ニ込入之形勢、夫故因州公
始伊達老公・長岡良之助殿（謙美）阿州若侯杯同論之御建白
諸藩御等も難被行御模様故、尽死力周旋仕申候得共、い
また諸藩御暇之御議定ニ至兼、甚残念ニ御座候、今朝

も從伊達公被召、追付罷出候賦ニ御座候、極て右等之
御咄ニ可及やと奉存候、何分込入向は長州ニ御座候、
長門守様御復命之上は、是迄之勤勞被称候て、夫ヲ塩
合にて御暇被下候様ニと之義は、乍恐極内申上候事も
御座候、尤内実ヲ承候へは、余程国内も疲弊ニ及候由
ニ御座候へは、大事之時節国力御養無之候てハ、不
相済との御願書面ニも御座候由なれば、何卒して御暇ニ
なれかしと奉祈事ニ御座候、尚追々申上候様可仕候、
一梅芳院御祐筆同道下り方之義、格別御急キニも無之御
模様奉同候得共、御召料事とも相片付申候ハ、正月
末方発足ニ相成可申と奉存候、尚御差合も御座候ハ、
早々被 仰越被下度奉存候、

一三郎様御発

駕御治定被 仰出候ハ、急速被 仰越被下度、尤

粟田 御殿拝借内願之事申上置候得共、いまた其後々御用答も参り不申候ニ付、是又御否早々被 仰越被下候様仕度奉存候、攝津殿御旅宿も同 御殿之御惣門内寺院御かし被下候ニ付、夫へ引移りニ相成筈ニ御座候、宮様江御機嫌伺も明七日ニ参 殿拜謁被仰付筈ニ御座候、

右は今日迄之処申上候、尚追々可申上候、以上、

正月六日

藤井良節

中山中左衛門殿

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

一〇〔朝彦親王ヨリ島津久光へ書翰〕

修理大夫殿ニモ宜敷被申入候様頼入候、以上、
弥無事珍重ニ候、抑旧冬建白一条委細大久保市蔵より令承知候、然処於京師難行、依て同人関東へ下向、又々当春帰京ニ相成事可行之処、折あしく陽明所労延日ト成行、段々難行相成候、猶巨細義ハ同人より 禁中御模様、且徳川氏之動静相聞ルへく候、右ニ付卿上京如何ト、於尊融モ令苦心候、定シ両公より登京被申入候義は、申迄モ無是ト被存候、於尊融モ 朝廷且天下之為ニ早々上京、衆心致安意謀頼入候者也、謹言、

正月二十一日

三郎殿

(中川宮朝彦親王、国事御用掛)

尊融

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

一一〔鷹司輔照ヨリ島津久光へ書翰〕

今般以御家僕密々被申越候一条、於近衛家承候、昨年来之義ハ、巨細承知不致候へとも、今度委細承候、方今之時勢ニてハ彼是と申人も可有なから、後來の遠謀と趣意之処深感佩服候、尤早々可取計と、段々殿下・青門等厚御配慮ニハ候へとも、議奏両卿過日来所勞引籠、其辺見合候へハ、弥以遅引ニ相成、急迫之場合期限を失候へハ、却て大變を可引出と、実ニ残念なから無是非御見合ニ相成候、就てハ兼て上京之儀被仰遣候趣、何とか是非々々早々御出京ニて、万事御周旋有之候様と呉々申乞候、何分於輔照ハ委細之義昨今承候事故、御期約之通御上京ニて万事御咄合承度存候事、

正月二十一日

輔照

嶋津三郎殿

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

一二〔南部彌八郎報告〕

一御船手頭松平左門殿中川御番所辺ニテ、怪敷浪人体之者見当リ、声ヲ被懸候処、直ニ切懸候ニ付、抜合討取ラレ御屈ニ及バレ、夫ニ付多分御褒美ニ可相成由ニ御座候、

一西洋へ御使節乗組之英国船琉球海ニテ大颶風ニ逢ヒ、大危難ニテ損所モ有之、且松平石見守殿(廣直、外園奉行)・京極能登守(高朝、寄合)殿恰モ死人ノ如ク有之、長崎へ入港仕候由申来候、
一右同時比ニモ候哉、トルコ国ヨリ 日本へ条約願之使節船、清国海ニテ同様難船イタシ、九死一生ニテ漸ク帰国仕候由、

一昨年来亞米利加合衆国中南北分離イタシ、戦鬪ニ及ヒ、夫ニ付イギリス領(九)ハナダ人民之儀、何レニモ左袒イタスマシク旨、本国ヨリ申渡相成居候処、昨年南方ヨリ英吉利へ差送り候綿積入之船ヲ、北方ヨリ相奪申候ニ付、夫ヲ名トシテ英吉利ト合衆国絶交ニ相成、英佛合同シテ合衆国ヲ討チ、南方ニ荷担イタシ、未戦ハ不始由ニハ候へ共大混雜ニ有之、右ニ付御詔之軍船製造方并其見分トシテ、海軍所蕃所調所(本ノケ、番)ヨリ被遣候人モ、今一左右御座候迄、御見合被下候様ハルリス申上候、尤此儀ハ元来最初英国之管轄ヲ脱シ独立イタシ候、以来

内心不相容事情モ御座候故、前条之事件ヲ名トシテ事ヲ起シ候儀ト奉存候、

一横濱在留之英仏人近比暴行甚敷有之候ニ付、此儀ハ兼テ合衆国ト 日本ト親敷有之、何欤事アル時ハハルリス取扱為濟候事柄モ多ク御座候処、右ニ申上候通二国ト絶交ニ相成候へハ、亜国之仲立之レナキ故欤ト奉存候、何レニモ前条之余殃ハ少シハ可有之哉ト申ス風説ニ御座候、亜国ニテモ叛賊ト英佛敵ニ相成、頗ル難渋ニハ可有之候へトモ、魯西亞素ヨリ英佛之志ヲ得ルハ喜バサル事故、多分合衆国ニ声援可仕哉、

本邦ニテハ英佛等ヨリ条約等ニ事寄セ、援兵糧食等借用申掛ケ、夫ヨリ事ヲ始メ可申モ計リカタク、方今之所至極御用心第一之御場合ニ御座アルヘクヤト奉存候、一洋学者大島溪助儀、阿州様ニテ五十人扶持ニテ被召抱申候、

右之通世上之風説并ニ外国新聞之趣ニ御座候、

以上

正月廿八日

南部彌八郎

右御軍役方問合之内

三三〔伊地知貞馨書翰〕

〔朱〕〔上町・下町・西田町ヲ云〕

三町地面借屋之儀は、於町家諸士以上之給地高同様之儀ニ御座候処、当分十分之内町人名前ヲ以相円メ、地料并借屋賃相請取候者段々御座候由、右は名義ニ相響、風俗之妨ニ罷成儀ニ御座候間、内々御料之上其通御座候ハ、御取揚相成、下料之直成ヲ以、町人江申請被仰付、地料借賃等其丈下直ニ致取引候様被仰渡候ハ、第一賈人僥倖之心ヲ押へ、風俗振起之一端ニも罷成、市中も潤立候儀と奉存候、御軍役奉行・御軍賦役申談、此段内々申上候、以上、

〔朱〕〔文久三年〕
亥正月廿九日

伊地知壯之丞
〔貞馨〕
〔文久保利謹氏所藏本にて校訂〕

一四〔本田親雄ヨリ中山實善へ書翰〕

一筆致啓上候、春暖之節御座候処、弥御安寧被成御座、恐慶奉存候、先度より度々御書翰被成下、忝奉存候、私ニも無異日勤仕候間、乍憚御放意可被下候、乍恐御兩殿様益御機嫌能被遊御座、恐悦御同然奉存候、爰許近衛兩御所様益御機嫌能、

前関白様去ル廿三日

御願之通 御当職御辞退、内覽隨身兵杖如旧被仰出、恐悦奉存上候、

鷹司前右府公関白御受同日被為在、廿四日御拜賀有之、青蓮院宮様御事去ル廿八日御還俗、左之通 御内意被為蒙 仰候、

方今国事扶助精勤御満足被

思召候、依之以非常格別之叡慮、還俗之儀

御内意被

仰出候事、

亥正月廿八日

右御受昨二月朔日被 仰上候、誠ニ以御互ニ為天下恐

悦此事ニ奉存候、

一智恩院御借用之事去廿五日弥御受申出、翌日より見分等江差越、則諸事御手当向之儀共申付候事ニ候、日々右江も御用意向取掛居申候、御安心可被下候、每度右之趣御掛合相成、万一故障付候てハと存心配いたし居候得共、前条之仕合先安堵いたし申候、右御問合之御返事申越度之ミ御座候、敬白、

京都

二月二日

本田彌右衛門

中山中左衛門様

追て最早此書封も間ニ逢兼、御出立後欵とも存候得共、町便より申進候、

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

一五〔徳川慶喜外三名連署届書〕

大樹公上洛滞在日數十ケ日ト 御治定相成候間、二月二十一日出帆ヨリ、海上往反風破之障等無御座候得共、四月中旬之内攘夷期限ニ相成申候、尤帰着日ヨリ二十日御猶予被下度儀ハ、先夜モ奉申上候通之儀ニテ、右之日積ニ相成候事、

二月十四日

松平容堂

松平肥後守

松平春嶽

一橋中納言

一六 在京ノ諸大名江被相渡御書附ノ写

一六ノ一 〔宮崎県宮崎郡〕
佐土原ヨリ受取

〔利脱力〕

今度英吉船渡来ニテ、夫々防禦ノ次第モ可有之、就テハ帰国ニ可相成哉、若於帰国ハ精選ノ士、応在京ノ人数多少朝廷為御警衛当地滞在有之、右

関白殿被命候事、

右二月廿七日於學習院被相渡、

一六ノ二

島津淡路守

家来江

此度横濱港江英吉利軍艦渡来、昨年島津三郎儀江戸出立掛ケ、生麥ニ於テ三郎家来英吉利人ヲ殺害ニオヨヒ候儀ニテ、三ケ条ノ儀申立、何レモ難聞届筋ニ候、其趣ヲ以テ可及応接候間、速ニ兵端ヲ開候哉モ難計、仍テハ銘々藩屏ノ任ニ有之候ニ付、夫々備向手当方モ可有之候間、為心得相達候事、

所司代牧野備前守様ヨリ二月廿七日被相渡候、

〔忠義、長岡藩主〕

一六ノ三

松平修理大夫家来江

生麥一条ニ付此度英夷申立候三ケ条ノ儀、何レニモ難聞届筋ニ候、乍去三郎心得方モ可有之、兼テ申立候趣有之ニ付、実ニ不容易国家ノ御大事、急々可応接間勘弁ノ処、早々可被申聞事、

一七〔本田親雄ヨリ中山實善へ書翰〕

尚々

順聖公御贈官位記口 宣等、今日伝奏衆ヨリ被相渡候、何も所司代之手ニも不相渡、首尾能相濟申候て
大ニ安心仕候、

一筆致啓上候、春暖之節弥御安寧可被成御座、珍重奉
存候、乍恐

三郎様益御機嫌能被遊御座、恐悅御同然奉存候、最早
此状到着之比は下之關辺江御通船之御事と奉存候、小
松家ニも

御供被命候由大慶之至、二ニ小生碌々在勤仕居候間、
乍憚御放念可被下候、扱京地形勢之儀追々申上越候通
之次第、実ニ無謀之暴論頻ニ湧出痛歎之至、藤井良節
下之關迄差出候付、御聞取可被下候、然ルニ生麥一条
ニ付英国軍艦渡来、越前より御達之書附藤井より差上
候半、其後志々目差上候付、
(獻吉)

陽明殿より申候写御書附も、差上為申事ニ被存候、被
之醜夷共申立候三ヶ条、実以不可容之無礼過言、君辱
之時臣死スル之秋ニ御座候、かく迄輕蔑之体を示候事
未曾有之大不敬、尤天地間無此上大罪にて、共ニ不戴
天之寇讐ニ御座候、昨廿七日ニハ別紙式通之書附諸大

名江布告相成候、尤御当家より事出来候儀にて、兼て
御申立之趣も有之候間、今朝之越前より之御渡書之御
趣意ハ、内夷之処三郎公御勘弁之処被聞召度、乍併往復
数日ニ相拘り申事故、京地詰合之家臣兼て存込之趣も
可有之候間、右式被聞召度との旨中根鞞負より申来候、
(雪江、福井藩士)
雖然近々

三郎様御上京之上、何分申上ル旨可有之と申置候方ニ
決居候、明日右御届申上候積ニ候、若強て存慮申出候様
沙汰も有之候て、行也大道至理を以心接いたし、若至当
之理ニも不服、彼より礼讓を破、兵端を開キ申候ハ、
相応して掃絶いたし可申旨申出候外無之候、尤攘夷拒
絶ニ被究候上は、一も二も無之事にて候、外ニ存慮も
無之、当地一橋公・春嶽公との賢明忠誠も幕吏同然之
御会積にて、言上之趣意も不貫、実ニ浩歎之至ニ奉存
候、此機ニ乘し、諸大名御暇之建議も為有之由ニ御座
候得共、必至と御極り之定見

朝廷ニおひて不被為立残念之至、何分不容易世体ニ相
成、今之形勢にてハ目下ニ禍難を醸し出候ハ案中にて、
浮浪之輩ハ洛中ニ充滿、しかし會津より少々手を付、
七八人魁首を召捕通達等ニも相成候、扱々忼慨ニ不堪

次第、

王綱も終ニ張抃之期なく、皇国合一戮力候程も無覺東
存申候、御上京を一刻三秋と奉待上候、尤

宮 前殿^{本ノミ}下御^{本ノミ}躰兼之次第、良節よりも御聞可被下、も

ふハ御答之申上様も無之、只々困り入申計ニて候、大樹

公上洛ハ三月四日ニ御着之賦ニ相成候、夷船一条今朝

將軍之御中途江岡部・澤之兩人発足参向ニて候、申上

度次第満胸御座候得共、とかく近々之内兵庫・大坂之

間ニて 御迎ニ参上之賦御座候間、其折御直談と申上

省候、乍憚小松大夫江可然処申上可被下候、右便宜大

略如是御座候、恐惶謹言、

京都

二月廿八日

本田彌右衛門

中山中左衛門様

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

一八〔本田親雄ヨリ島津久壽中山實善へ書翰〕

生麥一条ニ付英夷軍艦横濱江渡来承接之処、夷人申立
之次第ニ付、越前春嶽様より御達之書附、并陽明殿よ
り被相渡候書付等之趣、藤井良節・志々目獻吉下之關
迄追々差下シ候間、相達為申筈と存候、然処今朝春嶽

様より御達被成儀有之候間、御家老之内一人、御留守

居之内一人、早急罷出可申旨致承知、島津右門・鶴木

孫兵衛罷出候処、別紙彙通被相渡候付、早々

御中途下之關迄飛脚差立此段申上候、御披露可然様御

取計可被成候、已上、

二月廿八日

京都

本田彌右衛門

島津主殿殿

中山中左衛門殿

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

一九〔本田親雄ヨリ島津久壽中山實善へ書翰〕

以飛札申上越候、

三郎様益御機嫌能被遊御座、追々兵庫

御着船之御儀と恐悦奉存上候、然ハ島津淡路守様此程

御上京ニて、

三郎様御上京を御待之処、英夷一条ニ付諸大名御暇被

仰出、御同人様ニも昨日御参

内被仰付、昨七時半過伝奏野宮殿より御別紙之通御書

附を以被仰出、然処再同日夜七時半時野宮殿より、淡州

御家来御呼出ニテ、今曉御別紙之通更ニ被

仰出ニ相成、淡路守様より早速私方江被相渡、左候て御同人様より可被仰進筈候得共、私共より早々申上遣呉候様御頼ニテ候、私ニも大坂江罷出御迎申上ル賦御座候得共、何分兵庫江此形行申上置度前広申上越候、尤下之關江も別段申上置候得共、御間ニ逢候程も難行、為念此旨申上候間、御別紙式通被差上候儀共、可然様御取計可被成申候、以上、

京都

三月晦日

本田彌右衛門

兵庫御本陣

島津主殿殿

中山中左衛門殿

(島津忠孝氏所藏本にて校訂)

二〇〔鶴殿長鋭取扱浪士等言上書〕

今度於

將軍家御上洛被遊

勅慮御尊奉、攘夷之期限可相定との折柄、御留守中英夷軍艦内海ニ乗込、其秋薩人斬夷之事敵敷被及応接候得共、申立之三ヶ条共一切御許容無之、直様御拒絶被

遊候、

御廟議之由御雄断之程、天下人民雀躍奉感喜候、乍併攘夷之御趣意ハ全ク交易相始候段、天下士民悉ク同心ニ付、内乱之基ニ有之、於朝廷更ニ御許容無御座候、一時姦臣之私計ニ出候て、其輩も追々被斬戮候仕合ニ付、至今上は聖旨を尊奉し、下は天下人情ニ随ひ、政事一新祖宗之旧法ニ可回復との儀ニテ、実以我全国一統之大義ニ御座候へは、正々堂々之御議論ニテ拒絶仕度、生麥一条ハ全ク薩人英夷之一箇小事ニテ、我

国家之大計又ハ五ヶ国に相関候筋ニ無之、殊ニ無礼人を斬るハ我国之土風ニ候へは、未情態相分不申候得共、強て薩人之誤とも被申間敷、右等之小事より拒絶之基ニ相成、戦争相始万国之譏を招き、我

国体之本意徹底仕申間敷候間、生麥ハ生麥之事、拒絶ハ拒絶之事ト、自分御分別、征夷之職掌相建候て、御威權相分不申様、片時も早く五ヶ国之者ニ、交易拒絶之御趣意御諭ニ相成、生麥事件より戦争相始不申様仕度、且期時日横濱及び諸夷館速ニ為引払、たとひ如何様申立候とも、決して御取散無之、断然戦争之御手当被

遊度、尚其段薩州江も御申渡、御国辱ニ不相成様為
取計可然奉存候、就ては於
將軍攘夷之

詔御奉戴之上速ニ御帰城被遊、攻守之御所置諸藩侯ニ
御指揮被遊度、京師御警衛之儀は矢張會津侯御任戴、
山国之大小名両三輩御附属、

天皇御行幸之大儀

内裏御取広之御所置、貢税献納又ハ公卿御融通之作法
等、都て尊

王之御周旋一切御任セ可然候、且大坂は京畿近海と申、
東西衝要之地ニ候得は、於一橋公は永く御任職山国之
大名四五輩御附属、断然御鎮戍被遊度候、

伊勢神廟之儀は海辺と云、非常之大変飄忽ニ相迫り候
も難量候間、

神器相汚不申様今日第一之急務ニ付、可然大名ニ相命
シ嚴重警固被 仰付度、神官中ニも有志之者有之哉ニ
付、御任撰有御座度候、其余北海若狭辺ハ京畿ニ相接
シ頗ル御手薄之上、国主酒井修理大夫(忠尚)ハ天下ニ表章し
たる奸物ニ候得は、所存之程も難量候間、可然大名江
遷封被仰付、此以厳敷御警衛被遊度候、其他沿海之諸

大名ハ申迄もなく堅其国を守り、臨時之策略応援之御
下知專要と奉存候、且私共儀乍微賤、尽忠報国之為罷
出候得は、斯く外国御拒絶相成候へハ、於関東何時戦
争相始候も難量候間、速ニ東下、攘夷之御固ニ御差向
被成下度、関西志士御募之儀は其筋江号令御下シ被遊
候ハ、尽忠報国之者自罷出可申候、

右私共一統之志望ニ付、不憚 尊嚴言上仕候、恐惶頓
首謹言、

(長統)
鵜殿鳩翁取扱

文久三年亥二月晦日 浪士共

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

二一〔島津忠寛宛書翰〕

島津淡路守

為自国警衛急速帰国致度趣尤ノ儀ニ思召候、殊島津家
ハ英夷申立ノケ条ニモ関係致候間、修理大夫・三郎等
ニモ上京ノ儀暫為相見合、共ニ尽力有之候様被
仰出候事、

二二〔島津忠寛宛書翰〕

文久三年春款

其元帰国之事書翰ニ在之候得共、是ハ甚痛心候、帰国
治定ナレハ、前左府当職之儀ハ更ニ何迄モ御理ニ可相
成存候事、

二三 〔島津久壽ヨリ大久保利通へ書翰〕

御家老座ヨリ

御上洛ニ付、

太守様御役等ノ儀去春モ御願ニ相成居、此節如何イタ
シ可然哉ト可承候得共、此段別段承知イタシ不置候、
何レ今日ノ便ヨリ窺ノ方可然返答イタシ置候、又々町
飛脚ヲ以早々御申越有之候ハ、随分於此元何モ相濟申
ヘク、此段モ御心得ノタメ得御意候、自然御間ニ逢不
申候ハ、吟味ノ懸モ可有之候、以上、

三月五日

主殿

一蔵様

二四 〔本田親雄ヨリ小松帯刀へ書翰〕

三郎様益御機嫌能、昨日朝五半時兵庫へ被遊
御光着候段奉承知、恐悦御同意奉存上候、右之趣早速
近衛様

中川宮様江言上仕候処、別て
御満足被 思召上候、左候て
大樹公御滞京云々之条、高崎猪太郎江御申含め之御内
用、今朝

中川宮様江拜謁篤と申上候付、且

御直書一封も差上奉り候処、

大樹公今十二日御暇乞參

内迄も被 仰出置候得共、

御朝議之趣被為在、御延引之儀去ル十日別紙之通滞京

被 仰出、尤御日限もいまた

御沙汰無之、然処同日

幕府よりも一橋中納言殿より別紙一通被差出、公武

一時ニ右之趣意符合ニて幸之仕合、右ニ付別段

御両所様御尽力ニも不及、

三郎様御上京も御間ニ被遊御逢、無上幸ニ奉存上候、

御安心可被下候、左候て

宮様江被進候 御直書之儀、別段不被遊御返答、前文

之別紙式通被遊御渡候間、其段伏見駅ニて也とも申上

候様、

宮様御沙汰ニて候、左様被 仰上置可被下候、

一御着京当日 陽明家江被遊御參 殿候 思召ニ付、
宮様・一橋殿・越前侯御出會云々之儀是又申上候処、
被遊御承知候、

三郎様御口上之内ニハ無之候得共、
鷹司閔白殿下ニも御出會不被為在候ては、御不都合ニ
可有之被 思召候、猶

陽明前殿下尊慮も奉伺候様承知仕候付、則其段奉向上
候処、尤御同意にて、鷹司家・一橋家江は自

陽明様可被仰進との御事ニ候、左候て松平春嶽様御
事、去ル九日比より御所勞と被称御引入、幕役ニさへ
御面會も無之、昨日

加茂行幸之供奉も御勤無之候間、御申進相成候共所詮
御參會ハ有之間敷 思召候間、御省可被遊との事ニ御
座候、右御引入と申事も、内実ハ

朝廷駕御之道を被失候より生候儀と痛歎ニ不堪、拜面
い細可申上候、

一私事御用之儀有之、御中途江罷出候様被 仰付候処、
此節

御上京ニ付ハ万端御用筋不捨置、且被仰含置候御内用
之儀共有之、先日

中川宮様より居残にて、誰そ 御中途江は差上候様可
取計旨 御沙汰も有之、其れ一日も難迎次第柄共御座
候付、不得止罷止候て高崎猪太郎〔五六〕差上候、尤大坂迄御
迎として罷り居候趣、前広より申上置候得共、右之仕
合故、何卒可然様御執成被下度奉願上候、今日も唯今
御屋敷江罷帰候儀にて、誠ニ奉恐入候得共、伏見迄罷
出御直ニ可奉申上候間、深此段奉頼上候、

一当地知恩院江可被遊 御着御都合ニ御取計御座候間、手
当之形行兵庫ニおひて可被成御聞候間、い細取調へ申
上候様、先日被仰越趣承知仕候、前文申上候通近日内
外御用取紛、何分申上候儀も行届不申候次第、甚恐入奉
存候、凡被仰置候ケ条之儀ハ勿論、昨年 御上京之節之
振合を以諸御手当申付置、且又御賄被下候手都合ハ焚
出シ、御春屋之振合にて、諸人江御春物ニ入付渡之筋
にて、右式御取入等相成、其外守衛人数は都て先より
參り居候分も、無親疎皆共院内江被召置、惣門にて出
入帳留いたし、見聞役相詰、其外ニ御番所三ヶ所江守
衛人数繰廻シ、兩人ツ、上番にて、足輕中番五人位ツ
、被召置、御門刻限之儀ハ
御光着之上被 仰出候様奉存候て、右之張番所取拵置

申候、其他細大可申上儀段々御座候得共、御着之上可申上候、

一近衛様御参 殿之儀、御着京御行形にて候ハ、凡何時比可相成哉、暮時分ニても相成儀ニ御座候ハ、翌日之方都合可宜との

御沙汰にて候、右ニ付伏見より直ニ 御参殿之御賦にて手当可仕候間、一応知恩院へ御入被為在候上ニ候哉、右之処御差図被仰越度奉存候、右御内用申上度急飛脚差立、御中途迄差上候、何分御差図急御頼申上候、以上、

三月十二日

京都

本田彌右衛門

帯刀様

(鳥津忠業氏所蔵本にて校訂)

二五 (近衛忠熙ヨリ鳥津久光へ書翰)

尚々大乱書御推覧希入存候事、

春暖ノ節弥御勇猛珍重候、抑去ル十四日ニハ御上京ニテ久々面謁申入、喜悅ノ至ニ候、併誠ニ急速御出足、何共々々申条無之痛心候、前夜ニ初テ御出足之趣承知

致、誠ニ驚入何モ不取敢中川宮へ談合、中川宮・忠熙等ヨリ関白江申入、段々苦心之任合何分何事慕取兼、其夜モ天明ニ及実以苦心難堪、忠熙家来ヲ智恩院迄差向、段々申入度儀モ在之候処、最早御出立後ニ相成、甚不都合ノ何共々々苦慮無限候、夫ヨリ段々中川宮共々ニ談合、関白江申入、更ニ早々御上京之様 御沙汰ニ相成候へ共、最早御出帆後之趣本多・高崎両人下坂仕候へ共、右故空敷立戻リ甚々心痛無限候、度々以勅書段々 叙慮之程伺候ハ、実以何共恐入候事ニテ、何レ其許今度御上京ニ相成候ハ、昨年 叙決之通守護職辺被 仰出候 思召之趣、然ル処当節邪魔而已入込、甚々御痛心之趣、委細ニ御沙汰共被為在候御事ニテ、深々恐入候事ニ候、先々此頃ニ至リ、慕激ノ堂上モ大ニ和キ、至当之論モ相発シ、少々ハ宜模様ニ候、尤就中慕激ノ人体ハ朝廷ヲ退キ、其後行方知レ兼候事ニ候、併却テ穩ニ趣候哉ト聊安心ノ事ニ候、何分方今忠熙ニハ人望ヲ失ヒ、何事ヲ申出候トモ更ニ人々不応、唯々致方無之候、内覧之蒙 仰居候へ共、誠ニ有名無実、何事モ被 仰出後他ヨリ承知仕、是ハ甚不相濟御事ト存候儀、毎度ノ

事ニテ、実ニ名有テ実無キ役人トハ忠照ノ事ニテ、連
モ勤仕之詮無之、其上持病モ時々相發苦心不一方仕合、
内覽辞表差出段々願立候処、一昨夜願之通被 聞召、
深々畏々安堵之事ニ候、最早是ヨリハ天下之形勢如何
相行候事哉ト御案事申上、拜見仕候已外無之ト決心之
事ニ候、其許昨年格別之御忠節ヲ被立候故、屹ト御實モ
可在之ト被存候、右辺モ如何ニ相成候事哉、何分最早
役人ニ無之、只々形勢已拜見ト決心之事ニ候、何分実
々 朝廷之処慕ハ少シ退キ候事故、何卒此上之処 朝
憲相立候様、御上京御周旋御忠節相立候様分テ申入度
存候、呉々御上京無テハ御不忠無限候、仍テ早々申入
度存候事、

三月廿八日

二白

大樹公ニモ過日ハ御届捨ニテ帰府ノ趣ニテ、誠ニ大
混雜候、俄ニ參 内被 仰付、段々之以 叡慮滞在
之様 御沙汰ニ相成御事被申上候事ニ候、何分ニモ
大樹帰府ニテモ致候テハ、折角即今御一和之立掛ケ
候処、実以恐入候事ニ候、以上、

忠照

極内密
嶋津三郎殿
御下急々

〔嶋津忠承氏所藏写にて校訂〕

二六〔近衛忠照ヨリ島津久光へ書翰〕

附紙

貞姫君御一条文久三年

外封

嶋津和泉とのへ

翠山
忠房

内々

内封

嶋津三郎殿
御下

忠照

〔朱〕

〔亥三月廿九日〕

兎角不正之時令ニ候、弥御勇猛珍重存候、誠ニ過日も
申入候通、時勢何共々々恐入候儀ニ候、先日速ニ御出
立之儀、実以痛心ニ不堪候事ニ候、極内種々申入度儀
モ有之、昨年来御待申入候詮も無之、残懷難申尽候、日
夜苦心ノミニ候、何卒々々御上京之程、偏ニくく
希度事ニ候、如何成行候哉と実ニ悲歎之事共ニ候、忠
照ニモ内覽辞退願之通被

聞食、諸事御免ニ相成、其段ハ畏入候御吹聴申入候、
扱貞姫方引取之儀何卒早行ニ致度、良節事帰国ニ付委
細申含候、御聞取希度候、ケ様之時勢故延引致候テハ、
却て大延引ニ成候半と甚心急、御都合も可有之なから、
何卒暑氣ニ不相成内御旅行ニ相成候様致度、御勘考希
候、何も荒々良節下向急ニ成候故申残候、所勞頭痛氣
大乱書御推覽可給候也、

三月廿九日夜認

嶋津三郎殿

忠熙

御下

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

二七 〔内田政風ヨリ大久保利通へ書翰〕

猶々相替儀ハ亦々可申上候、

一輪拝呈仕候、弥以御安泰被成御座奉恐賀候、然は今
朝、土佐御留守居森多司馬と申者參、別紙之通申述候
付形行細々承込差上候、いかな事土佐ハ因循説之儀ニ
てハ有之ましくハ存候得共、四五日跡ニ遠武承候ニハ、
正義家起り居候処、因循家亦大沸騰ニて議論二ツ二分
れ候との説も相承由も咄御座候、御見留之程御伺申上

候、其通之事共ニて御契約を御破相成候位之御人物ニ
候得は、尤憑ニ不足事ニて却て足手障りニて、迎も必
死之尽力ニハ到り兼可申哉、まさか左様之儀ニても有
之ましく候得共、陰湿位いか様有誇候ても、丈之知れ
たる事、尤俗ニいふ陰金田虫ニても可有之哉、夫々諸
侯より態々御使者を以御相談相成候末ニ、御日延もと
ふか御不都合ニ奉存候、其御許土御屋敷も御聞合相成
候ハ、また御見合之端ニ可罷成哉と奉存候、一昨日
公卿方御參 内之旨承候間、柳原卿江今朝出懸候所、
〔光愛〕
廿二日之進言中山卿一昨日御出、柳原卿江御議論有之、
夫より御考付ニて昨日御評議ニ相成候処、いつれも彼
文意御頓着無之、大キニ御後悔、直様御評決ニ相成、
今朝所司代伝奏宅江御呼出、御書取之趣ハ
先朝ニ被為対候ても不被済、尤諸侯見込も被
聞食、其上開鎖之儀ハ宜敷ニ御随可有之儀ニ付、堅右
之趣可存、依て御請印形いたし、早々可差出旨大坂表
江可達越旨之よし被仰聞候、且亦御書取写拜借被仰付
度内願仕候処、後程村山・井上兩人間ニ可遣旨被仰聞候
間、到来次第可差上様可仕候、此節摂政公不肖我等江
重任被仰付候間、此儀ハ幾々も条理判然不相立候て

ハ、御免相成候儀ハ無之と、余程御踏こたへ之儀ニ付、
万々苦心仕ましく旨被仰聞候、

一今日山階宮并二十二卿幽閉御解被 仰出候筈御決定、
〔寛親王〕

昼より参 内いたし候旨被仰聞候、案外之御運恐悦此
事ニ御座候、外々之変儀無御座候、旁帯刀様江御披露
可被下候、乱筆御免可被成下候、已上、
〔慶応三年九〕

三月廿九日 内田仲之助

大久保一蔵様

附葉

昨夕板倉ト石井応対ハ同人より相話候様申置候、最
早処置方モ無之候也、
〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

丁卯三月廿九日

二八 〔本田親雄ヨリ中山實善へ書翰〕

昨日市蔵帰後中根如此申越候、

今夕参会ノ時 大簡公御考ニモ可相成ト存候故遣候也、
過刻奉言上候市之進對話ノ次第、罷帰大蔵大輔へ申
聞候処、トウヤラ淵底モ見へカ、リ候様ニ被存候間、
猶今日登營ノ上

上様ニモ申上、市之進へモ講究致度トノ見込ニ御座
候間、帯刀へモ被仰聞候義モ、右登營ノ模様相分候

迄御見合セ被下様ニ申上候へト申聞候、

二九 〔本田親雄ヨリ中山實善大久保利通へ
書翰〕

御直書入御封書一通

〔定衛忠憲〕
前関白様より

三郎様より

右は去ル廿七日参

殿仕候処、早々相達候様可取計旨 御沙汰被為

在候付、今日急飛脚申渡差立申候間、可然様御取計被
下度、此段御問合申上越候、以上、

京都

亥四月朔日

本田彌右衛門

中山中左衛門殿

大久保一蔵殿

〔島津忠承氏所蔵〕

三〇 〔本田親雄ヨリ中山實善大久保利通へ
書翰〕

当地形勢之儀ハ日々相変、取究何共難申上候得共、今
日まで之処大略申上候、御発駕後前便ニモ申上候通御

留メ之事類ニ相起候得共、今ニ至りてハ夫も相止候模

様ニ被伺候、

一尾州前巫相様(徳川慶徳)

公武一和之廉、当時之弊を御改之御周旋有来候処、御所御献數十五万石之賦、多少之論并生麥一条幕府へ御任せ、全御委任無之辺より大失望ニて、三五日跡即日御暇帰府之願相成処、御許容なく滞京ニて候、然処堂上

方ニも高松殿を始六十八人別紙之通上書有之、引続キ参政・寄人等之儀不服御取止之事申出候賦之処、尾州之一条ニて、後楯宜しく相成故欵、上書限ニて参政云々之建白ハ、今日迄も寂として不相聞得、宮ニも大

ニ御楽ニ被思召候処右之次第、乍然六十八人も別段御卓見有之御方ニてもなく候故、たとひ此説を御採用候共、是を列中より御撰挙ハ不被成、一参政を除テ又一参政を生候ニ至へくと

一來ル四日石清水

行幸あるへき御治定之処、去ル廿九日夜俄ニ

思召旨被為

在御延引被 仰出、右ニ付ハ参政其外議論沸騰色々ニ

候得共、何分

断然御延引相成候故無致方、又此末如何可相成や、此一条ハ世上之風評若も行 幸有之時ハ、不容易筋ニ紛々申居候折柄、先安堵之思ニ御座候、猶曲折ハ誰そ帰国之上、情実詳ニ口演可申上候、無左てハ紙上ニ難尽候、

一今日ハ 大樹公參

内被 仰出、於御学問所御問之物御相伴御料理被下と申事ニて、御酒宴を給り候之格を右通名目ニて、宮始奉り一・會公御參之筈ニて候、

一橋公御憤励種々御献言之内、

中川宮を関白職之場ニ万機御知司之事、并諸藩守兵之御總督を

宮江御引受之処、

將軍より献言之賦、一昨日より議論一定いたし、左候て大樹公ニも御治定之上、御帰府と申論決之由ニ御座候、

一 大樹公より 宮江御太刀備前御献進、御拵料式百金相

添候得共、金ハ御返却相成候、一橋公御使ニて御持越

ニて候、其余瑣々たる事件も種々御座候得共、申上候

程之事ニも無之候、先右等之趣早々申上越置候、追々御注進可申上存候、以上、

京都

四月二日

本田彌右衛門

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

三一 〔本田親雄ヨリ中山實善大久保利通へ〕

書翰〕

先便申上候

禁闕御守衛人数云々一条、何分早目取究申上候様、尤其後度々御用ニて、仰出之日より廿日之内差出可申旨も奉承知候間、遠国之事故早々申越置候付、仰出通廿日之日数ニて限りて、御受ハ出来不申候旨申出置、其通坊城家ニて御聞濟相成、且諸藩之例ニ倣候て、當時在京之人数を以、精撰まで之間差出置候様との、雑掌より御差凶有之候間、其通取計置申候、何分御決議之上、御差凶有御座度奉存候、最早御吟味も被仰越候儀と奉存候得共、為念右御達振之形行、猶又申上越候、已上、

四月二日

京都

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

三二 〔税所篤ヨリ中山實善へ書翰〕

一 御下向後之風評格別申上程之儀も無御座候、越前は廿一日届聞ニて発京、容堂ハ廿五日帰国、

一 廿三日中山侍従久坂玄瑞同道亡命之由相聞取、段々探索仕候処、廿八九日比玄瑞は弥在京無相達儀承得申候、

定て一緒ニ出、坊主丈ハ帰京為仕ニて可有之欵、中山

ハ未所在相分不申候、摩耶ニ巢を構候儀、必定トの説も有之

一來四日八幡行幸相決候処、廿九日御延引初より宮御不同意ニ仰立様有之候得共、既ニ御決定相成居申候由、行幸ニ付御暴発之浮説御聞相成、廿九日朝より夜ニ掛て種々御延引相成申候

一 右雜説一橋江廿九日夜宮江推參 関白云々・親兵惣督云々之儀申上

候序ニ

宮より被仰入候処、憤然ト勃起、早速今夜より京中は手を付、摩耶は外廊を取囲御沙汰を可相待旨御受申上、夜九ツ過退殿当夜より京中暴論、之徒則聞者を入候

一行幸再取興候勢、既二三條より 宮江申上趣有之、

宮大ニ御立腹、三條屈服、昨日迄は先御延引之方ニ候得共、此儀ハ未何様共施設出来不申候長門守供奉之心組歟、公武より御召も無ニ上京
大ニ紛々擾々、仍て御延引被仰出ニハ相成候得共、例之騒立ニ又いか様相成候歟も難計、実大事之場合と疑懼不一方候、

一 一條折角手を附候折柄難説紛々にて、万一事決候得はどこニ暴を出候も難測、甚懸念之儀共にて、今五日を不過候ては手も不被下時宜御取決て、優柔不断にては無御座候、百方手を尽し、時機之熟れるを以召集考御座候、

右之央伏水一条再発、頻ニ長より申立、言上之筋小南五郎右衛門より為知相成、武予中ニ入、此御方之御内令も有之度、此儀は先暫預ニ成給置、同人より本田江引合も御座候、大ニ入組之儀も御座候、

一 御借船一条澤勤七郎未返事相決不申候、折角本田・内田へ催促仕候、

一 御邸中も表通サツハリ手を引、宮弥陽明家出入等も先ニ微行勝ニ御座候故高杉ハ近々罷下筋ニ相決候得共、当分之势にてハ一人之懸念所にては無御座候間、先取止ニ相成申候、

右概略草卒甚恐入候得共、本田より大要申上候通御座候、御当地之実態同相場にて、今五六日も不過候ては何共かとも不被申、雨晴寒暖入交り決定不仕候、どの筋見留メ付不申候へハ、滞京之含罷在候付、左様思召置可被下候、昨日迄之所荒々申上候、宜御推覧奉願候、恐惶謹言、

四月二日

税所容八(寛)

中山中左衛門様

追て、只今之形勢にてはいつれ変事到来も難計、六ヶ国之合体ニ比し候へハ、実ニ御手薄之義と奉存候、御見留を以早々跡々之御示処、御取急被為在度奉至願候、蒸氣船御差廻置之儀本田へ為咄処、此儀ハ追付可相廻咄ニ御座候、如何御座候哉、專一此事ニ御座候、再拜、
(島津忠承氏所藏本にて校訂)

三三 〔中島源左衛門東郷伊八郎口上覚〕

一 近習番松方助(正義)左衛門亥四月十八日蒸氣舟ヨリ登京ノ筈ニ付、明後廿日出帆ノ由、今日八ツ前承候付、翌十九日朝伊八郎へ相頼、小松家用達鎌田十郎太方へ差越、小松家へ内意申含呉候様、拙者ニハ竹下猪之丞へ差越

細々相頼、左之通書付差出候事、

口上覚

私共親類亡道島〔正親〕五郎兵衛事壬戌四月蒙

御内命、於伏見終ニ遂戰死候儀ニ付、不得止事洛陽即
宗院へ碑銘相建申度奉願趣御座候処、難有御免許被仰
付、則手当仕便船次第差登相建申度奉存候処、此節

三郎様御上京ニ付、縁者又ハ同郷ノ者共余多御供ニテ
上京仕候付、右ノ一条相頼置候得共、速ニ御上京不被
為 在、外ニ頼洩候手寄全ク無御座候得共、何卒御物
奉行式令ニテ、以後返銀被仰付被召建被下度奉願候、
此等ノ趣被仰上可被下様奉願候、以上、

親類

亥四月十九日

東郷伊八郎〔実之〕

中島源左衛門〔利和〕

〔表紙〕

忠義公史料

文久三年 自五月
至七月

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

三四 〔近衛忠熙ヨリ中山忠能正親町三條實愛

〔書翰〕

頃日は頻被伝厚

叡慮、不顧恐懼強て御断可申上、一二之愚意而卿へ篤
と可及御談話所存ニ候処、引続終ニ賜

勅書候期ニ至、此上は難背

叡慮御礼節ニ相迫り、固辞之念慮ヲ指置、無抛随意之
念願申立、暫時之処御請可申上旨及

勅答候得共、其以来日夜弥不堪心痛何欵存続候処、此

度之儀は、全先年之一件

朝威再被為立候

叡慮就ては、其節專御評議ニ預り、且ハ内覽蒙

仰候、翠山之儀旁厚蒙

御沙汰候事と奉存候、且又長・薩藩杯凡て其合ニて申

立候儀は必定之儀、乍去翠山当職ニては是迄之

叡慮も却て不相立、全彼偽勅之辺関東ニも疑念不暗儀、

仮令長・薩藩深情も可在哉ニハ候得共、即今翠山当職

ニては却て御趣意ハ不相立、御膝元大乱ニも可及事必

定之至、且於諸藩士候ても当職之人体ニ寄

叡慮も相立候様存込候ては、従元之

朝威も薄ク相当り歎ケ敷儀と存上候、旁此度当職之儀

他人へ被

宣下、重大之御政務被及周旋候得は、真実之

叡慮と申込も可被為立、旁於翠山候ては当職は申ニ不

及、還俗辺之御沙汰被為在ては、

朝廷之御威光弥輕易ニ天下人心可存上、歎ケ敷次第、

何卒篤と御賢考ニて、其辺宜敷御治定被為在候様奉願

度、決て翠山謙退之辺ヲ以申上候儀ニ無之、先年来

朝廷之御次第余り歎ケ敷奉存候故、愚考之程再奉歎願

候間、篤卜御勤弁有之、御取計之程偏希入候事、

五月八日

翠山

中山大納言殿

三條大納言殿

〔島津忠孝氏所藏本にて校訂〕

三五 〔近衛忠熙ヨリ中山忠能正親町三條實愛

〔書翰〕

厚以

叡慮度々御沙汰之辺実以恐縮仕候、元来愚昧之性質、平常之御時節は格別迎も急務之御時節、当職は不存寄儀、既先年蒙内覽之

仰候節も全役人ニ被扶助候て、暫時遂勤仕候得共、其後隱遁、累年月心気相弛唯々随意之進退、其上段々及老境健忘之症不絶相発、実以如此次第にては、無難之勤仕迎も難相遂、万機之巨細違乱之儀出来候ては、翠山は不及申

朝廷之御不都合顯然之儀、深以恐懼仕候得共難黙止、勅命仮令御請申上候共、前条之身体往々不都合之所置無覚束候ニ付ては、何卒二三箇月或四五箇月之中辞職仕度、此上之被垂

御憐愍、及其期必被

聞食候様兼て深願上度、既先年公武御混雜之砌退去候処、頃日厚以

御沙汰可為平常之通旨蒙

仰、其上重職之

御沙汰

天恩之程深々畏入候ニ付、不得止謹て御請可申上次節ニ候得共、不器之大任、又候如先年不都合之所置在之候ては、一身之瑕瑾相重候而已ニ無之、弥墜

朝威候儀深々不堪恐懼候間、此辺厚被為

聞食分及辞申候之期、速ニ可被

聞食之趣、方今蒙

勅約候上は暫時之処御請可申上、不願恐懼不敬ニ心底之俣奉言上、実以多罪之儀

御憐愍之程偏奉願上候事、

〔島津忠孝氏所藏本にて校訂〕

三六 〔近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰〕

亥五月廿二日達ス

尚々修理大夫殿へも宜御鶴声希入候、扱此籠菓極内々貞姫方へ進し度、宜敷御伝声希入候、何も荒々如此候也、

追々向暑ニ候、弥御揃御勇健珍重候、誠ニ天下之形勢
日々ニ相変、此末如何可相成と唯々心痛之事ニ候、扱
良節下向ニ付、此愚詠赤面々々ながら進入候、扱甚申
入兼候得共、短刀ニ小子大ニ心ヲ寄セ居候仕合セ、甚
々申入兼候得共、御伝来之古刀之内丈九寸三分位之短
刀御所望申入度存候、何共甚々申入兼候得共、御承知
ニて被下候ハ、深々喜悅可仕候、宜々希々存候、扱貞
姫方御所勞如何哉、專御保護ニて御全快之上、早々御
上京之程希入候、併暑炎之折柄ニ相成、何共申入兼候
事ニ候、何分精々御所勞御保護之様分テ存候、宜敷御
鶴声希入候、梅芳院ニも氣丈致居候事と存候、御序ニ
宜御伝声希入候、何も辛便荒々如此候也、

五月十二日認

(近衛)

内々
嶋津三郎殿

忠房

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

三七 〔本田親雄ヨリ小松帯刀へ書翰〕

尚々時分柄追々暑氣も強く罷成候間、呉々も御自愛
被下度、為國家奉禱上候、扱先便澤勤七郎御役御免

(簡徳 目付)

被仰付候、東下之旨申上候得共間違ニて、當時外国
奉行被仰付候て、随分正義申立候由、水人之手箇中
ニも相見得申候、外国奉行被仰付候折、

叡意御尊奉之上ハ、攘夷之事御決定なくてハ、御受
難仕申出候処、暫時幕議ニ不合候て夫形召置、此節
当務被仰付候由ニ聞及申候、

一筆啓上仕候、溽暑之候罷成候得共、弥御安康被為成
御座、恐悅奉存候、乍恐

御向殿様益御機嫌能被遊御座、恐悅奉存候、爰許

宮様 陽明様益御機嫌能被為入、恐悅奉存上候、次ニ

私事ハ無異精勤仕候間、乍恐御放念可被下候、今度御

上京之時分

(朝彦親王)
中川宮極内御沙汰之御裏様一条、尾州家より頻ニ説を

動し候由候得共、

三郎様思召被為在候間、先今形暫時被召置候方可然旨
内々及言上候処、堅固ニ御守被遊候て、今以御家来之
面々も心配仕候得共、御勤考有之趣ニて、何方も可否不
御分候由如何ニ候哉、其後御御元ニおひてハ御繁用之
御事御座候得は、中々夫処ニても無之筈と奉存上候得
共、何と軟私迄承知仕度、無左てハケ様之時勢ニ候故、

御家来中之心底ニ罷成候ても、御還俗之後適之事故、早目右辺御取究無之てハ安心不出来候ニ付、承事ニ御座候、何分御勘考可被下候、当分京地にてハ薩州之宮様と俗唱申触候由、一向夫等之辺御頓着不被遊、実ニ感服之事ニ奉存上候、扱償金一条差起り、京師議論沸騰、公武之和もつまり破レ可申欵、又是にて一機会を生可申候、先月下旬尾州老侯政事御輔翼被仰出候、一橋卿之跡と被伺候、諸藩此償金一条ニハ皆共大不服と相見得申候、扱御銀主之一条随分御手を附置、可然之人柄も有之候間、紅花も藍玉之二品を以、基本を相立申候ハ、一廉御用意可申奉存候、紅花御金線之儀産物方御元手之由、京師江可被振向御附札、先便藤井着京之節相達候間、則右之処を以心対熟談可仕候付、左様聞召置可被下候、猶追々御差図奉願上候、当時大坂表御金線も追々六ヶ敷模様ニ御座候間、猶更差急キ申度奉存上候、近々之内税所容八罷下り可申候間、其折ハ此方治定之処委細可奉申上候、御神号・女房奉書等も追々被為濟、誠ニ以難有次第、吉田家より御屋敷江

御神位靈御入之節ハ御供奉申上希有、難有次第第二御座

候、當時之京地情態ハ松方より御聞取被下度、猶中山・大久保江申遣置申候、

中川宮様ニも久々

御參 内も不被為在、五月八日御參之処打解、

主上ニも御懇話共被為在、私ニ至大安心仕候、此事當時之事故、如何成候弁之舌頭ニ奉惑も難計、御中之事

頻ニ伊丹〔重賢、前通院宮様大夫〕杯痛心仕候儀にて候、其日

玉座之御模様大略何不奉候次第ハ、別紙ニ書記奉申上

候、先ハ御安否伺且御書之御札取束如是御座候、恐惶

謹言、

亥

五月十四日 京都

本田彌右衛門

親雄



帶刀様

侍史

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

三八〔本田親雄ヨリ小松帶刀へ書翰〕

亥五月八日

〔朝彦親王〕

中川宮様御參

内之節、御親話之次第極内申上候、

一御還俗已來長く御参もなく候、其訳ハ御国家之大事件被仰立候儀も更ニ御用立も無之、且先関白在職之時分ハ議奏同道にて入来、御大事ハ御直ニ御相談も被為在候得共、近来左様之事もなく、全く被捨置候形と奉見受候故、御不参ニ及候由、方今堂上方之議論紛々 朝議錯乱之折、言不被行砌ニ参向も無益と存申候、乍併只今之形勢如何とも難致候付、時宜機会と申事有之ものニ付、其折御所置可有之との趣、且国事御輔佐之事ハ辞表不被

聞召ニ付ハ、御受ハ今通可仕居候、乍去瑣細之事件参政・寄人之輩と論を争候位之事ハ御断ニ奉存上候、尤御大事ハ如何ニも参謀可仕候、其御大事と申事ハ攘夷拒絶、是当今之第一にて、外ニ御大事ハなく、是も勅諭之上ハ最早武門之委任ニ候間、御任せ可然奉存候、切迫危急と申事ハ攝州海より夷船攻登り、

帝闕江責入候折ハ眼前之切迫ニ有之候、其時氣力勞レ候ては、無論無言甲斐候間、只今之内氣力を養申方宜候付、

御上ニも御酒ニても被召上、御鋭氣を御養可被遊方可然奉存候、是よりハ日参仕候

様 殿下より沙汰も承候得共、五六日ニ一遍位ツ、参り、先関係不仕体にて罷在可申、国事之儀御受ハ不致居候ては差支申事も有之、島津杯急ニ被召候都合之時之為ニても候故、即今之処強て日参杯不

仰出様奉願候、且又 宮様を日参御勸為申事、如何ニも不審ニ考申候、是不出来話之後ニ成立候

朝廷故、私を出シ掛何も宮之御裁判も此通と承候杯、いはん料ニ設置之姦謀と奉存候、無左てはケ様ニ参政始申出候訳一円無之旨、御察之処を内々言上被為在候処、成程左様之次第にて可有之との

御沙汰にて、皆程能

聞召候て、 宮ニも極て

御安堵之体にて候、

一三郎公より 宮様へ御献之御酒、鯉節御初穂、其訳御申、御所江御献上之処

御満足之由、是にて島津着後之一左右ハ有之たりと、独り

思食候旨

御沙汰にて、夫より引続

三郎公ノ御話共被為 在候付、先日(近衛忠徳)前関白江直書困元

より到来、其内ニ

朝廷御大事之機会ニハ後レ不申、此節急ニ帰国仕候ハ、
趣意有之云々と申御次第逐一御申上之処、夫ハ大ニ被
遊

御安堵候旨

御沙汰ニて候由、就てハ 御大事と云時ニハ、

宸筆御書ニても可被下と、

勅託被為 在候、依て此旨極て内々其方迄申聞置との
宮様 御沙汰ニて、何共恐懼不少敬て奉拝誦仕候、低
頭頓首仕居候、難有旨言上仕候外不覚落涙仕候、只々
御推察可被下也、

右極内奉申上越候、誠恐百拜、

京都

五月十四日

本田彌右衛門

帯刀様

御直覽

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

三九 〔本田親雄ヨリ中山實善大久保利通へ〕

書翰

関東近日之形勢大ニ動揺之由追々世評も承居候処、今

〔朝彦親王〕

朝中川宮江参 殿仕候て、別紙水藩人之書面写取差上

申候、水人志有者此節價金論評決、尾、水両侯ニ出候

を天下ニ対し無面目悲泣仕居、梅澤孫三郎〔孫太郎亮九〕と申者 宮

江も歎願之趣共有之、百万救護之道論訟之様子、同人

儀は十二日東下いたし、其後原市之進〔忠成、水戸藩士〕と申水人

宮江参 殿、関東之形勢一變動揺、價金論之不可救之

代りニ、拒絶掃攘之成功を以相替、前罪贖申度志願歎

訟ニ付、去七日出之別紙一通差出申候て、如是次第御

座候間、太田道淳及酒井驛飛守を打退之策を尾老侯江

御内諭被下候様類ニ願出候、何分関東之沸騰満宮、奸

論充満之体ニて候ハ相違無之由ニて、追々可申上候得

共、今日迄之処別紙之次第御座候間早々申上候、尾侯

ハ未京着ハ無之候、五月十日之応接期限ハ延引、何分

右体之模様大紛擾と相見得申候、尤是より一機会を生

可申欵、扱京師ハ先松方江託申上候外不相変候、此段

早々申上候、関東江も駈引旁不容易時体ニ相成、京師

迄ハ此涯

君側より御差登候欵、又は可然要政之御方御上京有御

座度奉存上候、篤と御吟味可被下候、乍不肖一盃之処

ハ精力を尽シ可申候得共、此処ハ機軸之動変ニ大関係

之模様ニ相成候間、存付候次第申上候、右御内用迄早々如是御座候、以上、

京都

五月十六日

本田彌右衛門

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

追て急速相認、蒸氣船白鳳丸大坂出帆之間ニ合候様と存、差急候故別段小松家江も不申上候事、

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

四〇〔本田親雄ヨリ中山實善大久保利通へ〕

書翰

態と飛脚差立、京師并関東之形勢左ニ申上候、松方助左衛門帰国、大坂滞在中御用封差遣旨、水戸藩士之私書写取差上置申候、右ニ付其後之次第相分り不申候処、昨朝高崎猪太郎江戸表より荒増申上候書翰、并聞合申候て横濱港へ差越、町触等写被成候書付到来、并水藩士之私状随分内情を尽し候一冊子有之、水人
中川宮江昨朝持参仕候由、右写并一橋卿当職之御辞表一通、鷹司殿下江之一書今日便差上申候、是にて関東之情態内策稍可察ニ付、追々

天覧ニも備り申賦にて、既ニ先日之水藩人之書

御覽被為在、一橋卿之処も別て被為懸

叡念、何分可救之道相立候様

御沙汰之由敬承仕候、関東ハ攘夷拒絶など申事ハ、と

ても参り申事ニ無之由、今日之形勢ニ付ハ、

御朝議も大ニ御処置振ニ御困り之御内情と被伺申候、

(長行、老中格、唐澤藩世子)

小笠原圖書頭儀拒絶応接之論と一橋を扶ケし処ハ、水

野痴雲始随分正論と申候得共、何分不容易

(忠徳)

皇国之大事、独断を以償金十七万トル差渡候一事、奉対

朝廷不可有之大罪此上なき者にて、此儀ハ昨朝当表江

も相知レ為申儀故、同人御処置及関東へ御達振之処等

御朝議中之由ニ奉拜承候、此一事ハ猶追々可申上候、

一橋卿ニも最早御独立孤行不被得止之場合ニ付、御辞

職実ニ御心中被察候、乍併二月十一日攘夷期限御受被

成候時ニ、此病根ハ釀被置候事にて、失誤今更論し候

ても無用之事なから、残念之至ニ奉存候、

一昨日ハ

中川宮様ニも召ニ依り御参 内、種々塔も明候故、

御朝議共 殿下御相談有之候得共、大略御評議次第と

被仰、一橋卿之一義ハ、今日ハいまた何之分別も無之

旨被仰切候由、右ニ付 殿下より

三郎公を被召登候事御相談被為在候処、被召之御詞ハ如何被 仰候哉、此節上京御暇帰国之次第御聞之通之儀ニ付、普通之御召ニテハ上京之儀ハ御受難申上可有之歟と被 仰答候て、先夫也

御朝議ハ止候由、

主上之御前江御一人御出頭之折は、段々

御内話も被為 在候哉ニテ、追て微細ニ拝承之上可奉申上候、関東右通之形勢ニ付ハ猶差惣ニ付て、一變動可仕と見及申候、就は先便ニも申上候通、此涯之処暫時誰そ御上京有御座度、日々宮様よりも乍恐

御相談等奉承知、重大之事件天下治乱ニ関係之際ニ当り、実以愚昧之私式日々配慮仕事ニテ、一身之勞苦心痛等ハ更ニ厭申儀ニ無御座候、

宮様ニも極内ハ枢機之密策

御直ニ御拝聴被為在、乍恐御当家御依頼之

思召より、件々

御顧問を奉蒙次第、万一も天下之事件を誤候様之儀奉申上候ても、実々恐懼不少、此涯之処甚至難至重之御

場合と奉存候付、

皇国之御為何れ之筋ニも御輔翼、此時と奉存上候、篤と御熟考

君意御伺取可被下候、極内此旨申上候、

一大樹公昨日御参

内、攝海岸巡覽御備之趣言上、昨日ハ表通小御所ニテ天顔拜、畢て退出之由ニ候事、右条々奉申上度如是御座候、猶不絶已来之形勢可及言上候、以上、

亥

五月廿日

京都

本田彌右衛門

御国元

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

四一〔村山齊助ヨリ藤井良節へ書翰〕

〔勝勢、備中松山藩主〕

先達て於浪花板倉閣老へ相迫り候儀ハ、貴兄いまた御滯京中ニテ委曲御承知之通ニ御座候、其節申伝候償金扶助金共ニ弥相渡候哉、未相渡候哉之間、睨と相分り不申候処、此節関東より事情書相達、当月九日弥被相渡候ニ相違無之、左候て攘夷期限延引よりすへて満宮

俗論怯懦之次第、逐一今便より申上越候間、御承知ニ相成候事と奉存候、然る処京師之情実、近來ハ諸暴論之者共もおほかた致帰国、堂上方之尻押いたし候者も無之哉ニ相見得、一体関東因循之取計ニ付ても、思之外朝廷より御せめ付之模様無之、三條・姉小路などニハ余程おたやかニ相成候様相見得、甚不審ニ御座候、畢竟他人之力ヲ借り付ケ棄之暴論故、尤之事トハ存候得共、自然ハ幕吏之賄賂も被行申候半と存候、彦藩杯も〔黄石、彦根藩家老〕岡本半助致上京、頻リニ三條家へ手ヲ入候由にて、此節ハ掃部頭も上京、浪花へ罷下り候由ニ御座候、岡本半助当年五十二歳也、三本木之舞妓何と軟申ものを二百金にて受出し候由、此事全半助か好色より出候事ニ無之、官家へ相睦ひ候道具ニ致し候事之由内々承り申候、虚実ハ分り兼候得共、肥後藩士之咄ニも左様申事ニ御座候、將又関東一統之俗論実ニ沙汰之限りにて、大樹公板倉已下一向御存無之と申事ニ候得共、是以虚実相分り不申、尾州大納言此比上京之処、道中より病氣之由にて名古屋へ引籠り之由、兎ニも角ニも関東之因循ハ相違無之、千万年相待候ても

叙慮遵奉之道ハ相立申間鋪奉存候、五月十日長州夷艦

打払ニ相成候事実ハ、取々ニ承り候事にて、いまた懃成儀も承知不致候得共、自然ハ実事なるへく哉ニも存申候、尚追々情態相分り次第可申上候得とも、任幸便此段形行申上候、御心得迄ニ御座候、已上、

五月廿日

村山齊助〔時憲〕

藤井良節様

参人々御中

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

四二〔徳彦ヨリ圓へ書翰〕

益々御清適奉賀候、東報御伝返被下委吟味仕候、其間諸州ヨリ五六名乃至六七名宛東上之議有之、是レ則回天妙用之存スル所ト見へ候、凡ソ地上之万物ハ、天氣ヲ以テ役シ玉フコトナレハ、人情之此ニ至ルヲ四五年相待居申候、海外ニ災ヲ生シ、又此勢ト出テ候事必然之回復ニ御座候、大概天下之人天命ニ明ラカナルモノ少ナシ、仍テ往々天命之説ヲ疑ヒ候ヘトモ、是ハ必ス疑フ可カラサルモノニ御座候、故ニ聖人之ヲ貴申候、此日之事ハ

神武天皇以後ニテノ大事ニ候へハ、世間ノ見ル所位ニ

テハ百事成就寛束ナク候間、乍失敬克々其御考味被下
度候、右ニ付別紙呈尊覽候、御取捨奉冀候ナリ、極メ
テノ妙用ハ夷人ト応接シ、諸藩ヨリ追々上リ込候人ヲ
島津左府公御優待ニ有之事ニ候、左府公之御所存ニ於
テハ此人ハ皆御手足ト被思召時ハ、御過チハ無御座候、
今日之極大事ト申ス議ハ小生之鄙見ヲ以テスルニ、五
大洲中ニ於テ中華ノ光輝ノ秋、毫存シ候ハ我カ日本ニ
テ御座候、堯舜ハ既ニ禅讓ヲ以テ誤ラレ禹ニ及ヒ、是
ヲ救フテ功ヲ得ス、終放伐篡弒ニ漸シテ夷狄ト相成候、
幸ニ我一姓不易ノミ、五大洲中ニ存シ候、天ノ日本ヲ
滅スルニ意ナキハ此ニ存スルト察シ候ヘハ、此御着眼
ニテ御救済之術御建被下度候、屯困ノ世ヲ救フニハ利
建候コト有之候、是ハ孫子ノ全争ニテ、不戦屈人之妙
用天功人其代之トモ有之、天之化育ヲ賛成スルトモ有
之候、其妙境筆紙ニ尽シ難ク候ヘハ、篤ト御熟考被成
度奉存候、日本ヲ封建ニシ中華トナシ候事ハ、兩三ヶ
月ノ間ノ所置ニ有之事ニ候、且ツ東京ニ自然人ノ萃ル
勢ナレハ、兵ヲ御備不被成テハ御後悔ニ相成候、尤今日
朝廷ノ兵ト申ハ毫モ益ニハ不相成、却ツテ姦徒暴動之
根脚ト相成、患有之候ヘハ其兵モ解釈シ、別ニソヲ備

候御工夫第一之義ニ御座候、御藩之正義組ハ御存之通
ニ候ヘハ、皆死力ヲ以テ

皇上ヲ護衛シ、且ツ近来ノ様子ナレハ、久光公ヲ護衛
スルノ氣象火ヲ見ル如ク候ヘハ、特ムヘク候、其外別
紙大略ヲ入御覽候間、筮法モ一ハ御用被下度候、何分
華族議院之妙用ヲ檀原氏ト御深謀被成度候、天下大同
之情ヲ通スルハ、此ニ御座候様愚按仕候、既ニ明日御
出帆故拜顔之違無之、遺憾此之事ニ御座候得トモ、千
里之外一堂ニ臂ヲ抱キハ尋常之義ニ御座候ヘハ、敢
ヘテ危懼スル所ハ無御座候、只々 左府公今日之

天命ヲ篤ト御承知被遊、

天命ニ毫モ御違無之、

御動静被為在候事ノミ日夜祈事御座候、五大洲ニ天地
ト同徳ト大道全ク滅スルト興ルトハ、今日之御所置ニ
有之事ナレハ、宇内之一大事ト可被思召様申上度事ニ
御座候、

天命ヲ御奉シ被遊候ヘハ、別ニ智謀才略ハ御求不被遊
テモ御大功ハ成就仕候、仍テ周公モ直方大不習無不利
ト被申候、此ノ義ハ 左府公之御身上ニ確乎ト相当居
候ヘハ、公ニ企望スル所ハ此ニ存シ候、占兇者流ニ

黷レ、聖人ノ易道亡ヒ候ヘハ、世人易ヲ侮リ候ヘトモ、
 三聖人ノ直筆之教ハ此ニアリテ、治国用兵ノ妙用一モ
 之レニ因ラサレハ、天地ト徳ヲ合スルコトハ不相成候、
 天下ヲ一握ニ見ナカシ候事ハ是ノミ故、古人モ運天下
 乎掌上之有之候、是レハ古人ノ傲言ニテハ無御座候、
 実着ノ言ト覚ヘ候、人ヲシテ不軌ノ心ヲ生セシメサル
 ハ、兵備ノミニ有之事ニ候ヘハ、人ノ会萃スルニハ此
 予備至急之要務ニ御座候、左候テ是迄之官兵隊ヲ自然
 ニ解散セシメ候事要務ニ御座候、且免置ノ張処御座候
 無之様ニ御氣ヲ付ケラレ度候、天地間ノ大略此ニ止リ
 候ヘハ止愚毫候、暑氣益々酷烈ニ相成候ヘハ、別テ御
 氣体御要慎專一ニ奉存候、先ハ右申上度如此御座候、
 尚別幅御熟覽御叱正奉願候、草々拜呈、

五月二十一日

徳彦

圖様

侍史



〔この文書年紀違いカ〕

四三 〔徳彦ヨリ圓ヘ別書〕

別啓

西郷某兵ヲ率ヒ海外ヘ出候趣新報到安心仕候、是レハ

君子有為ノ日ニテ、小人憂ノ日ニ相成候、五ヶ年以來
 今日ヲコソ相待居申候、西郷氏害ヲ受ケ候様ニ終ニハ
 相成可申候得トモ、天下ニヨイテハ大幸ト存候、即易
 之九三之爻々需于泥、致寇到ト有之候テ、仲尼ノ災在
 外也ト被申候ハ是ニテ、西之海外ニ兵ニヨリテ災有之
 ト、上六ノ陰爻ヲ睨ミテ申シタル辞ト見ヘ候、

天命ノ可畏如斯モノト見ヘ候、是ニ付愚念ハ島君ニ御
 座候、衆小人ノ中ニ御独立ニ御座候ヘハ、速ニ御馳上
 リ被成、万分ノ一ヲ御救ヒト檣原氏ヘ被 仰入候、聖
 人ノ着眼ヲ以テ被 仰上被下度奉願候、

其大略

承り候ヘハ、諸藩ヨリ追々老練之人自然被罷出候勢出
 候由、是レハ天ヨリ被差出候人ニテ御座候ヘハ、何卒
 御待被成度候、其証ハ上六ノ爻辞ニ周公曰、有不速之
 客三人来、敬之終吉トアルニ、仲尼之伝ニ被申候ニハ、
 敬之終吉雖不当位未大失也ト有之候、仲尼ハ三人ノ字
 ヲ削リ被録候、凡ソ三ト申スハ全国ト申ス義ニ御座候
 ヘハ、日本國中ヨリ罷出候事ニ相当可申、敬スルトハ
 御厚待被成候事ニ当り候、左候時ハ時艱ニ逢ヒ候テモ、
 未タ

國家ヲ大ヒニ失フニハ至リ不申ト申ス事ト見ヘ候、不
殘 左府公ヲ助ケ候人ニ御座候、 公之終天之御憂ヲ
被為解ハ此所ニ有之候、

一 政局ハ需于血出自穴ト有之候ヘハ、諸官員辞免職ト相
成ル勢生シ候事疑無之候、出自穴ト申辞誠ニ妙ト覺ヘ
候、官員ヲ狐ニ喩ヘ天下ヲ惑ハスト申ス事ト見ヘ候、

社鼠ト相成候モノ之穴ヨリ出候ハ天網ナレハ、人力ニ
テ勝事不能所ニ御座候半軟、血トハ血ヲミルコト、云
フコトナレハ、終ニ群党相戦フ事ト相成可申候、八日

ハ屹度御用心ノ日ニ御座候、大概ハ此方ヨリ術之施コ
スヲ主ト不仕、彼ノ形ニ付テ御処置振有之而已ニ御座
候、今日強テ術ヲ加ヘントスルハ、世俗ノ智者ノ見ル
所ニテ、上智ノ人ハ己ニ敗ル、者ニ勝事ニ候ヘハ、待
テ在ハ彼ノ動クトシテ、自滅ヲ招クコトニ非ラサルニ
ナキモノニ御座候、江藤等之妄動ニテ御承知被成度候、
施設ニ至極之妙用有之様見ヘ候ヘ共、筆紙ノ所及ニハ
無御座、乍遺憾泄シ候、

一時々勢之進退有之候トモ全是ニハ御注目被成間敷、出
自穴ノ事ハ無相違事ト単ニ御落着被成置、御失措ハ無
之様相考ヘ候、時勢ノ変スルヲハ易ニ或躍在淵ト申ス

如ク、朝暮ニ相場ハ狂フモノニ御座候、其小進退ニツ
キテ躁クヲ、孫子二人ニ役セラル、ト云フ事ニ見ヘ候、
是レニテハ皆虚ヲ処シ候ヘハ、大功ハ成就不仕候、確
乎卓立シテ、彼ハ自滅ヲ招クコトノミヲ行フト云フ処
ニ足ヲ踏止見ハタセハ、柳ハ柳、桜ハ桜ト見分相成、
ソレニ相応之御馳走ハ相成申候、

一 華族議院ハ賢者ヲ顧問ニ被招候様有之度候、大概高貴
之人或ハ位ニ驕リ候賢者ヲ侮リ、或ハ遊儒ニテ事ヲ事
トシ玉ハサルヨリ、今日之

天罰ヲ御受け被遊タル事ヲ御後悔被遊候ヘハ、社稷御
回復ハ相成可申、不速ノ客ヲ敬スルト云フハ、是等之
所ニ照応有之カト覺ヘ候、此事御策略有之度候、

一 洋(文)ヨリ懸候談判ニハ頗ル応接振有之事カト考ヘ候、
屈伸之利人情之利ト申ス所ヲ照シテ、寛洪ニ可有之事
カト察候、

今日ノ急務大略如此ニ御座候半軟、御按可被下候、
此後辞職事始リ候ヘハ、何卒速ニ左之廉々御施行ニ
相成候様有之度考候、

一 曆ト時鐘トヲ旧式ニ復シ候事、
此件最速ニ御布令相成候ヘハ、復藩モ何モ行ハル、

事ト人心定リ可申候、

一守・介・掾・目

此事ハ直ニ復藩行ハレ不申様、先ツ御行ヒ置被成候
事大秘事ニ可有之、尤モ近衛隊其外之諸藩之旧臣ヨ

リ出候兵員ハ、直様旧君ノ管轄ニ相成候様被

仰出、可然候半カ、是レ姦徒之煽動ヲ防キ、其党ヲ

碎クニ、一彈丸ヲ不用不戦屈人之妙用カト考候、

一真ニ御信用ニ相成リ候兵隊ヲ被為徴、今日之諸兵隊ト

鎮台トハ御解キ被成候、可然様奉存候、為高必因丘陵

ト申ス言中庸ニ見ヘ候、少シノ兵団有之候テモ姦賊之

根拠ト相成候、悉有之物ニ候ヘハ、此事ヲ思ヒ付候、

一此ノ後漸クニ諸藩之士東都ニ萃マルノ勢ヒナレハ、此

勢ヒヲ見レハ、君子ハ先兵ヲ備ヘ、非常ヲ予防スルコ

ト古之道ニ候、是レハ聚ル人ノ間ニハ種々ノ人アレハ、

其ノ心ヲ生スルヲ予防スル所ト見ヘ候、君子ハ未然ニ

事ヲ戒シム故ニ常ニ無患ノ地ニ在リ、小人ハ患至ツテ

防之ク故ニ害益々甚シ、仍テ前条之御趣意ヲ以テ真

実之兵隊御召募ニ相成、人心ヲ未然ニ御圧抑被成置度

奉存候、

一此後西洋ヘ脱走ノ人有之勢ヒニ可相成候間、要津嚴戒

被成度候、

一此度之变革ニテ、万世不易之良制御建被成候御意匠先

被成置度、家康公大坂後ノ御陣ニ林信勝等ヘ被

仰付、専ラ制度ノ吟味被為在候事、知大体ト申ヘク候、

秀吉公ノ所不及ハ此所ニ候半カ、篤ト御工夫被成度候、

大略如斯凡大旨ヲ論スレハ

百事彼自カラ斃ル、事ヲ制シテ勝ヲ我ニ輸シ、我受テ

己ニ敗ル、者ニ勝ツコトナレハ、彼ヲシテ自滅ノ謀ヲ

成シ得セシムル如クニ行フコト妙用ト奉存候、此味ヒ

最水中ノ塩味カト考候間、御考慮奉願上候、以上、

五月十九日

徳

圓若

侍史

四四〔建碑ニ関スル書翰〕

一亥五月廿一日晚四ツ時分大砲ノ音度々聞ユ、コレ三月

出帆セシ蒸気舟着船ナリ、廿三日朝伊八郎松方氏ヘ差

越、一札シ建方ノ一条承候処、此已前トハ相替リ、浪

人ノ一件ヨリ何扁相替リ候ニ付、碑銘ノ趣意長・土ノ

輩別テ嫌忌ノ事ノミニテ有之、建方有之候ハ、直ニ見

候儀ハ案中ニテ、万一相障リ候儀モ到来イタシ候テハ、却テ外聞ニモ相拘リ候ニ付、能々聞合御留守居杯申談、左様ノ心当モ無之候ハ、直ニ建方イタシ候様ニトノ事ニ付、此節迄ハ建方無之、右様ノ勢ヒ相和キ候上、直ニ建方有之候様申談置候、右ノ趣申上具候様ニトノ事ニテ候由、

但拙者ニモ碑銘ノ文面ニ付テハ、決テ嫌疑ノ廉モ可有之存居候処、果シテ其通ナリ、

四五 〔異国船渡来長崎報〕

^{四五ノ一}五月廿四日異国船一艘渡来、右ハ亜米利加蒸氣船ニ有之、右船江被雇乗組居候水先案内讚州安藏口上聞書左之通、

五月五日神奈川表出帆、瀬戸内通同十日豊前国田ノ浦江碇泊致シ居候処、翌十一日曉七ツ時比同所上ツ手ノ方ヨリ不意ニ大筒打掛、数発ノ内本船艦綱ヲ打ち、蒸氣烟出筒ニモ同損候ニ付、乗組一同驚キ、早々乗逃候様異人共差図致シ候ニ付、藝州瀬戸乗通、同夜中沖手江乗出シ、翌十二日明方地山見渡候処、日向沖江乗離レ居石炭乏敷相成、何分此俵ニテハ長

崎へ向参リ兼候趣異人共申シ、夫ヨリ大洋江乗出シ日不覚、外国海岸江着船致シ候ニ付、此所何地ニ候哉ト異人江相尋候処、唐国上海ト申所ノ由初テ承知仕候得ト、上陸等不為致同所江四日程滞船仕、石炭積入同所出帆、五月廿三日夕長崎港着船イタシ候事、

四五ノ二

五月廿四日佛蘭西国軍艦一艘入津、右船江水先案内被雇、大村領米太郎ト申者下ノ關ノ始末申述候聞書左ノ通、

右軍艦五月十七日神奈川港出帆、同廿二日夜長崎表ニ汐繫仕候処、役人衆小船ヨリ御見廻相成、翌廿三日早朝出帆ノ賦候処、長府ノ方ヨリ石火矢打カケ、下ノ關地方且異国船造ノ船ヨリモ追々打カケ候ニ付、小船ヲ卸シ候処猶々打カケ、小船ハ損シ候故、碇一同其俵切捨出帆、廿四日長崎港着船ノ旨申聞ル、一右軍艦入港ニ付、定例之通役々乗移糺方相濟、其末船將腹立体ニテ、士官ノ者引合下ノ關ノ始末荒増申聞候ニ付、役々船中一覽ノ処破損所々ニ有之、其外士官ロツク^名ト申者右ノ手ニ少シク摺疵受候由、船將モ同様ニ候得共、怪我人等ハ無御座候由申候、

四五ノ三

横濱江異国軍艦渡来ノ事情且攘夷ノ儀ニ付、爰許江相
 分候成行ハ追々御届申上候通ニテ、其後御達ノ趣モ無
 御座候得共、先達テ亜米利加商船神奈川ヨリ下ノ關通
 船ノ砌、同所江帆前ノ軍艦二艘出帆、右ノ異船ヲ挾候
 テ及砲発候処、大砲二十發計ノ内砲發打当、少々及破
 損、乍漸通船此地江入津未滯船仕居候、且又佛蘭西軍
 艦小振ノ飛船神奈川ヨリ出帆、神奈川奉行ヨリ長崎奉
 行江ノ書翰モ致保護、是又下ノ關通船ノ処同所ヨリ及
 砲發五六發打当、既ニ危急ニ相迫リ候ニ付、異船ヨリ
 モ致砲發候処、地方ヨリノ砲發暫打止候付、漸相凌通
 船、一昨廿四日昼時分此地へ入津仕候処、右ノ船將至
 テ致憤激早速上陸、此地滯留ノ各国コンシユル共江及
 談判候ハ、是迄追々攘夷ノ儀專及建白候ハ、長崎ニテ
 帝モ無抛御許容相成、先達テ攘夷ノ儀被 仰出候処、
 於將軍家モ不好訳ニテ、

帝モ一度被 仰出候儀ニ付御取返シモ不相調、未各国
 江御達モ無之、御猶予相成候段ハ深致承知居候処、此
 度長州ヨリ度々及砲發候ニ付テハ、愈以長州ヨリノ建
 議ニ相違無之、可恨ハ長州而已ニテ、何モ日本江可致

對敵心底ハ更ニ無之候付、此上ハ兎角右ノ怨ヲ不報候
 テ不相濟儀ニ付、上海滯留ノミニストル江モ及談判、
 英・佛軍艦儘ク致連渡奉行江届ニモ不及、長州對一國
 可及戰爭段申入候処、爰許滯留ノコンシユル共ニモ存
 寄無之旨ノ由、且此地滯留ノ蘭軍艦大砲數十門載付候
 蒸氣船一艘、神奈川江差越管御座候処、右ノ次第二付
 下ノ關通船ノ砌ハ、地方ヨリ及砲發候儀ハ必定ニ付、
 其節ハ則及戰爭、下ノ關燒払候賦ニテ用意致嚴重、去
 ル廿四日昼時分爰許出帆仕候、

一生麥一条付價銀ノ儀、於政府薩州ハ致恐怖、兎角煩勞
 相起候儀付、右一件ノ價銀四十四万枚江戸政府ヨリ相
 払事濟候段、爰許滯留ノ英人コロウル書翰中ニ書載申
 来候由、

右五月廿六日長崎出ノ書翰同廿九日達、

四六〔近衛忠房忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

尚々切迫之形勢歎息候、

天朝真実之御趣意不貫徹、暴烈之者共增長歎入候事、
 追々向暑候、弥御勇猛尚承度候、方今天下之形勢何共
 筆紙ニ難認、実以治乱之堺何共痛心候、就てハ其許御

上京之義如何ニも祈々々々入候事ニ候、迎も御上京ニ不相成ハ、暴烈ノ治りかた六ヶ敷色々ト苦心候、大樹滞在帰府両様之事ニ付大混雜々々、関東ニハ償金も遣し候次第ニテ、決テ攘夷之場ニ不至、戊午之頃井伊出職中同様之次第、姦吏之徒計一人モ有志無之旨、一橋ニも是非無次第引籠居候由、案外之大変而已ニ候、姉小路大變一件甚六ヶ敷々々薩人之業ト相成、召捕ニ相成居候人々在之、扱々痛敷候、是ハ全其許ヲきらひ罪ニおとすへき計策と被存候、扱々苦心難堪候、尚委細彌右衛門初より可申入ト存候、幸便荒々大取紛居、寸隙ヲ盗ミ大乱書荒々御推覧可給候、此場ニても其許何卒御奮發御上京ナラテハ、国家難治何卒御賢考分て祈入候事、

五月廿六夜認

極内密

忠照

嶋津三郎殿

忠房

御下

〔島津忠家氏所藏本にて校訂〕

四七 〔近衛忠房忠照ヨリ島津久光へ書翰〕

内密々々

高崎猪太郎〔五〇〕其地へ下向、何も具ニ御聞取之事と存候、誠ニ不存寄大變相起り、何共々々痛敷候、実々此大變明白ニ不相成ハ、朝敵ト相成候てハ実々於当家も何共面目モ無次第、対

天朝実々 勤王之趣意モ失ヒ候事ト、何共此一件深悲歎之至ニ候、全此義は薩州ヲ忌嫌フ者之計略よりして、薩ニ相決候事と実々何共口惜々々残念々々成次第、如何ニも此儀分明ナラズンハ、其許昨年来格別尽力被開基本候儀モ、一時ニ水之泡ト相成必至歎入候事ニ候、何分ニモ此義分明ニ相成候様御尽力有之候様、呉々申入候、

朝廷之処精々

御疑惑無之様仕度存念、併御案内之通氷解難成向々モ可在之、其辺之処扱々痛敷候、何分今度之義ハ不容易變事故、其許御出京ニテ御尽力明白ニ相成候へハ、重畳之儀と存候、呉々苦心不忍申入候、呉々屹度御尽力之程偏ニ々々々々入候、

中川宮ニも格別御歎痛之儀、実々御尤千万、何共此俵ニてハ対 天朝千載之御奉公モ難立、何分ニモ無実汚名之罪分明ニ相成候様呉々祈入候、何分ニも御賢考ニ

て、薩藩一体ニ不拘様吳々疑惑氷解之処折入候、何卒十分ニ厚御賢考在之、明白之所置幾重ニも待入存候事ニ候、吳々苦心之至ニ候也、

五月廿七夜認

大乱書不文御推覽

忠熙

内密々
嶋津三郎殿
御下

忠房

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

四八 〔近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰〕

四八ノ一

別紙ニ申入候、東寺院家真情院ヨリ極密被頼候、何卒東寺寺内外藩へ借用致候義断度、実ハ先達テヨリ因州・藝州其外諸方ヨリ借受度旨申来、大樹上洛ノ節專借受度旨ニテ度々申来、甚迷惑ノ由、薩州・長州ナレハ何時成共借度旨、殊ニ薩州ナレハ大慶ノ由、何卒拙家ヨリ其御方へ申入呉ト度々ノ頼ニ候、尤只今ト申訳ニテモ無之、大樹上洛ノ砌ニテ宜候間、唯今ヨリ借受度旨申込被置候へハ、先安心ノ旨ニ候、仍右申入候成不成ノ義早々承度、内々如此候也、

内々

忠房

三郎殿

御右

四八ノ二

別紙ニ申入候、度々其許御上京ニ相成候様、以

勅書被 仰下、且又参 内之節 御沙汰モ被為在、何

分昨年

勅定候守護職一条、深キ

歎慮不貫徹、何分暴烈之堂上増長更ニく不動、扱々

ト歎痛候、何卒此場ニテハ打やぶり、其許御奮發御上

京之様、何卒祈々々入候外致方聊モ無之、只々且暮ニ

歎息之次第吳々御賢考、

公武御一和・皇国万民安堵之御良策在之度存候、実々

中川宮ニは御扶助之所詮も無之、同様ニ歎息被致候事

ニ候、御遠察可給候也、

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

四八ノ三

一小笠原姦工ノ者共二十人・三十人宛日々ニ上京致候、

何時暴発難計トノ事関白言上ノ事、

一中山忠光長州ヨリ三百人計引率ニテ上京候ヨシ、長州

ニテハ賞美ノ旨右ヲ薩へ召捕セ度思召之事、

一三條中納言・徳大寺中納言等言上、幕ノ方ニテ廃 帝

ノ説專発リ有之由、浮浪士ヨリ承候旨言上之事、

一扱関白言上ニハ、修理大夫三郎全伴上京ノ説專ナリ、

右上京候ハ、何レ一事起リ候半、当職御役人并参政・

寄人・国事掛等取ノケ候半トノ事、併参政以下取ノ氣

ハ兼テノ上ノ思召通リト申テ、内々笑談ニ相成候事、

右ノ通リ 勅書ヲ以内々伺候事ニ候、関白ノ処ハ仮令

三郎上京一洗致呉候共、矢張只今通在職ニテ、全コチ

ヲ物ニ御引込被遊旨関白底意決テ慕^(暴力)ニ無之、頼ニ被思

召候故、在職之俸ニ被遊度トノ事、野宮宰相中将ニハ

御腹心ノ人体ニテ、至極宜敷様ニ被 思召候ニ付、故

障無様被遊度、兼テ被 仰遣候旨被 仰下候事、

右極内々御咄申入置候事、

四九〔村上銀右衛門ヨリ中村善兵衛外二名へ

書翰〕

一筆啓上仕候、暑烈敷御座候処弥御勇健可被遊御座、

奉恐賀度候、然ハ昨朔日イキリス火船ノ軍艦宕艘、八

ツ時分下ノ關ノ瀬戸内ヨリ参リ差掛、長州様御手船二

艘ノ間ニ参附、大砲双方打放、言語道断ノ次第候、誠

二下ノ關ハ百雷ノ如ク大騒動仕候、先日ヨリ追々ニ参

リ四度ニ及申候、下ノ關ヲ目当ニ参リ候様ニ見聞仕候、

何卒穩ニ相成ヘクト奉祈候、荒増別紙ノ通ニ候、差越

御注進申上候御序ニ宜被仰上可被下候、以上、

六月二日

村上銀右衛門

中村善兵衛様

中村善左衛門様

田原與兵衛様

五〇〔攘夷沙汰書〕

御書付苞通

但外夷応援掃攘有之様トノ一件

伝奏

坊城大納言様

取次

藤木主計

右ヨリ御留守居御呼出ニ付、私代勤罷出申候処、右主

計ヲ以御書付被成御渡候付拜見仕、委細承知仕候、早

々国元江可申納旨相答罷帰申候、右通相勤此段申出候、

以上、

御留守役

六月七日

横田鹿一郎

手形所

右之通相勤申出候間、別紙相添此段申上候、以上、

京都

亥六月八日

手形所

御国許

御家老中様

別紙

外夷拒絶期限之事、先達テ天下江布告相成候上ハ、

於列藩夷船攘斥之心得勿論候処、傍觀ニ打過候藩有

之候趣、深被惱

宸襟候、既於長州兵端相開候、就テハ

皇国一体之儀ニ候間、互ニ応援掃攘有之、

皇国之恥辱不相成様、鬪藩一致決戦尽力

叙慮貫徹致候様

御沙汰候事、

六月

五一 〔喜入久高ヨリ小松帶刀へ書翰〕

一 順聖公御社本南泉院柵之処江御造宮被

仰出、且

照國大明神様と御頂戴被遊候由にて、井上信濃守奉守

護罷下候由、誠以恐悅此事御座候、乍然基

太守様御孝道之御精心より起り候御事にて、実奉感服

候、

二丸君ニも嘸御満悦被為遊筈と奉存候、乍恐万古不朽

之

御美事御互ニ難有奉存候、

一 掃攘拒絶期限何と被延ニ相成、近頃為何音も無之候、

償金は弥差出候趣ニ御座候、右之事件は高崎猪太郎駈

下り、当地之形勢其外一橋公之件々、御懇ニ申上候様

申付置候間、疾致着具ニ言上候半と存申候、故ニ致筆

略候、

一大樹公ニも、去十三日攝海より蒸氣船江 御乗舟、過

ル十六日 御着舟、 御濱御庭江御上り、直様為被遊

御帰城由候、

一 閣老小笠原侯於浪花御役御免、京都所司代牧野侯願之

通御役免被成、淀候江右代為被仰付由、酒井雅楽頭様

加判之列上座被仰付候、太田侯之儀は先達て依願御役

御免被成候由、条々御沙汰ニ相見得申候、

但

小笠原侯大坂御城代江御預ケと申説も御座候、然
共突留難申上候、

一土山（滋賀県）岡崎（愛知県）之義、於其御許風評有之、御不審之段

致承知、爰許ニては初て承申候、何等之風評共訊不相
分候得共、此地ニては一向不承不申候付、岩下等江も
承申候得共、皆共更承候儀無之段申出候、尤其許より
被遣候飛脚ニも為承候処、両駅共何も相替儀無之旨申
出候、其外道中筋何も相変儀無御座旨申出候、乍併承
り候儀も候ハ、早々申上候様可致候、

一長州江異船到来、大砲之打合両三度御座候由、爰許ニ
てはとりく之風説御座候所、小倉村上方より永井清
左衛門江差遣候書状同所御留主居より岩下江差遣、此
書状にて実事明白相分り申候、其御地江は彼地江出は
り、横目等より細事為申上苦候得共、右状取束表通相
廻し申候、長州ニも勝利之姿ニ無之、大損と相見得申
候、日本之手初見苦敷事ニ候、就ては則南部横港ニも
さし出候所、聞合之趣一々難信用致儀も御座候得共、
御国江廻舟之目論見も相見得安心難成、書附取束表通
差遣申候間、御披見被下度候、

一白鳳丸より先度之急飛脚も大坂迄参り候由、是ハ今度
御取入之蒸気船ニて有之候哉、何等之義も爰許江は不
相分候得共、多分御取入舟ニて可有之とハ存候得共、
御尋申上候、

一中川宮様江被進候御太刀拵方不致、急場誠以無申訳候、
先便ニも申上候通、来月中是非出来上り候様催促可致
候、石黒江細工申付候処、ケ様之細工ハ当人一世之内
最早無之逆、諸人頼之細工ハ総て御断、至極念入彫り
候由ニて、心ニ不叶候得は、直ニ仕直し、別て念入候
趣ニ御座候、最早六ヶ敷細工之処ハ相濟候付、是より
ハ埒明可申と存申候、本之御白鞘とふも御拵ニ差支候
所有之、別段ニ繰込相替へ申候、鞘成も近日見届申筈
御座候、御柄糸并御鞘卷糸、同じく下地錦等之義、今
便京都江申遣置申候、自出来上り候て御太刀姿写取差
上可申候間、左様御納得可被給候、以御都合
御聴ニ被入置被下度御座候、
一姉小路凶事之件々岩下へ吉井より申越、御国許江は本
田等駆下り候由、就ては御用懸り之ものも有之、田中
ハ切腹と相聞得申候、御用掛り之者御取扱之模様ハ不
相分候得共、帯刀如何舌娘（女）候致と致推計候、細事不相

分候付、岩下より委く申越候様相達、彼表江飛脚差立
申候へ共、未相分り不申候、

一大樹公 還御、翌日諸大名拾三方江参府之期ニは不至
候得共、御相談之儀有之、早々出府候様被

仰出候、御名前表通申越候間致筆略候、此御方様不被
為在候付、先御安心と乍憚奉存候、

右之趣貴答旁乍毎以乱筆申上候際、よろしく御推覧
奉希候、以上、

六月十九日

喜入攝津

小松帯刀様

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

五二〔喜入久高ヨリ小松帯刀へ書翰〕

土山駅之条

一橋公御帰府之節、土山駅にて明ヶ方大目附岡部信濃(マ)
守ヲ切害致積ニて四五人乱入候処、岡部は直ニ逃去り
候処、用人佐野草平と申者逃去候ヲ、後より背より尻
へ懸八寸程切込、深サ五分程ニて、療治いたし此節平
癒、岡部は夫より忍びニて、

一橋公より三四日前帰着仕候、右は如何之意趣候哉未
相分不申、旗本二男朝倉幸之助と申ものニて、先達て

京都にて召捕ニ相成、当月十四五日比当府江参り候よ
し、外ニ同類四五人御座候よしニ候、岡崎駅之儀は承
り不申、併

大樹公浪花より俄ニ蒸気船より 御帰府相成候儀、何
欽東海道中筋御差障之場所所有之筋共ニて有之間敷と、
推計仕候、

一右岡部之一条は、先達南部間合ニ相見得申候得共、何
方と申事も不相分、勿論突留たる儀ニても無之候処、
前条之趣ニては、形も無事ニては無之と相見得申候、
大樹公御帰府ニ付、御差障之場所相分候ハ、早速申
越候様可致候、別紙且此表之件々昨日鳥渡承出候付、
此飛脚昨日差立申筈御座候得共留置、右之件尚又聞乱、
今日飛脚差立申候、別封之通

二丸君 御上京之御決定ニ共相成候都合候て、承知
仕度些相心得度儀も御座候、

御上京之御召と申事ハ正説等敷相聞得申候、此等之趣
承得候俣書綴り申越候、已上、

六月廿日

喜入攝津

小松帯刀殿

二白、英国舟御国許へ参り可申との風舌も候へ共、

猶亦手を付候所、薩国江は可參様実ニ無之と申事も御座候、

御下

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

一長州江差越候異舟江、横濱より水先乗込居候所、右之者申候ハ、長州にて惣髪之もの、小舟より参り、舟将へ何軟洋語を以致談判候所、砲器を治、昨日・一昨日之間横港江致着、右之趣申出候由御座候、荒まし之事候間、相分り次第可申越候、已上、

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

五三 〔近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰〕

先達て良節下国之砌、御所望申入候短刀、其後早速ニ被下、深々忝奉存候、不打置一覽仕候処、余程古刀ニて、寸法も好ム所ニて、別て々々喜悦之事ニて候、其上拵料迄付被下、別て々々喜悦千万ニ存候、最早拵等好候テ申付置候事ニ候、厚々御礼申入度候、其砌ハ、外ニ何寄之御品も被下深々存候、扱此燈籠甚薄乍如何、暑氣の時分御慰ニもと入覧候、先は右而已如斯候也、

六月廿二日認

嶋津三郎殿

忠房

五四 〔村山齊助井上長秋ヨリ中山實善大久保利通へ書翰〕

左大将様より

御書被遣候付、江夏壯七郎外卷人急飛ニて被差下候、尤

御書之趣は、格別火急之御用とも不奉窺候得共、本田彌右衛門罷下り候後一円御左右不相分、将又当地之形勢も不申上候故、荒増左ニ申上候、

一昨廿四日

朝命を以伊丹藏人・山田勤解由両人之宅江親兵五六十

人程被差向召捕候て、其俣本能寺江連行候由、右は同日三條中納言殿

陽明家江御出ニて、

左大将様江国事之御議論有之、其序姉小路少将殿闖殺

之一件ハ薩藩之仕業とも難究、

中川宮之奸計より起り候事と被存候との趣、御話有之候由ニ御座候、左候得は右両人之者共御不審蒙り候儀ハ、此一条ニ相違有之間敷と奉存候、

一 米藩牧和泉守又々致上京候て、色々〔真木侯臣〕

御国之為致周旋候由、関白家并議奏方江も被致信用至て繁務之由ニ御座候、

一大樹公去ル十六日

御帰府相成候由、飛脚やより申出候、

一 御地飛脚於今着不致、当時柄嫌疑を受候最中故、肥後・

長州辺何様之儀可致哉も難計、甚懸念ニ奉存候、飛脚立被召延候儀とハ奉存候得共、為念此段も申上候、

一 御親兵追々上京相成候処、相國寺塔頭不残御用借ニ相成、寺中江被召置候処、鹿苑院之儀ハ二本松御屋敷江

致接近居候故、他藩之人数入込候てハ屋敷内見込もいたし、且又万一争論等引出し候も難計、寺僧へ致相談

林光院と繰替ニいたし申候、右ニ付

御位牌等も

御引直しニ相成、林光院へハ南部美濃守様御人数入込〔利剛、盛岡藩主〕

候由ニ御座候、

右事情見聞之次第取束申上候、以上、

六月廿五日

井上彌八郎

村山齊助

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

五五〔吉井友實ヨリ中山實善大久保利通へ〕

書翰〕

炎暑難堪候得共御清栄可被成御座奉賀候、随て小夫無異滞京仕居候、乍憚御放念可被成下候、楮三條之暴勢弥熾然、昨朝伊丹・山田之兩人召捕相成、子細能相分不申ニ付、今日櫻木御殿江参謁奉窺候処、姉小路一条宮之奸計ニ出、兩人之所業と左大将江昨夕三條為申由、薩は未だ疑ハ寸切不晴候得共、先薩にてハ無之様ニ候段被申之由、就てハ

宮之御身体も御危ク、とふそしてと折角幸五郎申談候事ニ御座候、

宮も此比御不参勝にて、

御上より御書通度々被為在候ても始終

勅答も無之、宮中も大ニ疑念を生し、讒口モ夫ニ付入候半、

陽明家より再々御参之義、御異見も被為在候由御座候得共、一円御聞入無之、右様之次第故姉小路一条を名にし、兩人を除きたる状も難計、何分御混雜之御事ニ御

座候、誰様欵御乗舟ニテ蒸氣舟御差廻相成候ハ、御都合罷成候半、何分御評議之上御窺可被成下候、海上之儀長州江は段々手向いたし候得共、外通舟ニハ未相陣候模様も無御座候間、御懸念之廉も有之ましく候、一將軍去ル十六日巳之刻江戸着、暫濱御殿江休息、七ツ時分入城相成候由、

一尾州も引取申候、會津も引取模様御座候、却て仕合ニ被存候様子ニ御座候、

右其後相替候情態如此御座候間、早々申上候、以上、

六月廿五日

吉井中助(友惠)

中山中左衛門様

大久保一藏様

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

五六〔襄田傳兵衛ヨリ新納久脩御軍賦役衆へ

書翰〕

去ル十日比又々下ノ關江異船入船ノ由、爰元ニテ風聞承候付、折柄阿久根ノ中村武吉ト申者出崎イタシ居候付、右武吉事、是迄御隱密ノ御用向モ被仰付、他国等ノ儀モ能々取馴居憶成者ニ御座候間、御心得ニモ可相成儀モ可有之ト奉存、聞合方トシテ下ノ關辺マテ差出

為承申候処、差テ相替儀モ無之、追々委細ノ儀ハ御聞届ノ筈ト奉存候得共、別紙ノ通差出申候間、相添此段申上越候、以上、

長崎在勤

亥六月廿九日

(長胤)
襄田傳兵衛

新納次郎四郎殿

御軍賦役衆

五七〔下關砲撃ニツキ中村武吉報告〕

下ノ關聞合方ノ成行左ニ奉申上候、

一当五月十日江參り候異国商人船アメリカ通船江、長州ヨリ大砲打掛候由、同廿三日一艘來り双方ヨリ大砲打掛候由、同廿六日軍船ト相見ヘ壹艘來り大砲取合有之、長州幸真丸ト申候船ノカキダツ廻り、大砲ニテ損シ候ヨシ、此日下ノ關町中大砲ノ玉飛來り、町家并藏杯損シ候ヨシ、下ノ關ニテ船ヨリ打出シ候大砲玉十七ホト見出シ候ヨシ、其日船ヨリ打出シ候大砲四十八ナチ計ノ由承申候、

一六月朔日萩着、殿様下ノ關白石方ヨリ蒸氣船ニテ三田尻ニ御越シノ筈ニテ御乗出シ相成、幸真丸ト申候船モ

(山口縣)

乗出シ居候処、右ノ中江フランス乗込来リ候体ハ引立有之候由、右乗込来候体ハ、蒸氣船江紫ノ幕打廻シニテ、殿様船ト見掛候体相見ヘ候ヨシ、右式ノ事ニテ萩ヨリ大砲打掛候由候ヘトモ、フランス船打通シ候事不相叶、彼ノ方ヨリ相図ノ物吹ナラシ候処、一度ニ炮門開キテ大砲ツルベ掛打出シ、幸真丸江玉七ツ打ヌキ、直ニ海中江其俣シツミ候ヨシ、右船ニハ大砲モ十五丁計リ、金子モ御用金十万両程御乗セ□付ノ俣シツミ候由、右ヲ見テ蒸氣船竹崎ノ様逃帰ルノ処、ウロタヘ候ヤ、洲ニ乗掛ケシツテンバツトファイタシ候内、フランス船追掛来リ、蒸氣船ノ鱸ヨリ大砲打込候処、火房打崩シ表江打通シ、右船モシツミ候由、若殿様ニハ橋船ヨリ御ハツシノ由、兼テ萩士噲ニ異船来候折ハ、蒸氣船幸真丸等有之候間、右ヨリ出張致候ヘハ氣遣ハ無之考ノ由、右咄シハ其兩日前迄モ為在之事ノ由、然処右通二艘トモニ被打込、乗組死人二艘ニテハ七八十人マタモ可有之、併シ萩モ右ハ秘事一切不申候由、脇々ノ評判ハ幸真丸乗組ハ都テ死シ候由ニ申候由、フランス船ニハ勝時ヲ掲ケ、旗ヲ立出帆ノ由、萩ハ見クルシカリシト承申候、

一 同五日田ノ浦沖ニ掛リ居大砲双方ヨリ打出シ候ヨシ、然処前田ト申処江台場有之、右ノ処江バツテラヨリ六艘ニ九百人計リ乗組、大砲一挺乗セ付、跡ハ劍筒ニテ上陸ノ由、萩士逃ケ去リ家老悴并家来兩人踏留リ、折角大砲打出シノ賦候処、バツテラヨリネラヒ打ニイタシ候ヤ、ミケンヲ打ヌカレテ其俣死ス、家来逃去ル、フランス上リ来リ前田台場打崩シ、大砲ウバイ取、鉄筒ニハ火口江針ヲ打込、前田三十軒計リ焼立、萩士是ヲ見テ上陸人ニ向ヒ鎗ヲ持テハセ行候処、船ヨリ大砲ヲ萩士ノ中江打込、上陸人江モ近寄り候事不叶、大敗軍言語ニ演ラレスト承申候、頭大砲萩士打出シ候得共、逃ケ去リ候折ハ百姓・町人玉ヲコメ打出シ候由、此日萩士ヲ初多ク死人為有之由、異船朔日ヨリ五日打出シ候大砲玉ハ皆焼玉ノ由、長州館屋モ焼立、番人逃去リ鎗其外奪ヒ取候由、此日取合能クく承リ申候ヘハ、萩士ヒツキヨウ不用立欵、次第ハ上陸ノ者共真中江一度ニカケ込、タトヘ船ヨリ大砲打出シ候トテモ皆一流打死モ有之間敷、残り人数ニテカケ合候ハ、可然処左モ無之、言語ニノヘラレスト承申候、

一同十二日下ノ關前江異船二艘来リ、右ヲ萩ヨリ大砲ニ

テ打取可申、皆一流考ノ処右ハ無之、右ノ船江使者有之候ヨシ、船出帆ノヨシ何様申入候ヤ、使者ノ口上ハ相分リ不申候ヘトモ、關ノ前通船無之様仕呉レ候杯申候事ニテハ無之哉、初メノ勢イニ引カヘ候事ノヨシ、萩モ最早少シサヒケノ心ナラント承申候、其後当廿三日マテノ間ハ異船相見ヘ不申候、廿三日彼ノ地江出立仕罷婦リ申候ニ付、其跡ノ処ハ存シ不申候、

一當時出張人数穴戸何某、長州前田江台場固メ方ニシテ滞在台場築方最中、町家杯ヨリモ加勢ニテ築方ノ由、下ノ關海辺モ台場築方有之、下ノ關仲ノ方ヒク嶋ト申候^(彦) 処江モ台場出来、右台場ニハ百廿砲・八十砲其外三丁備工有之候由、竹崎ノ方ニハ毛利能登ト申候家老出張、惣勢三千人計リト申事ニテ候、士イ方ハ千人位ノ者ニテハ無之哉、跡ハ又者ニテ町人・百姓モ有之候由、異船来ラハ打ベシトノ由承申候、

一 小倉ニテ承申候ヘハ、萩ヨリ使者数度参リ、異船来候折、小倉ヨリナセ打方不相成候ヤ、小倉ヨリ打方不相成候ハ、田ノ浦台場カシ呉候様、右モ不相成被申候処色々々々難題申掛ケ候由、小倉ヨリ答エニハ、將軍家ヨリ打払ト申候御意有之候ハ、打払可申候ヘトモ、御

差図無之テハ不仕被申候ヨシ、然ル処萩士ヨリ將軍カ重イカ、天子カ重イカ、打払ヒ無之候ハ、

天子ヘ弓ヲ引心カ杯申候テ込リノヨシ、右ニ付小倉ヨリ將軍家江右ヲ御伺トシテ家老態々登リノヨシ、イマタ下リハ無之候ヘトモ、早飛脚到来ニテ、其左右承申候処、將軍家ヨリ小倉江御内沙汰、異船江手ヲ出シ候儀無用、萩ハ何様ノ訳ニテ打払有之候ヤ、

勅命ト申候由候得共、表向ニテハ有之間敷、御内勅ナラン、萩ニモ打払ヒ無之様、將軍家ヨリ引合有之可申候間、小倉ノ儀ハ手ヲ出シ不申候様、被仰聞候旨申来候段、小倉ニテ承申候、小倉家老ハイマタ婦リ無之由、

一 当十五日、萩ノ使者宮城彦助ト申使番、外ニ一人小倉客屋江御使者ノ由ニテ、小倉モ丁寧ニモテナシ、口上異國船参リ候ハ、田ノ浦ヨリ打払ヒ被成候欵、又ハ台場カシ呉被成候欵、吟味返答延引ナリトテ、床ニ筋リ付相成居候三宝長ノシ方切り落シ、襖ニ落書有之、和歌ニテ上ノ句計リ覚候由承申候、右和歌ハ、かゝる時生れ合せておふ君のトヤラ申候和歌ノ由、其上立掛ケ口上ニ、今一度異船参リ候ハ、田ノ浦台場江萩士

三百人計り来り、打出シ可申候間、左様心得候様申捨
テ罷帰候由、傍若無人ノ仕形申形ノ段、小倉ニテ承申
候、

一 当月廿日ニハ長州ヨリ筒打イタシ申候間、内理ノ人都
テノケ置被下候様申来り、内理ノ人ハ都テハツシ居候
処、内理ニ向ケ大砲来り、久留米御船屋ノ先家四五軒
打崩シ候ヨシ、小倉ニテ萩ハフランスニマケ、腹ニテ
カ、ル事杯ライタシ、先ツモフサハ、長州ハ只今ノ処
ニテハ狂人ト相見江為申杯申事ニ承申候、

一 萩士肥前ニモ来候テ口上ニハ、肥前士何ノ何某異船軍
サ初リ候ハ、佐賀用意ノ大砲等持参イタシ可申承知
候ニ付、承リ候旨為申由、佐賀返答、右ノ士ハ当時浪
人イタシ罷居不申、右等ノ事承候事モ無之、併シ萩家
老用人衆間ヨリ出府ニテモ、当来ノ節ハ吟味ニテモ為
見可申候得共、只今ノ処ニテハ吟味マテモ無之答ニ被
成候由、

一 久留米ニハ中山様御越シ、萩士モマイリ候ヨシ、神主
實ヒ請京都ノ様相列御登リノ由、其外十三四人筑後ヨ
リ萩江罷居候ヨシ、右ハ下ノ關滞在ノヨシ承申候、
一 筑前ニモ使者参リ候ヨシ、筑前答ニハ異船我領内ニ来

リ、傍若無人ノ事有之候ハ、打払可申候得共、通船ハ
一切カマヒ無之被申切候ヨシ承申候、

一 下ノ關ニテハ、薩州ヨリ千騎加勢參ル様取沙汰イタシ
申候、小倉杯ニテモ右ノ通申事ニテ候間、私ハ商人ニ
テ、左様ナル事存シ候者ニテハ無之為申事ニ御座候、
長州ノ考ニハ、薩州加勢有之候ハ、其余モ加勢有之
候ヘトモ、薩州ヲ見合セ居申候様申事御座座候、下ノ
關ニテハ薩州ヨリ加勢、ケフカ明日カト為申由承申候、
長州士イ當時ノ処モ鉢巻ニ袖留ヲ着シ、鎗ヲ取り今モ
敵寄セ来ル様ニ相見ヘ申候、只今通ニテハ相済申マシ
ク、是非取合此後モ可有之、併シ萩モヨワリ候ニ付、
如何有之ヘキヤモ申人モ有之候ヘトモ、何ト取合ニハ
相違有御座間敷奉存候、

右ノ通実不実分り不申候ヘトモ、承合申候通奉申
上候、以上、

中村武吉

六月廿七日

五八 〔近衛忠房忠熙ヨリ島津久光ヘ書翰〕

尚以會津肥後守ニモ辞職退国ニモ可相成模様在之、
(松平容保)

甚心配之事二候、以上、

大暑之砌御勇健候哉尚承度候、抑世上形勢日々二切迫、

朝議グレ付候御事、実以乍傍銀行末如何可相成痛歎無限候、其許篤ト事情御見留之上、早々御奮発偏ニ在度祈入候、長州ニハ攘夷ヲ開キ候とて、格別ニ御依頼之勅命被出、殊ニ暴論之内正親町少将監察使トカ申名目ニテ下向ニ相成、実以一切分明不成、朝議何共後患ヲ恐レ候次第ニて候、右監察使一件ニ付てモ三條中納言一鼻立言上、專ニ周旋之次第ニて、左府以下 勅問之御人数之面々ハ御沙汰無之被 仰出、速ニ御使之人体御請申上候由ニて候、実以監察使トカ申事杯、甚以不容易儀甚々愚考ニ不能、彼是申立度候ヘ共、最早御使出立後之事、何分前以承知不仕義故兎角之致方も無之、実ニ歎入候計ニて候、扱尾張前亜相義段々帰国之儀被願候様子ゆヘ、兩人より書中并成瀬隼人正始家来ヲ招寄、段々差留メ候得共、更ニ採用無之押て帰国被願、速ニ被^{〔公鑑〕}聞召候儀何共致方色々之苦心之次第ニ候、然ル処二條右府公・徳大寺内府公杯專差留メ度了簡之趣ニ付、右府始建白致、是非々々帰国被差止候様段々

申上候ヘ共、議奏辺ニテ更ニ登用不被致、仍何共即今致方無之、尾前亜相ヘ右府始面々より以書中差留メ候得共、一向不被応、既ニ昨朝出立帰国ニ被及候事ニて候、最早兎角之致方無之故、此上ハ其許御上京ト申場合ニ至り、前亜相ニも早々上京在之度ト段々申入置候事ニて候、朝議之処実ニ甚御案事申上候次第ニ候、何分時々刻々ニ事変シ、是ト定メ候事一事も無之、実々悲歎之仕合ニ候、呉々尾州之処甚強情ニて、更ニ愚拙共より申入候辺ハ採用無之、最早帰国ニ相成候間、早々右之儀申入置度候、尾前亜相ヘも極密之御内 勅被出置候事ニ候、右モ申候旁形勢ニ從フテ上京可在之旨申置、出立被致候事ニ候、仍御心得之為早々申入置度、荒々要用而已如斯候也、

六月下旬認

内密々

忠照

嶋津三郎殿

忠房

御下

〔嶋津忠房氏所蔵本にて校訂〕

五九 〔近衛忠照ヨリ嶋津久光ヘ書翰〕

文久三年

良節江御伝言御書中之趣逐一承候、追々暑氣ニ相成候

処、弥御揃御安全之御事珍重ニ存候、当方モ先々無異ニ候条御安意可給候、委細ニ御書取之御趣意共実々御尤ニ承候、尤モ御同意之事ニ候、中川宮江モ伝覽致候事ニ候、当節之次第実以驚歎之事ニ候、委細良節ヨリ御聞取之様存候、当地事条モ御聞取之内変リ候故、諸事困入候事ニ候、御推察可給候、扱貞姫方御上京之儀甚心急申入候処、春中ヨリ御所勞未御快方無之、向暑之節辻モ長途之御旅行難被成、無拠当秋迄御延引之事、何モ御尤ニ承候、松方助左衛門江モ御伝言委細ニ承候、梅天後ハ段々大暑ニ相成候、此頃モ甚々暑氣強候、旁御所勞ニテハ甚以御案申入候、二三ヶ月ハ早く立候事故、涼氣ニモ相成候ハ、何卒少シモ早く御着シ候様御待々申入候、忠熙ニハ甚々心セキト御察可給候、シカシ御所勞推テ御道中モ御案シ〜申入候事ニ候、何モ荒々申残候、良節・助左衛門ヨリモ聞取可給候也、暑氣專御自愛ト存候、修理大夫殿へモ宜々御伝聞可給候也、

此龜菓甚以輕微ニ候得共、兩君江進上候也、

島津三郎殿

忠熙

御下

六〇〔五代友厚藩庁宛報告書〕

唐国上海英陸軍之士官レネー^名、此内より横濱英ミニストル所江参居候処、此節罷帰答ニテ、当月十六日横濱蒸氣船より致出船、同廿二日長崎江廻船いたし候、然処右レネー儀、英商カラバ別テ^{Board}懇意之者ニテ、私旅宿江同誘いたし、極内々相洩候趣其俟左ニ申上候、一右レネー儀は横濱ミニストル所江同居いたし候ニ付、今般英国之軍艦廻着以来之始未能々承知罷在、於生麥英人被致殺害候者之妻子養育料、英銀貳万五千封度洋銀ニして凡拾貳万五千枚、此節四拾四万枚之價金被相渡候節、右拾貳万五千枚も幕府より一同可被相渡旨、ミニストル中江被相達候処、拾貳万五千枚之儀は薩州より可相請取旨、英国政府より承知いたし参候ニ付、何れ薩摩より乞受ニテ可有之返答いたし候由御座候、尤レネー横濱出帆之砌は、薩州江参ル用意有之、^{道先}三人雇入之筈候処、最早式人は相起居候由、併其時分長州之事件幕府より取始末出来候哉、若無御構と之儀^{マツ}ニも御座候ハ、合国之軍艦を以所置いたし度申立之趣有之候付、幕府より其返答無之内は、鹿兒嶋江は参

り申間敷候得共、相濟次第ニは直ニ参ニテ可有之相咄申候、

一薩州江軍艦参り候儀は、全戦争ヲ相好候訳ニ無之、於生麥被致殺害候相手被差出度、并其者之妻子養育料乞請度、式ヶ条談判之為参候儀ニ有之候、併相手之儀は生麥より直ニ欠落いたし、今ニ行衛不相知、折角吟味中ニ有之候段御答相成候ハ、夫ニテ可相濟候得共、拾貳万五千枚之妻子養育料之儀は、是非乞受不申は相濟申間敷候、軍艦之員数はアトミラール参候ハ、数多之軍艦ヲ引列れ参り可申、併万々一長州之事件不相濟内参り候儀も有之候ハ、軍艦三四艘ニテアトミラール之書翰ヲ差出可申歟、レネー之考ニテは長州之事件為相濟候上、アトミラール参ニテ可有之相考へ候段承申候、尤横濱より直ニ鹿兒嶋江参可申哉相尋申候処、依時機は直ニ参り候儀も可有之候得共、大概は長崎江一往立寄、夫より鹿兒嶋江参り候様相考候由御座候、勿論参候ても戦争不相好事故、乱妨ヶ間敷儀は決して仕不申、乍然鹿兒嶋之砲台等より砲発相成候ハ、無抛兵端相開ニテ可有之相咄申候、左候て此等之趣相洩候段、英国政府江相聞得候ては、屹と致迷惑事候ニ付、

極々内密ニいたし可吳段細々申置、則日蒸氣船より出帆之筈ニテ、既ニ刻限差掛罷帰申候、

右之通承得申候ニ付、尚亦御奉行方承合申候処、此節鹿兒嶋江軍艦参候掛合は、未江戸表より無之候得共、何れも跡越ニ相成候故其段も難計、生麥一条之儀は先度洋銀四拾四万枚公辺より被相渡候時分、江戸此御方御屋敷江、生麥一条之儀は如何可致哉之旨被 相達候処、御屋敷より薩州江参り候ハ、何時も拾貳万五千枚可相渡用意最早相整居候段、御返答相成候趣掛合参居候由、先日も奉行英軍艦江被参候節、薩州之生麥一条は、如何相成候哉之趣英船將江尋問相成候処、薩州は参次第銀錢何時も可相渡事之由御座候間、此方ニテ都合宜時分請取ニ参ニテ可有之返答いたし候段、奉行被相咄候由御座候、依之此節は愈無相違参り可申事ニ奉存事情、旁書面ニテは難相弁、御付人申談急々罷帰申候ニ付、尚委細之儀は口上を以可申上奉存承候俟、此段申上候、以上、

亥六月

友厚
五代才助

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

六一 (近衛忠房外三名ヨリ島津久光へ書翰)

再陳時令厚々

御自愛專要ニ存候、吳々も本文之次第不悪々々御賢
察可給存候也、

以飛札申入候、甚暑之節ニ候処、先以御多祥欣幸令万
壽候、抑方今京師形勢次第ニ切迫、実ニ不容易事情定
て巨細ニ御伝承トハ存候得共、微力之銘々痛歎無限、
御遠察可成給候、就ては貴殿昨年出格之御精忠ニて、
被開正路候手續も有之、何卒今一応御登京ニて、真実
公武御一和・天下泰平弥以被安

宸襟候様、成功之程貴殿江御頼申入候外無他事時勢、
実ニく痛心之次第御内談申入候事ニ候、吳々御賢察
可給候、扱姉小路一件ニ付其藩中滞在之者、不存寄汚
名ヲ蒙候由、扱々絶言語候事共ニ候、何卒速ニ邪正分
明ニ相成候様致度候、此候ニては滞京之者計之汚名の
みならず、薩州一藩之迷惑誠ニ難堪次第柄ニ候間、何
国迄も無用捨探索有之、屹度被申解、早々汚名も相清
メ不申候ハテハ不相濟候事ト存候、旁其廉ニても上京
可有之次第軟ト存候、吳々も其辺御熟考有度存候、返
々申迄も無事ながら、為国家此上御尽力之程御頼申入
度候、右様内論計増長致候ては却て攘夷之差障ト存候、

全夷賊之術計ニ陥カト昼夜心痛難尽筆端候、右様之儀
卒尔ニ申入候者之甚如何敷候得共、暫時も不堪苦心急
ニ御内談、且は御登京之儀御頼申入度如斯候也、

六月

(三条)

齊敬

(朝珍親王)

尊融

(近衛)

忠熙

(近衛)

忠房

嶋津三郎殿

内密

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

六二〔近衛忠房忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

大暑ノ節ニ候得共、弥御平安候哉尚承度候、抑今度姉
小路一件ニ付テハ実ニ不容易次第、於当家ハ格別ノ御
間柄、別テく痛心ノ仕合、何分ニモ朝命嚴敷事ニテ、
実ニ心配不過之候、全体不分明ノ儀如此被蒙 嚴命候
段、何共甚々心外至極歎息仕候、朝廷ノ御制度輕易ノ
御所置而已ニテ、悲歎無涯存候事ニ候、何分ニモ無実汚
命ヲ受候義、其者ハ先差置、薩国一体ニ相拘リ、何共
心外千万悲歎不過之候、何分ニモ此場ニテハ、早々其許

御上京ニテ此恥辱ヲ被洒候ハネハ、為 皇国尽力ノ差障リニモ相成深々歎痛ノ仕合、実ニ形勢モ日々ニ切迫、大樹公ニモ御發途ニ相成候事、此末ノ見留メモ日々ニ相失ヒ、唯々痛心而已ノ事ニ候、何分ニモ攘夷ハ差置、国内ヲ專ニ相整候儀勸要ト存候、朝廷ニモ只今ノ通グサノト致候事ニテハ、重大急務ノ御時節、如何ニモ内乱ヲ相招候事ニテ、実ニ痛心ノ次第ニ候、何分當節上ニ威無、下ニ威盛ナル事実ニ歎入候事、何分ニモ早々御上京ニテ御奮發在度存候、今度極密々彌右衛門ヲ以御伝申入候御内

勅ノ

宸翰、実以難有御趣意ニテ感佩仕候事ニ候、御同慶被成候事ト存候、乍去右御内

勅ノ儀ハ仮令浪華・京師へ御入駕ノ上進モ、決テ速ニ御口外無之様、実ニ御内

勅ノ儀ハ容易ニハ御口外無之様偏ニ祈存候、於

朝廷暴烈ノ人々ノ耳へ早ク聞工候テハ、尚又色々ト計略ヲ相巡シ候事必然ト被察候間、決テ御心得置祈存候事、

六月

二白

志々目賢吉下国仕候間委曲申聞置候、巨細御聞取

可給候、大乱書ノ御覽分可給候、以上、

極内密投火 忠熙

島津三郎殿

忠房

御下

六三〔近衛忠熙書翰〕

八幡男山參詣ノ義ニ付、巨細閑白ヨリ聞取ト存候、各申条不容易義甚心配候、尤社参文ノ義ハ精々同心催ニ相成候訳ニ存候ヘトモ、親征ノ一義甚心配、此義臨此場逃避候ニハ無之候得共、マサカト申候得ハ尤

可為出行候、未攝海江来舟モ無之処、卒尔ニ親征出行ト申モ却テ狼吹ノ姿、又夷船ヲ招寄候義東久世・姉小路等申入ニ候得共、是ハ從來ノ趣意ニハ齟齬イタス処深不承知ニ候、然トテ不申出時ハ何モノ誠以重大ノ上ノ心配不斜候、右ニ付昨夜モ段々談候事ニ候、書取ニテハ十分ノ一モ難認候ニ付推察頼入候、此場合ニ相成候義ハ其方同様ノ事ニ候、何卒右辺、三郎江説得ニテ、依頼候件々委細申聞、何分當時堂上ノ暴激ヲ

急度取押へノ手段無之候テハ、予闕白以下失権只々非職、堂上ノ下役如何計悲歎候付、右辺ヲ予深々心痛候処申聞候ハ、武門ノ和フ候半ト存候、何卒深手段逆勢相改リ、予以下權威相立名分正明ニ相成候様致度候、巨細申度候へトモ、闕白ヨリ聞取頼入候、三郎任官ノ義モ闕白へ申候へトモ、薩ノ義ハトフカ闕白モ申出シ兼候様子ニテ困入候、元來心替リノ訳ニハ無之候得トモ、又三郎申条一ツモ採用ニ不成、予其方等所存ノ貫徹ノ模様ハナシ、予不好件々沢山ニ候得共無致方苦心ノミニ候、呉々モ三郎ノ手段頼度候、八幡ノ義ハ參詣ハ致度存候也、

六四 〔近衛忠房忠熙連署建白写〕

建白ノ写

島津三郎儀兼々蒙厚

勅命、当春上京有之候処、於自国海岸武備之急務指加リ候趣ニテ、俄ニ帰国有之候後今以再忝上京無之、方今時勢段々不容易切迫之折柄ニ候得ハ、自国武備之義ハ修理大夫江相任置、三郎儀ハ速ニ上京候テ、輩下誠忠之諸藩申合、可奉安

宸襟之旨御沙汰被為在候様奉願度存候、但近頃薩藩御不審之事状モ有之候処、前条願儀ハ深恐入存候得共、方今切迫ノ時勢ニ候へハ、何分三郎儀ハ急速上京、於輩下励勤有之候様御沙汰ノ程伏テ奉願度、呉々恐入存候得共、前件之儀偏ニ願存候事、

七月

忠熙

忠房

本文ニハ当春上京之続ヲ以三郎ト認置候得共、修理大夫・三郎兩人ノ内被召寄候様奉願候事、三郎被召候ハ、尚更ト奉存候、以上、

六五 〔近衛忠房忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

尚以本文之次第呉々分て申入候間、屹度御承知可在之存候事、

残暑難凌候、弥以御勇健候哉、尚承度存候、然ハ時勢追々切迫不容易次第第二候間、最早此場ニテハ屹度々々其許御上京ナラデハ不相濟ト決心仕、別紙之通建白仕候、何レ再三再四あく迄申立候心組ニ候、呉々押返し申立候覚悟ニ候、弥被 召候上ハ何卒々々自国防禦之辺ハ修理大夫江御委任ニテ、急速々々御上京ニ相成候

様、吳々此場ニ至り候てハ、屹度御登京在之候様深々
希入存候、何分御上京ナクテハ、於当家モ俗ニ申心細
ク存候、実ニ昨年来格別々々勤王之御事、何レニ致せ
早々今度ハ御登京之様、偏ニ存候事、

七月九日

忠照
忠房

嶋津三郎とのへ

三白

自然修理大夫殿被 召候節ハ、御申合せにて御上京
之様存候、可相成ハ其許御上京尚更ト存候事、

(嶋津忠承氏所藏本にて校訂)

六六 (近衛忠房外二名ヨリ嶋津久光へ書翰)

緘

齊敬

忠照

嶋津三郎殿

忠房

内密々

(朱)

「亥七月十一日」

残暑之砌愈御多祥令万寿候、尚又承度候、抑今般其許

上京之儀、表向被

仰出候ニ付ては、早々御登京にて何卒御尽力御頼申入
候、尤連署之銘々より建白候処、

朝議符合ニ相成、表向被為召候次第二候、何卒々々此
機会不失早々御上京之義、分て々御頼申入候、且表
向之御書取ニは、御親征御用ト有之候得共、決て御治
定之訳ニ無之、尚其刃御上京之上巨細ニ御話可申入存
候、尤連署之銘々も不承知之事ニ候、其上内実は

上ニも親征御好不被為在候御時宜伺居候間、何分其許
急々御上京ニテ御判断、分て御頼申入度候、何も委細
之次第ハ御家来江申含差下候間、篤と御聞取可給
候、実ニ格別之

思食にて被召候儀ニ付、不失此期是非々々早速々々御
登京ニ相成候様存候、尚又厚御依頼被遊度儀も伺候、
旁早々御上京之儀呉々御頼申入候、扱如何敷事ながら、
御不審一件ハ追々消散之事打明申入候、何分早々御上
京候様ト存候、真実

思召之処ハ一刻モ不遲滞様御待被遊候事伺候間、弥以
急速ニ御上京之様偏ニ御頼申入候事、

七月十一日

忠房

忠照

嶋津三郎殿

(島津忠家氏所蔵本にて校訂)

齊敬

川上但馬殿

川上式部殿

(島津忠家氏所蔵本にて校訂)

六七 〔岩下方平ヨリ島津久徴外家老四名へ〕

書翰〕

先月廿二日、御国許之様乗廻候英国船七艘之内横濱江
帰来、去ル朔日前之濱江着船ニて一旦談判有之、其後砲
發、英船及損傷船將等則死、手負人も不少候と取沙汰
有之、実否不相分候付、則南部彌八郎横濱江為聞召差
遣候処、今昼時分罷歸り別紙之通申出、英船七艘之内
未致皆着候付ては、実事も不相分由付、猶細事手を付
追々申上越候様可仕候得共、一先別紙相添三道中三日
半ツ、仕立、町飛脚差立此段御内用を以申上越候条、
太守様

三郎様

貴聞可被成御達候、以上、

亥七月十一日

岩下佐次右衛門

嶋津大蔵殿

喜入攝津殿

小松帯刀殿

六八 〔木村宗三ヨリ南部彌八郎へ書翰〕

今朝五半時頃薩州より英軍艦不残当港江帰帆、早速尋
問として運上所士官右船々江罷越、一先戦争之次第承
り候処、

日本六月廿九日鹿兒嶋着、早速書翰差出候処、此義は
政府江申立へき事故、一応評議之上償金等も差出、尚
又罪人の首級も相渡すべき旨薩州より申通し、一先評
議一決する迄は、長崎港江罷越、右港ニて返輪相待居
候様申聞候処、聞入れず直様薩蒸気船三艘を取り、乗
組人を陸上げし船積の品物を奪ひ取り、あまづさえ右
三艘之船を焼べき命を下し、將ニ焼んとするの勢なる
を以て薩州台場より砲発致し候処、早速右船を焼き候
ニ付、薩州より強く砲発致し、右火ニて府中江火発し、
台場も夫々損所有之、尤も台場拾ヶ所有之由、其内六
ヶ所の台場より強く砲発致し、後四ヶ所の台場は損所
も無之由、英船之方即死傷人共ニ合せて六拾人、アド
ミラル船帆柱の中央を打たれ、船ぶち数ヶ所甲板之

諸所ニ損す、甲板ニて破裂彈発す、其時一時ニコマン
ダント甲比丹即死、アドミラルも驚愕して指揮不達、
薩蒸氣三艘を奪ひしは、英より差出たる書翰の通ニ、
薩より所置有之様ニとておどかしの謀計之由なり、
アドミラルの所置悪しきとて、兵卒共こぼす事盛ん
なり、薩の軍配至極宜しきとて、士官・兵卒ニ至る迄
夫々賞せざるはなし、
府中焼くこと終夜、

薩州砲の備方大砲を置又其間ニ小砲を置き、其配列甚
妙なる由賞しおれり、

戦争は唯二日之間なり、

アドミラル船当りたる丸末三ツ丸貫き居候、其外船
将部屋江丸当り、損すること甚し、
英アドミラルを誹すること甚し、

此度の戦争は英より手出し候て、薩ニても砲発致候事
故、名ニ於て正しとす、上陸は元より不致候、

軍虜式人有之由申振らし候、只今は慥ニは不相分候、

(包紙)
七月十一日 九ツ半過出

南部彌八郎様

木村宗三

大急 要用

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

六九〔伊地知貞馨ヨリ大久保利通へ書翰〕

一拾六七万斤

右御当地御在合焼地金額以上(鑄錢局ニテ)

一貳拾万斤

但壹斤ニ付八匁五分ツ、

一三拾万斤

但壹金ニ付九匁ツ、

右式行長崎ニ於て幕官府申請、右之内拾余万斤相廻居、

前条内々相込居候間、現四拾万斤内々御座候、

右は判金御遣し相成、御代払相済候株、

一貳拾万斤(広島交易方)

右安藝江致相談約束相済候株ニて、未代払ハ無之、内

劍筒五百挺、但頭七寸伐捨候筒、

右之代料三千両ニ及、其余ハ御金都合不致てハ不相叶

義ニ御座候、

都合銅金地

七拾万斤余

右外大坂ニて少々ハ受入相成居候義トも存候得共、員

数相分不申候、後程取調現員数御届可申上候得は、取

覺申候丈荒増及御報候、以上、

七月十六日(文久三年癸亥)

大久保一藏殿

伊地知壯之丞

(大久保利謙氏所藏本にて校訂)

報 忠房

島津三郎殿

御下

文久三年亥
七月

七〇〔近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰〕

尚以御書添之趣逐一令承知候、実ニ関東之形勢莫大之改革、全其元誠忠之周旋望至処、深々感佩仕候、

猶乍此上呉々御精勤之程偏ニ可存候、尚々残暑御自

愛專一二可在候事、

過日ハ芳墨細々一覽候、弥御勇健珍重不斜存候、扱先

月廿三日関白詔 宣下、即日御奏慶、廿八日ニハ御直

衣初宿侍初等万端無滞被為濟、於愚拙ハ、左近大将奏

慶直衣初等都合克相濟候仕合、御安慮可希存候、就右

祝給丁寧ニ何寄之品被下深々忝存候、純子ハ別テ、

好入々々之義芽出度、幾度モ重宝ニ可致深々喜悅候、

不淺御謝詞申述度候、此扇子一箱・肴等魚輕之事ニ候

得共令入覽候、御一笑モ被下候ハ、喜悅可仕候、仍御

報迄如此候也、

七月廿七日認

七一〔七月十二日宣達書〕

島津三郎

夷賊之義ハ雖為小醜、一般之人心ニ関係候ニ付、此節

御親征之儀御用モ被為在候、就テハ去春已来忠誠ヲ尽

候義御依頼被遊候儀ニ候間、急々上京候様

御沙汰候事、

七月

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
文久三年八月

七二 〔奈良原繁ヨリ中山實善大久保利通へ〕

書翰

尚々大坂御留守居森川氏此節ハ別段振替り、一向御
趣意相守り、是迄之処ニては頓と事情不通ニて、甚
不埒之事のミ候とて、格別打替り相勤候模様ニ御座
候処、此節下り被仰付、甚以残念がり後悔いたし居
候由承候間、形行申上候、当人ニも此節罷下り候ハ
、屹と御咎ニても被仰付儀軟と致心配居候由、可
成ハ右次第之事故、可然御取捨有之度奉存候間、此
段申上候、

一筆啓上仕候、秋冷寒杖〔二カ〕を候得共、弥以御堅勝可被成
御座、恐悦之御儀奉存上候、次に小子ニも無事昨日安
着仕候間、乍恐御静意可被下候、扱爰元更改之形勢、
村山氏着ニて御聞取被下候筈、何共残念之至御座候、
第一我々共是丈之勢をも不弁罷下り、拙キ見留色々と
不憚言上仕候儀共甚以奉恐入、不明之多罪今更申訳無
御座候、昨日は直様
近衛様江参殿仕、猶又模様伺上候処、御大息之外ハ不
被為在、此上ハ
三郎様江御顔之御向ケ様も不被為在との御沙汰ニて御
座候、併御請書之儀ハ国元混雑之儀をもかえりみず、
早速応召ニ候との趣ニて、一刻も早差出候方可然との
御沙汰ニて、今日内田氏罷出差上賦ニ御座候、此儀ニ
付ても色々吟味仕、今御一左右相待差出候様可仕なと
ゝの事ニて御座候得共、
近衛様
御双方より頻ニ早め差出候方可然と被仰立候ニ付、其
筋相決申候間、左様思召可被下候、只今之勢ニては、
なかゝ
御上之御趣意相立模様全見受不申、返々も残念之至に

御座候、爰元形勢聞取書ハ、高崎より差上筈御座候間、別段不申上候、いまた着涯之事ニテ、外ニ申上ルほと儀も無御座候間、此分あら〜如斯御座候、恐惶敬白、

八月五日

奈良原幸五郎(繁)

中山仲左衛門様

大久保一蔵様

(鳥津忠義氏所蔵本にて校訂)

七三 (高崎正風ヨリ中山實善大久保利通へ)

書翰)

七月廿六日高臺寺焼失、御旅町辺張紙有之、

高臺寺奸僧共朝敵松平春嶽江寄宿差免候段、不届至

極ニ付、以神火烧捨候畢、向後右様之者於有之は、

可処同罪者也、

月日

西本願寺江も越前家老始致旅宿候処、立退候様張紙いたし候処、六條人民大騒動いたし候得共、是は虚喝ニて未為何儀も無之候、去ル晦日越人牧野主殿入来、昨日は伝奏衆より御呼出有之罷出候処、本願寺焼払之張紙ニ付、近辺人民動揺之由、甚可傷事ニ候間、早々引

移候ては、如何有之哉之御諭有之候処、越より御返答

ニ、委細承知仕候、何方江成共引移可申候得共、可然屋舖も無之、且弊藩故之事ニ候得は、何方江移候ても、

焼払ニ相違御座あるましく、左候得は人民動揺は同事御座候間、却て今形ニて罷在候方可然哉と申上候由、同人咄ニ、越前守様幕府より頻ニ被召候得共、所勞を以

御断相成候、然処此節薩州江到来之英艦於横濱修覆為致、其俣差置候儀余成挙動ニ候間、来月初旬御発足御出

府、屹と右様之儀御尽力之賦ニ候由、春嶽公大津迄御出ニて備前江討手被仰付候、或は長人大砲を以蹴揚ニ

出張候の事と、洛中騒然たる事も皆虚説ニ候、

去月廿七日

中川宮江参殿、戦争之次第等申上候、御感無限、

御嫌疑之処も比日余程薄ク相成候得共、夫ニ付少シ暴

論家之心ニ叶候哉、

御親征一条等段々被迫候ニは、大心配致との御咄ニ候、薩ヲ離候得は、疑晴候様之気味ニ候間、此涯暫時

之処音信不通いたすべく候間、宜敷右之形勢三郎様江も可申上越段御沙汰候、

去月晦日於日之御門前會津馬揃(砲術手数共いた、調練ノ形也)

觀覽有之、日之御門北穴門前ニ 御棧敷相出來
出御、南方御棧敷

親王以下公卿方左右下ニ、

御親兵前類因州・阿州・備前・上杉 御警衛之形ニ候
由、申之半刻より始候処、戌之刻比大雨ニ相成、半ニ
て 御取止相成候、兵士騎馬皆軍粧之由、

大樹公攘夷其外件々御請相成御東下之処、今ニ為何儀
も無之、且大坂より陸行之賦候処、俄ニ蒸氣船より帰
城之心底甚 御不審思召、 御質問被遊度會津江東行
被仰付候処、頻ニ御断申上、不得止 御附武家小栗長
門守下向いたし候由、

一橋公上京、去月廿一日決評相成候由、京師ニは秘事
ニ候哉ニ被伺候、訳は未前ニ知レ居候ては、暴論輩沸
騰いたし候故之事歟、上京之趣意ハ前条之 御返答、

又は攘夷之大策改て建白ニ相成欵刃之事ニて可有之哉
ニ被察申候、加賀父子：佐竹・加藤出羽守（家臣、大洲藩主）・一柳兵部少
輔等被召候 御趣意不相分、加賀は五月出立之賦之処、

越前紛々之故ヲ以延引相成候由（越前通行筋ニ候由）、越前春嶽公御
論と不合之組有之、紛々之由頻ニ申触候、しかし越人
參候節、国中は一定いたし居候由ハ度々承候事故、例

之暴論刃之悪言欵共存候、

十津郷士

參政支配之事

御紋付

御提灯

其郷印可為勝手

御紋付

御絵符

組旗印

可為御紋付

右之通被仰付候由、

三條卿脚氣症ニて、先日より引入候段承居候処、昨日
は、土藩人（中山源太兵衛・福富健次・下許武兵衛）參、此頃ニ至、余程悔心相生
候由ニ候共、何分今迄暴行も相累候事故、今更改候て
は浪士輩ニも被棄、正論家も不容、何処ニも相離孤立
之勢可相成、苦心之余過日は、追々は入道遁世いたし度
との内話迄有之位之事故、病氣ハ聊ニて候得共、引入
候由咄申候間、再三実否致探索候処、土藩ハ三條家と
縁類故、親敷罷出者も段々有之、其者江発言之由、極
慥成儀ニ御座候と、しかし私共口より洩候て大麥御座

候故、決て御口外被下ましくと、類ニ申居候、定て実
事ニ相違有之間敷被察申候、平井収二郎・間崎鐵摩、
(年定)
廣瀬健太之三人死を賜候由、左候へは弥暴論家ニ手を
被付候姿ニ御座候、參候三士は、(山内體信)
容堂公台論之者にて、
実着体之人物ニ御座候、容堂公より

朝廷幕府命令兩端ニ出、甚疑惑仕候、如何心得候て可
然哉と

朝廷江御尋相成候由、未御返事ハ無之由御座候、
暴論公卿渠魁

三條中納言 (実美)
長谷三位 (信篤)

豊岡大藏卿 (隨實)
四條大夫 (隆輝)

正親町少将 (実徳)
東園中将 (基敬)

澤主水正 (宣憲)
滋野井中将 (実在)

(基修)
壬生修理大夫
此人は随分改心も出来可申哉、

(通種)
東久世少将

其外雷同之面々は余多有之候共、迎も難救人物右之通
候、御存も可有之候得共、為御心得申遣候、

一昨三日大津制札場張紙、当宿八島藤五郎事朝敵松平春
嶽江党し、公然と交易致し、国家之御大事を内通し、
寄宿等差許、種々奸計相助候条、不届至極ニ付加誅、
(殿徳)
けあけニおひて令梟首候、春嶽同類之者寄宿差許ニお
ひて可為同罪者也、

右之者偶然として免天誅候得共、天地不入極姦ニ付、
已後見当次第可加天誅者也、

三日

右之趣意にては専交易之事と相見得候、先日より此儀
度々及探索候処、西陣糸物過分ニ買入、横濱江差廻交
易相違無之哉之風評ニ御座候、是は直ニ西陣糸物屋咄
ニ候間、猶亦探索いたし可申候、

右之件々無益之事も可有之候得共、見聞之形行有之
俣申上越候、已上、

八月五日

(正徳)
高崎左太郎

中山中左衛門殿
大久保一藏殿

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

七四〔内田政風ヨリ中山實善大久保利通へ〕

書翰

七四ノ一(七)

別紙六通、追々三條橋其外江張紙有之、暴論組之所爲ニ可有之、御見合ニも可相成哉と存、写取差上申候、六條門跡江越前以家老止宿之処、是亦焼払之張紙有之、色々雑説も御座候処、伝奏衆より同家留守居被仰出候付、寺中より願出趣も有之間、転宿可致との御達御座候由之処、越藩之儀ニ付、右様可仕訳ニ候得共、いつ方江転宿仕候ても同様之筈、然時ハ亦右之町内も難渋可仕筈候間、六條寺院之儀ハ、頭より熟談之上貸請候寺院之儀ニ付、当分通罷居候心得之旨御届申上候処、夫形にて聞濟相成候旨、同藩之人高崎左太郎江物語仕候由承得申候、何分埒もなき仕合ニ御座候、越藩より之御届も甚不得其意儀と存申候、此一事にてても京師之形勢御深察可被下候、

一 橋様御上京之聞得御座候、於關東北国御大名衆以召爲廻候由、如何様掃攘一条ニ付、何欵御申立之儀にても可有之哉と風評御座候、御出京之上相分可申候付、追て形行可申上候、

一 三條様此十五日計跡より脚氣にて御出勤無之由、御病氣ハさまて之儀にてても無之由候得共、段々形勢ニ以差迫、逆も今通にては暴而已被行、未始終甚無心元、御悔心ニハ候得共、是迄御召仕相成候もの共御改心相成候てハ、如何様なる敵可相詰も難計、前後被成兼、先日ともハ、法体之深意も有之哉ニ為被仰由、壮成説と承込申候、追々右様之次第ニ御座候間、此末長々數暴論相強ク申儀ハ有之ましく、いつれ物々敷も可有之候間、追て正論被行レ可申哉、何分

朝廷之御次第、乍恐大道備り不申、黄口之衆何之弁も無之、暴を気味よき事之様ニ存違て之儀にて、甚言語同断之次第ニ御座候、御憤察可被成下候、

一 三條・七條辺諸所江近比ハ追々首出、咎書らしき捨人も御座候得共、申上程之廉にてても無之、歎息之仕合御座候、

一去ル昨日大坂申之刻仕出、三時限仕立町便、夜半過相届、状持之者申出候形行左之通、

竹田街道錢取橋辺にて、浪士にてても可有之候哉三人立寄、菅人ハ挑灯を取、一人ハ手を握、何方より何方江罷通哉と相尋候由、答薩州町便仕候段相答候処、状爲

見候様申故、手握被居候てハ、首江懸居候故差出儀難
出来旨申候処、其俣手を放候故、闇暗を幸遁出、乍漸
其場相通候旨申出、当晚ハ天明迄水末江罷居候由、第
一心得相成儀故、大坂江右之段申越、刻限見計昼届仕
出方可有之旨掛合仕置候、彼是紛々申推計可被下候、
錢取橋辺ハ夕方より追剝出候噂ハ承居候処、正敷右之
次第油断相成不申、言語同断ニ御座候、

一 布屋一列是ハ夷ニ奸商ともにて、布や一軒にて縮緬二
万疋用置候由、糸も同断、夫より袴籠ニ付是迄百五拾
両程いたしたるの、則より百五両ニ直下り、油袴升ニ
付百文直下り相成候噂ニ御座候、西陣之者共大悦仕由
ニ御座候、右通之次第故、来年とも罷出候て、スツト
直下可申哉之取沙汰ニ御座候、

一 會藩去月晦日馬揃且調練、

天覽日之御門前にて有之、同日ハ大雨にて央より取止
罷成、今日また御座候、今日横田鹿一郎 陽明家江參
殿候処、御同所御門前行列通行ニ付見物仕候由、肥後(松平容保)
守様ニも馬上にて御出馬、士分以上ハ甲冑にて銘々姓
名実名迄相記候小旗を後ニさし、鎗を自分ニ携、其以下
ハ歩足・具足、隊將にてても可有之哉、馬上も段々相見得

居候、殊之外立派之行列にて、壯観目ヲ驚したる咄ニ
御座候、右之通荒増奉得尊意度如斯御座候、以上、

八月五日

内田仲之助

中山中左衛門様

大久保一蔵様

(鳥津忠孝氏所藏本にて校訂)

七四ノ二
(別紙ノ一)

歎願

願主下人中

布屋市二郎

并 彦太郎

是迄於横濱表呉服糸等交易仕候段、深奉恐入候、金之
儀ハ心得違仕居候テ、

其地御運上所御令辞被為在御座候事而已存知、天恩御
国恩之儀モ不相弁候段、誠ニ愧慙至極無申分候、此度
天誅之御張紙ニテ深恐入、後悔及血涙改心仕候、右ニ
付テハ、是迄交易心組持溜居候呉服糸類等其余諸品・
家財金銀ニ至迄不残没入被為仰付候ハ、万々分ノ罪
滅ニ相当リ可申哉ト、深難有仕合奉存候、右次第ニ被
仰付候上ハ、両人之主人御助命被下候様、御憐愍ヲ以

御聞濟被為在被下置候ハ、重々難有仕合奉存候、誠
恐謹言

七月廿六日

七四ノ三
(別紙ノ二)

申渡

布屋

彦太郎

下人共江

其方共歎願之趣ニテハ、彦太郎父子弥改心イタシ、
御困忍ヲ報シ奉度旨、左モ可有之事ニ候、乍去大罪ヲ
犯シ候者、卒尔ニ可赦筋無之候得共、猶考之上可及沙
汰候、其旨存猶又申渡、

其方共宅江浪人体之モノ罷越、猥リニ金錢ノ無心等申
込候共、決テ正義ノ者ニ無之候、一切頓着致サス、最
寄之方江早々可訴出候、即刻人数ヲ差遣シ可召捕モノ
也、

七四ノ四
(別紙ノ三)

高臺寺奸僧共、朝敵松平春嶽寄宿差許候段、不届至極

ニ付、放神火燒捨畢、向後右様之者於有之ハ可処同罪
者也、

七月廿六日

七四ノ五
(別紙ノ四)

布屋市次郎

右之者下人共ヨリ歎願之筋難聞届候得共、左之通執行
候得共、助命之儀聞届可申事、

但シ五畿内御弘之事、

一交易之品々不殘洛外へ持出シ、五日之内燒捨可申事、
但シ家財日本之品其俛差置候テ可然事、

一金銀ハ交易以來之分ハ不殘封印、町内年寄中江預り置
可申、追テ御所置被 仰付ノ事、

右之条々相違於有之ハ、再可加天誅モノ也、

一近日壬生浪士共ヨリ、金子借用之儀申越候趣ニモ相聞、
右ハ全ク貧欲ヨリ起候儀ニ付、以後奸計ト相心得、右
様儀付頓着致間敷事、

一布屋市二郎金銀封印之儀ニ付テハ、年寄中立合、相違
無之様取調預り置可申候、追テ如何様被 仰付候事、

七月廿九日

町内年寄中

七四ノ六
(別紙ノ五)

三條通東洞院西へ入

丁子屋吟三郎

室町通姉小路下ル

布屋彦太郎

右 同人父

佛光寺通高倉西へ入
市郎

八幡屋卯兵衛

葭屋町一條上ル

大和屋庄兵衛

此者儀、近年幕府ニヲヒテ私交易相許已來、一己之利潤ヲ貪リトランタメ、銅錢・蠟・絹糸・油・塩等ヲ始、其外有用之諸品買、横濱・長崎江積下シ、異賊江相渡シ候付、物価騰貴シ、万民困苦ニタヘス、甚敷ニ至テハ、流離飢渴ニヲヨフ者不少、実ニ不便之至、於人心不忍之事情、畢竟幕府惡政之致候処トハ乍申、我が大御国之民ニ生レナガラ

御国恩万分一モ奉報心無之而已ナラズ、恐多モ上之御

趣意ヲ相背キ、禽獸ニ劣リ、幕吏異賊ヲ率ヒ我国殘害ヲ致シ候段、言語同断不届至極ニ付、天下ノ億兆ニ代リ加誅戮為鼻首者也、

七月廿三日

右之外大坂・長崎・今治・岐阜・飯田・長濱西国東国奸賊共一々取調、三賊夷族(其力)シ、向後交易致候者之根ヲ絶シ申者也、

右之者共ヨリ金銀借用イタシ居候共、一切不及返済、自然町奉行共ヨリ取立ケ間敷義申付候ハ、面々之姓名相認、三條・四條之橋上ニ張紙ヲ以願出可申出者也、

七四ノ七
(別紙ノ六)

七月十五日裏寺町正覺寺門前有之候張紙、攘夷御決錠ニ相成、段々長州ニヲヒテ兵端ヲ被開候処、傍觀ニ打過候藩モ有之趣ニテ、被惱宸襟実ニ以奉恐入候、幕府ニ有之狐狸之役人等之虚言ニ陥入リテハ、
勅慮貫徹仕候事不相成、依之勅違之諸藩并
勅命ヲ不用交易イタシ、万民難法為致候役人等ヲ罰シ、

且百姓町人共之内交易盛ニ致シ、国体四民為抱候程之
国宝ヲ数多外夷ニ送り、分限不相応之大金ヲ集、外夷
打払被、仰渡候ヲ相弁ナカラ、交易ニ諸品ヲ持運ヒ、
悪心言語ニ絶シ不屈之至、骨切肉ヲ喰フテモ猶不足、
子孫ニ至迄攘夷之血祭ニ加天誅ヲ、夷艦砲焼之先陣ニ
彼等之家蔵諸道具等焼払ヒ、金銀ヲ出陣之軍用金ニイ
タシ、早々兵端之地へ向ヒナハ、

天津神・国津神モ世ニ嬉シク思召セシ、恐多クモ長々
ニ奉惱

宸襟、下万民難涉被致候付、其万分一ヲ謝シ可申者也、
早々尽忠報国義士中用意可有之者也、

七月

第一悪心之者打寄、世上之人氣ヲ立候米相場相払候事、
次ニ米屋・油屋・糸・紙・銅・太物、其外品々紺屋形
ニ至迄交易ニ掛リ候ハ、洛中三十菅軒・洛外ニ八軒余
免ス所ニアラス、

此書付三日之間張置、若早く取払候ハ、其人モ同罪
ニ可致事、

七四ノ八
(別紙ノ七)

二本松御屋敷并

(島津氏影養女)

貞姫様御住居向御造立追々御成就相成候旨、吉田清十

郎より申出候付、申上趣御座候処、御成就濟之上は可

差下旨被仰渡、委細承知仕候、然処其後

貞姫様御住居御膳所向無之、御造立不相成候ては難被
為濟旨、

陽明家掛役之衆より承趣有之、出頭御約定、朝夕御膳
之儀は、彼御方より被進候由之処、御吟味相替、

此御方にて御調相成候趣、本田彌右衛門(親進)より申越候付、

何れ之筋御膳所之儀は御造立不相成候ては難相成、当

分右御造立中ニ御座候間、頭見越より少々長引可申哉

と存申候付、比合猶亦当人江承届候様可仕候、且亦右

掛面々江骨折相動候御取訳を以被成下候金子之儀、出

立前被成下候方、軽キ者共も罷居事故、可然哉と相考

申候付、是又同人江引合都合向承届候上、時宜次第取

計、兩条共後便より形行申上候様可仕候間、左様御承

知可被下候、此旨旁御請答申上越候、以上、

京都

亥
八月五日
内田仲之助

中山中左衛門殿

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

七五 (宛名差出名不明書翰)

七五ノ一

拜呈、当夏ハ晩立モ少ク、田面水之敷既雨乞ノ炎眺^ア実
 ニ難堪候処、益御清昌奉遠賀候、去月廿九日得貴意申
 上候事ニ御承知被成下候御儀ト奉存候、一ハ七日御祈
 禱相濟候付、此御肌着返上可仕本意ニ御座候ヘトモ、
 明日ヨリ御祈禱可被申上御本体無之候ニ付、無余儀此
 俛ニ延置、引続キ修行候条ニ被申聞候、実ハ七日相濟
 候御品御肌ニ被為觸候ハ、自ラ御全快ノ御都合モ宜
 敷由ニ伺候ヘトモ、何分右ノ訳ユヘ不任心底可然御取
 計被下候、二ハ御祈禱ノ節別紙ノ様相伺候付、心覚ニ
 記置候御序ニ御伺可申候、積年ノ凝リカタマリヲ纒ノ
 日数ニテ動スト申事ハ、不容易事ト外神様ノ御噂モ御
 座候ヘハ、乍序伺上候、右御祈禱且御サ、ケノ節、岩
 下氏モ同座ニテ事実被相同、動カサレハ治シカタシ、
 難有御事ト感涙被催候、尊君ニモ御同慶可被下候、早
 々謹言、

八月五日

七五ノ二

尊兄御痛所ノ儀モ御殿へ御上リノ序ニハ、必御立越ニ
 テ御見舞可被成旨、兼テ承御座候得共、何分積年ノ御
 病故、速ニ格別ノ功驗モ御覺不被遊哉ト、深心配仕候、
 過日御差向ノ一封ハ無遠慮受成候付、必御世話可申上
 儀ト存候ヘトモ、今日ノ御加減無御遠慮御申越可被下
 候、早速其段申上、猶御都合能取計可申候、此度発足
 ノ節被成下候御細事ヲ以、當時ノ御元氣相伺候処、何
 分ニモ御苦心厚キ故、内心ノ草臥強クミユレバ、斯御
 苦勞不被成様可申旨ノ申聞候、時ノ不至節ハ、何程尽
 シテモ十分ニハ無之事故、唯無油断心懸ニテ、作り氣
 ヲ遣フマジキ様ニト被仰候上、尊兄ニハ氣ヲ遣フクラ
 ヒノ事ニテハナク、氣ヲ操ナリト被仰候ヨシ、何卒今
 暫御ユルメ遊シ候様、クレ〜モ申上候様被申候、左
 様御承知可被下候、不具、

七五ノ三

岩下君在坂ノ事被致承知、必面会致度旨金光明神被申
 聞候付、此段申通辞候処、兼テ馴致ノ事故早速上京、二
 日御肌着御祈禱拜見、且御病ノ動キ云々ト申御様体等
 伝聞深被相悦候、付テハ時勢切迫ニ付、神慮ノ次第等、
 懇々御談有之候処、岩下氏見込夫是返答被致候処、一

了簡ニテハ何トモ難申旨ニテ、二日夕ヨリ貴地へ被立越、神々ノ思召窺ノ上決答可申トニテ発行、三日午後帰西、以上云々ノ儀ハ、八月ニ入候半テハ実功難届旨等返答有之候処、岩下氏モ終ニ神慮ニ伏シ被申候テ、時節到来候ハ、必出世死力ヲ尽シ可申トノ契約治定相成申候、右神ト人トノ手詰ノ談判ニ寄、岩下君ノ淵底篤ト相窺候処、旧恩ノ重キト 朝廷ノ貴キトヲ一荷ニ負テ、今日ノ憂苦ヲ堪被忍候胸中能ク相知レ、イヨ

〜末頼母敷奉存候、素ヨリ貴兄ニハ右等ノ事御承知故、過日モ御事通等有之候御事ト察上候、併時不至シテ芳敷ノ返事モ無之哉ノ処、今日神明ノ御力ニ寄右様治定イタシ、

老公御吃方一人出世ノ時ヲ得候事、御同慶ノ至ニ付、不取敢右成行御報知申上候、乍去好機會ニ望ノ確説手ニ取候マテハ、御他言御無用ニ可被成下候、当今ハ別テ寸善尺魔ノ世体、却テ毛ヲ吹、疵ヲ求ル事モ有之候半哉ト恐察仕候、穴賢、

本文ノ運ニ付、大井川通咳ドコロテハ無之、御同人モ方今手元差向ノ要用取片付申度トテ、今四日横濱丸ノ便ヨリ帰国、八月上旬ニハ必可被罷登御約条候

間、是又御含何分御尽力可被下候、斯マテ神慮被尽候次第御洞察、八月ノ機會ニハ必成功行届候様、呉々モ願上候、頓首、

七六 〔高崎正風ヨリ中山實善大久保利通へ〕

書翰

去ル六日、會藩・因州・備前・上杉・阿波五藩調練於日之御門前、

觀覽已之半刻より始、初夜過相濟候、此節は発炮いたし候処、堂上公卿殊之外御恐怖、或は未前ニ御暇も有、或央ニテ御退出も有之、或は始より発砲ノ事を聞て不参等、三條卿御引入中押て 御参内之処、別て御恐縮始終コハイ〜と被仰候由、

前殿下 御話ニテ御座候、調練は上杉抽て宜敷と之評判ニテ御座候、

錦小路殿近々御発京ニテ、薩州江御下向之段今日承、

直様聞合申候処、相違無之哉ニ御座候、御趣意ハ此節薩州攘夷大勝利を得候処、甚

御感褒浅少、是ニテは賞罰不明、人心居合如何ニ付、是非屹と来世迄も面目相成候程之儀有之度と、色々浪

士或暴論公卿方ニも建議いたし候人多々有之、右之決議ニ相成、左候て正親町卿長藩江御下向之振合ニて、

戰場御監察被為在候由、随從之人數等承合候処、

御親兵之中より御供之賦候由、慥ニは分兼候、御下向は相違無之向ニて候、猶又委曲聞合詳悉可申越候、一

体此節暴論連中情実細々聞合候処、此節之一事ニは、

余程感歎いたし居候輩多、三分二丈は是迄之論相変候向ニて御座候、牧和泉余程被用候様子ニて、段々^(マ)妬嫉

いたし候輩も有之体ニ御座候、

御親征一条頃日敵敷周旋、宮 陽明家辺江段々奉迫、

大ニ御配慮被遊候、

一橋公五日・六日江戸出発之筈之由、御縁頭一條家江申参候由

前殿下御咄御座候、此節は

將軍同様心得候様ニと二條城江もあたり相成候由、

右見聞之形行申上越候、以上、

八月八日 ^(正風) 高崎左太郎

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

七七 〔中路延年ヨリ内田政風へ書翰〕

尚々秋^(冷)□御自愛、折角御尽力願上候、昨日午後ヨリ

風起リ、雨氣催候へトモ一向降不申、直照ノ勢ヒ実

ニ堪兼申候、海江田君御逢ノ節御鳳声希上候、以上、

別封呈上仕ント欲スル処、三日附ノ貴報相届拜見、其

後ノ御成行逐一敬承、早速神前ニ捧猶行末御祈念仕候

条、御放慮被下候、世人拳テ惜ム事云々ト御認ノ御文

意ト、外ノ衰運云々ト有之儀御比校被下、是一事ニテ

モ顕幽、合体ノ勝利末頼母敷思召被下候、枝葉之儀変

化ハ少シモ御心配不被遊候様奉存候、以来ハ御参朝

ニサへ成候得ハ、自然ト御連ヒニ成可申儀、兼テ神

慮ヲ伺居候へハ、是マテノ所御互ニ奉尽処、此末ハ神

々ノ御扱ヒ被遊テノ儀ト奉存候、乍去幽界ノ儀モ、禍

津日ノ神謀アリテ、則別紙ノ様ニ成立候へハ、猥ニ安

眠モ難成、折角奸謀御探索被下候、正ノ奸ニ倒サル、

古今珍ラシカラス候へトモ、ヨシ倒ル、モ後世ニ恥辱

ハ残シ不申、是ノミヲ我身ノ本体ト覚悟仕、唯

神明ノ冥助ノミ歎願罷在候、別封モ御見込ニテハ、神

モ必至ニ御ハマリ被下候儀ト、朝暮難有待申候、過日

岩下君暴論ノ始末等申上度ニテモ、一昨日咳氣ニ當リ
平臥中、難届御察被下候併当分ノ事故、御放應被下候、南谷先生一生懸命
ノ場ニ立至候事故、胸中ノ潜蔵一吞ノ掛引目覺敷事ト
モニ御座候、右等ニ寄幽議モ切迫致候半哉、愚察ノ次
第モ御座候、穴賢々々、

八月九日

延年拝

内田君

北野天神前西ニ入紙屋川町池田久兵衛殿方ニテ、

中路延年

等持院門前ニテハ、幸便次第
届ノ筆故、遅延仕候ナリ、

自今御書状ノ節上封面右様ノ認御座候へハ、早速相

達申候、為念申上候、

七八〔木場傳内ヨリ大久保利通へ書翰〕

別紙之通小倉村上銀右衛門より申越候間、写ニて差上
申候、左候て已来、同人より其御許江も為申上越趣、
爰元江申越候節ハ、別段不申上越候間、左様御含可被
下候、以上、

亥

八月十一日

大坂

〔養生〕
木場傳内

大久保一藏殿

〔別紙〕

以幸便奉啓上候、秋冷相催候処、御勇健被遊御座、奉
恐悅候、然は下之關之方も其後異船も不通候処、去ル
廿三日

公義御船御通船之処、長州様より砲發有之、右御船江
公義御役人長州様・小倉様江御差向之由、夫ニ付荒々
内分風舌別紙ニ差出申候、御内覽可被下候、其外は相
替儀無御座候、先は急便ニ付、右御注進迄申上度如斯
御座候、以上、

八月二日

村上銀右衛門

永井清左衛門様

林 休左衛門様

其 外 様

風舌

一去ル廿三日防州本山沖ニ異船壹艘見得、長州より合図
有之、小倉川口台場迄も相図を請、備場々々二人数操
出しニ相成居候処、右船は
公義御船之御印有之段、浦部より注進有之、同夜皆々
引取申候、

一廿四日之朝右御船下之關江御乘込之処、田之浦通船之

時、長州様より三四発御船目当ニ砲発有之、壹発は船

ニ当り少々損所有之候由、下之關江繫船（接）応説も御座候

由、子細は分り不申、御船は小倉之様通シ不申、番船

相付、船ニも御人数百人計も長州より乗込、番いたし

居候由、此船ニは

公義御役人長州・小倉両所江之御差向御使者御乗込之

由、小倉江之御使者去ル廿七日暮ニ小倉御渡海、御上

陸御滞在ニ相成居申候、御名前左ニ、

小倉様江御差向之御役人

御目付助

牧野左近様

村上求馬様

御勘定格御徒目付

伊藤次郎助様

御普請役格御小人目付

中川鐵助様

長州様之御使者

御使番

中根一之丞（正聖、善臣）様

御普請役格御小人目付

鈴木八五郎様

右去ル廿五日夜下之關より飛船にて小郡迄御越、夫より

山口江御差越之由、廿九日昼比漸々聞出申候、

右御船は長州様より番船相付、船ニも番人百人程乗込

居、下之關より下モ（下）ニは通シ不申由、長州様ニ御預相

成候とか、又は御役人より御預に相成候とか申嘖ニ御

座候、

但

公義之御船ニ砲発致候坏之事、如何ニ御座候、然

ニ右御船ニは小倉之藩中同船致居候由、長州之方

ニ聞得候趣、尤御役人衆よりは乗船不致居候段御

答有之候由、本山沖手ニ碇泊之節、青濱と申浦よ

り獵船壹艘沖江出候て、本船ニ付候由、其船浜ニ

歸る時田之浦江滞在之長州之藩中五六人見付、船

頭・庄屋を召捕烈敷料方有之候由、庄屋白状ニ及

ひ、小倉藩中も乗居候様申出候由、庄屋は田之浦

陣所に押置申候由、右之訳合有之哉にて、砲発等

之振舞かと風舌御座候、何は小倉之藩中乗組被居

候共、異人ニても無之、夫程ニ恨られ候事も有之

間敷之所、最初より相打等無之ニ付、田之浦まで

も押借被致候事と、何欵御立腹之廉有之義と風聞

仕候、

内実（内）は小倉藩中

郡奉行郡代役と唱

河野四郎

御勘定奉行

大柳熊太郎

右之兩人同船ニテ御座候由、右之次第ニテ上陸も出
來兼、自然之事有之候ては、奉対

公義并小倉江不忠之至ニ付、差迫り候哉、廿五日ニ
船中下之關ニテ兩人共切腹有之候趣、廿九日昼後ニ
洩聞仕候、誠大變之時節、此末如何ニ相成候歟、只
々々下方之者恐入計ニ御座候、

小倉飛脚七月八日比室〔兵備室〕より御奥様御門先之飛脚、防州
宮市辺迄は通候由、夫より下之關迄之間通り不申、多
分小郡辺ニテ殺害ニ相成候など風聞仕候、于今帰着不
仕、御用封も多分押取られ候事と噂御座候、誠ニく
恐敷時節ニ御座候、風舌之俣不閑御注進申上候、此節
之儀は勿論、極御内分御聞取可被下候、以上、

八月二日

〔島津忠家氏所藏本にて校訂〕

七九 〔高崎五六重野安釋ヨリ中山實善大久保

利通へ書翰〕

稍秋冷之折柄、御双位愈以御奉静御精勤可被成御座、

恐悦之至奉遙賀候、然私共一列、当五日之深夜於長
崎異船江乗付候義は、彼地より御報申上候通御座候処、
翌六日朝同港出船、同州洋通行至て平穩之海上ニテ、
十日夜四ツ時分〔神奈川〕金川着岸、番会所江届申出候処、横
濱奉行所江も相通し、無子細差通し候ニ付、夜通し通
行ニテ、昨朝府下江安着仕候、邸中變動之義も無御座
候間、御安慮可被下候、然処吉井〔友実〕仲介義先達東下在邸
罷在候ニ付、当地之模様同人并佐次右衛門等江早速承
合候処、当分横濱鎖港之幕議最中之由、右は一橋公御
決心ニテ板倉も御同意、是非此際横濱鎖港文は被相遂
候上、一橋公御上京至当之大策御建達之御主意ニテ、
此節は至極之御振はまり相成、御舎弟君御養子御跡目
迄も被立置候て、御西上之御含ミ候由、乍併何分惣体
之幕役ハ、醜態仍旧御一致申上ル勢ハ不相見候得共、
左程迄御自身御決意之上は、此策全く不相行れ共難申、
何分之義は、今四五日内ニは事情相弁可申との事ニ御
座候、しかのミならず二城公〔マ〕 京師

御召之御一条も、御猶予被

仰渡候之段、就右は私共奉承知候御用向も、東西相応し
候一策齟齬ニ及候形勢ニテ、何分小五郎より之一左右

不相待候ては、不相叶時宜ニも御座候間、暫ク動静相伺候上手は下し候方可然と、衆議仕居候義ニ御座候、おのつから数日は不出、当地之決議并 京師之御模様相弁可申候間、其節又々飛報可申上候、適便宜を得候ニ付、先到着之御届且右御一報迄申上度、如斯御座候、恐惶謹言、

亥

八月十二日

重野厚之丞
(安藤)

高崎猪太郎
(五右衛門)

中山中左衛門様

大久保一蔵様

侍者

〔島津忠豪氏所蔵本にて校訂〕

ハ〇〔吉井友實ヨリ中山實善大久保利通へ〕

書翰〕

御両殿様益御機嫌能可被為入恐悦御同慶奉存上候、次ニ貴様方御堅勝御精務之苦奉賀候、小夫御同然罷在候、御放念可被下候、

一昨日高崎・重野着府、御授策之趣委細承知仕候、乍去爰許之形勢先日も申上候通、已ニ横濱鎖港之筋決定之訳ニ御座候間、暫時見立之筋巨細重野より申上候間、

省略仕候、

一昨日一橋付公用人黒川嘉兵衛と申人、此已前より正議之人にて、此節一橋付相成候由ニ付、面会段々及議論候処、猶亦幕情詳細相分、実ニ可恐之情態にて、是程ニハ有ましと存居候処、沙汰之限りニ御座候、暴論起り候も亦一理可有之、此節御国江侵入之儀も無相違奸吏差図之由、極内話申候、只一橋と板倉のミ正論にて外ハ論なき次第御座候、右通之勢にて横濱鎖港も如何可有之欵、成程一橋・板倉之処ハ先日申上候通御座候得共、今日ニ至り亦如何と驚居申候、

一 一橋此節上京之筋決定有之、已ニ日限迄も相極居候処、鎖港一件相始り候付、其上之事と延引相成候由、上京之訳ハ逆も各国拒絶ハ六ヶ敷との趣上奏之賦にて御座候由、此事件始より大難事ハ差知候事故、此節ハ生てハ再帰るましと、御末弟を御養子などの事迄、彼是御治定有之、私黒共ニも上京いたし候ハ、必京師ニ屍を可留との事ニ付、誠ニ感服之次第ニ御座候、夫程御決心ニ付、御尽力之儀を無ニなし候も残念之事ニ候、乍去京師之情態ケ様ノにて、中々一通之事にて御採用有之間敷、拙者ニも暫滞京いたし、大概事情も見聞

いたし居候、就てハ

一橋公御老人、御上京御建白被為在候ても、事成候儀無寛束相考候、先我々共愚論ニハ、尾・會・越等之親藩ハ勿論、薩・肥・筑等其外大藩江御結合、其上御上京御建白相成候ハ、いかゞ可有之哉申掛候処、至極尤之事ニ付、則一橋公江申上、仍時宜てハ御直ニ申上呉候様との趣ニ御座候て、深ク同意之様子ニ相見得申候、此策被行候ハ、高崎等江御委任之一策も御都合可宜哉、若其通幕府決定相成候ハ、必御国元江も御相談相成可申候、其節ハ何卒御助ケ被為在度御儀と、只今より頻ニ奉祈居候事ニ御座候、左様御舍居可被下候、しかし横濱鎖港ニ只今ニてハ決定相成居候間、何分暫時見合、追て形行可申上候、
一横濱先平和之様子御座候、

右為可申上如此御座候、猶追々可申上候、已上、

八月十二日

吉井中助

中山中左衛門様

大久保一蔵様

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

八一〔薩州京師警衛ノ達〕

八一ノ一

薩州

右是迄通警衛可致事、會津より早々可達事、加勢葉室〔辰原〕様被命候事、

八月十八日卯刻

八一ノ二

薩州

家来

何れも精々尽力之段大儀

思召候、以後尚諸藩互ニ申合、宜鎮静之違尽力可有之事、

事、

但諸藩詰切ニては人数疲労候間、申合交代御警衛可

仕候也、

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

八一〔近衛忠房忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

急速申入候、昨今之形勢家来より之注進ニテ、定て承知可有之ト存候、一昨払曉より大業之基本相開、到今夜邪正分明之道一際相現レ候ニ付てハ、尤軍旅攻禦之次第も相立、種々碎肝胆候儀ニ候、右之通相現レ候次第在之候ニ付、跡追々治法之群議発端之折柄ニ候処、昨春来段々之成行始終見留相付候諸侯モ無之、廟議紛

々之異乱ニ及候テハ、実以十倍之困難ニ可相成、国体
安危一大事之時節、右之談判被 聞召度

御沙汰之次第モ在之、初発之廟議尤大事之限ニ候ヘハ、
何分其許上京無之テハ、人心一同之落居モ無之、正論
之筋モ難相立候間、度々遠路大儀之事ニ候ヘ共、此折
節上京在之候様致度、左候ハ、

叡慮モ必然 御安堵之事に可被為在、下情一同之渴望
ニモ相叶可申、旁上京偏ニくくく旦夕待入候事
ニ候、就てハ上京有之候ハ、如前文時勢折柄ニ候ヘ
ハ、猛勢之威風不相示候テハ、是又權勢ニ相係候儀ニ
候間、兵士多分被召連候様頼入存候、何分ニモ一刻モ
早ク国許発駕ニて上京頼入候、繁勤公務之寸隙一筆申
入候事ニ候ヘハ、猶面謁万縷可申述候也、

八月十九日夜戌半刻

修理大夫殿へモ宜敷々々御伝声希入候、(奈良原憲) 何も辛五郎

より御聞之様御頼申入候、以上、

忠 熙

嶋津三郎殿

忠 房

極内密急々用

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

八三 (近衛忠房忠熙ヨリ島津久光へ書翰)

嶋津三郎殿

忠 熙

忠 房

極内密早々

何も辛五郎其余御家来より巨細ニ御承知可被下候
也、

追々秋冷増補候処、弥以御勇猛珍重候、過日ハ齊輔上(村田)
京致、巨細ニ御伝言之趣承、深々悦申入候、近日 京
師之形勢ニ付てハ、一日寸時も早ク御登京在之度存候、
段々内田仲之助始誠実精勤之至、深々感佩之事ニ候、
追々

朝廷之御変革深々安心ニ存候、是より弥御大事之場合
ト存候ヘハ、前文之通少し之遲滞も無、急速御上京之
様待入候、最早御途中之事と存候ヘハ、尚更日ヲこめ
急速々々御上京之様待入候、上ニも度々之御沙汰、旁
急速々々之程待入候、(徳川慶喜) 尾張前大納言ニも今日国許発足、
廿五日ニ着京ニ候、仍右已幸便急キ荒々如此候也、

八月廿二日

緘

嶋津三郎殿

忠照

極内密早々

忠房

(島津忠家氏所藏本にて校訂)

八四 〔村山齊助ヨリ大久保利通へ書翰〕

差急用事而已申上候、京師之模様意外之形勢にて、先ハ十分勝利ニ御座候得共、長州此俣にて相止可申訳も無之、いつれ不日ニ大挙して上京可致ハ案中ニ御座候、左候て諸藩ハ皆畏縮、頼むニ足らず候、其上朝議も紛々

宮 陽明様方ヲ始、やゝもすれハ御恐怖にて、御因循之説のミ行ハレ、甚当惑ニ御座候、唯々寸刻も早く三郎様御上 京被遊候様、此機会相失候てハ、天下之事終ニ不可恢復御座候、万々一火急ニ 御発途不被為叶暫時御延引ニ候ハ、御定通圖書殿にても多人數御引纏、火急御上 京被成候様奉存候、兎ニも角ニも此方之少人數にてハ甚無心元奉存候、御人數御繰出し方ハ肥後熊本より豊後佐賀之關江出候 此行程三、夫より六十里計 七里之海上にて伊豫へ渡り、時宜ニ依てハ宇和島侯御手船にて借り受、四国路ヲ乗り廻し、兵庫又ハ室辺江

着船ニ相成候ハ、如何可有御座哉、又ハ肥前侯江蒸氣船式艘程有之由ニ候間、御借り受ニ相成候ても可然欵と奉存候、最早長州海ハ通行出来申間敷奉存候、日向灘ハ日本船にてハ甚念遣ハしく奉存候、左候て愚考ニハ、肥後人數ト打合せ小倉黒崎辺江多人數押出し、何となく長州を襲ふ之勢援ヲ張り候ハ、長州固ヲ空ふして上国ニ出張候事ハ相成間敷、此一策ハ得と御勘考被下度奉存候、最早長州興廢存亡之時ニ到り候得は、彼も死力を尽し可申事と存候得は、片時も手拔有之候てハ不相叶、返々急速ニ御繰出し被成下度、

皇国万全之大策ハ只此一挙ニ有之事ニ付、彼ニ被先候てハ後悔臍ヲ噬とも益なく存申候、

一大和・河内辺江中山侍從諸暴士三百人計ヲ駈り集メ、行幸之先陣として先日より差越、五條之代官所へ打入火ヲ掛焼払、首ヲ數多切り掛、猶又徒党ヲ集メ、河内之狭山城ヲ乗り取候結構之由御座候、是以長州之指揮と相聞得申候、誅罰之打手被仰付候筈ニ候得とも、いまだ今日迄ハ御決議ニ相成不申候、ケ様ニ最早断然ト反逆之色ヲ顯し、鳳輦ハ勿論、内侍所之神器迄移し候程之勢ひニ御座候間、返々も切迫極り申候、御察可被下

候、御上京御決策之儀ハ近衛様宮様方へも申上、邸中之諸士へも相洩し候処、皆々大ニ相競ひ、実ニ一日千秋と御待上候、最早此方ニも騎虎之勢ひと相成、皆々死地ニ入候得は、乍此上多少之人數ヲ以、十分之勝軍仕度念願山々ニ御座候、是迄火急之切迫のト申上候事も段々有之候得とも、実ニ此節之事而已ハ意外ニ御座候、万々一海路隔絶ニて 御上京御隙取被遊候ハ、致方も無之候間、大兵ヲ以長州へ御侵入被遊候ハ、是以奇妙たるへく、此御一策行ハレ候得は、直ニ征長之勅詔ヲ申下し、京詰之人數も星夜馳下り可申候、返々も火急之御決断奉願度、今日早打ヲ以此段申上候、以上、

八月廿二日

村山齊助

大久保一蔵様

呈御下

(島津忠家氏所藏本にて校訂)

八五 (内田政風ヨリ大久保利通へ書翰)

^{八五ノ一} 村山齊助よりい細申上候趣披見、尤之儀ニ付、何卒可然様偏ニ御周旋可被下候事、

八月廿二日

内田拝

大久保様

書洩之余ハ、永山・西田より御聞取可被下候、

^{八五ノ二}

京師不容易形勢御傍觀難被成、去ル十八日

宮様 陽明家御父子様 二條様 徳大寺様等被仰談、

會・薩より御供被仰付九門差堅、正議之御方々様而已

御参

内、且在京之諸大名衆又ハ御家来御召ニて、一時ニ暴論之長州様御家来始浪人、且三條様以下七人之公卿取円罷下候形行、御家老衆江御届申上越候付、御覽可被下候、就てハ同様御届申上度存候得共、何分手廻兼候付、彼是御推量くれく、

三郎様御早目ニ

御上京之処、不都合無之様御周旋被成下度、此御方纔

百人余之御手薄ニて甚心配仕候付、訳て此段旁申上越候、以上、

京都

八月廿二日

内田仲之助

大久保一蔵殿

追て乱筆御推読奉仰候、

(島津忠家氏所藏本にて校訂)

八六 〔高崎正風ヨリ大久保利通へ書翰〕

此節大挙之始末、詳悉奈良原・永山・西田等ヨリ御聞取可被下と態と不申上候、実ニ再不可得之機会ニて、朝廷之紀綱此時ヲ置テ振期ハ有之間敷と、無余念思詰候、就ては此結局ヲ取候ハ、我

三郎公ヲ置ケハ外ニ無之、不待論処、尤 御上京之御決心ニ相成居候由村山より承知、実ニ

皇国復興之瑞と、一同三秋奉待居候、片時も早 御出發之所九拜奉伏願候、夫故此方ニは昨日

御兩殿様江申上、尾老公江謀幕船五艘借入、鶴崎江廻貫候筋ニ取計畫申候、直様尾士角田休次郎・何々銀三郎兩人江委細御託、御細状御認御差下相成申候、右兩人モ五艘ハ如何難計候得共、三四艘ハ定て相出来可申と為申由、是ヲ謀も僕上京後、頻ニ

三郎公 御上京之事ヲ老公御願之由申參、例之困難難之事を以返答いたし置候得共、是非々々公武ノ御為國ヲ捨テ御出ヲ願度、若此儀御許容無之ハ幕ハ是限ニて、就ては親藩も頓と立行不申と、再三歎願いたし居候事故、如何様共其辺は御周旋相出来可申欵と存申候、此

段申上越候、以上、

八月廿三日

高崎左太郎

大久保一藏殿

〔島津忠家氏所藏本にて校訂〕

八七 〔吉井友實重野安繹ヨリ大久保利通へ

書翰〕

以飛脚啓上仕候、秋冷相募候処、益以御清健御精務可被成御座、恐悦奉存候、私共無異在府仕候間、乍憚御休意可被下候、然は去ル七日御仕出御用封、廿一日長崎表より相届拜見仕候、越前・肥後・久留米諸藩奮起合従之大策可被行時勢成立候上は、御国事は大体無事ニて、

朝廷江十分 御尽力被遊度御主意奉拜聴、誠以為天下国家恐悦之極奉存候、就右当地形勢別紙を以申上候間、言上被成下度、尤猪太郎義は昨夕発足西上仕候、仔細是亦別紙申上置候通御座候、英夷掛合之一件は廿八日横濱応接之向ニて、成否相弁可申候間、其節迅速御報可申上候、

御国御戦争之義は余程御高名之取沙汰ニて、英夷も存外損傷ニ及、其上当処鎖港之幕議相洩申候欵、先当分

通にては急々 御国元江差越候向ニは相見へ不申候、
雖然慮情確知難成候ニ付、無申上迄義御座候得共、今
日ニも襲来之御用意は増御堅固之処奉仰希候、先は要
詞申上候間勿々如斯御座候、尚後鴻細縷可申上候、恐
惶謹言、

亥

八月廿四日

重野厚之丞

吉井中介

大久保一蔵様

侍史

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

八八〔堀平右衛門ヨリ喜入久高小松帯刀へ〕

書翰

吉井中助昨朝

(藤巻老中、備出松藩主
板倉様江罷出候処、)

箱館・長崎・横濱等都て鎖港之儀
は当時迎も難相成候付、横濱一港文先鎖港之御決定ニ
て、来ル廿八日於横濱応接御取掛之賦、尤英夷御国許
にて暴行之一条は一所にては不宜候間、引離候て致応
接賦ニ候、就ては彼夷之儀得手勝手而已申ものニ候間、
彼之非は差置、決て色々申立候て可有之候付、何れ其
方共ニも其場ニ出候て、現事之成行不申述候ては相成

間敷旨御咄之由、中助より承届候付、其通にて御達相
成候ハ、重野厚之丞并私共罷出筋、岩下佐次右衛門
其外折角吟味仕候事ニ候、左候て其筋ニ相成候ハ、
応接之幕役江前以差越、其節ニ到候て少しも不疑無滞
論判いたし候様、篤と打合置候様仕候方可然吟味仕候、
一高崎猪太郎儀昨日

一橋様江罷出候処、都て鎖港之儀は迎も難相成候付、
横濱文鎖港取掛、近々御同人様ニも御上京之賦ニ候、
其通ニて

朝廷之御都合相済め候得は、随分可相済丈之模様ニ候
哉、
(註)

叡慮為同致上京呉候様御頼ニ付、同人儀は英夷折り得
相付候為め被差越、応接等之儀も有之候旨申上候得共、
其儀は外々之者共可罷在候付、是非致上京呉候様、無
拠承知仕候付御請申上、即昨夜出立急ニて上京いたし
候、尤御国許江は上京之上、形行町便等を以委敷可申
上旨猪太郎より承届候、

右旁此段極御内用を以申上越候、以上、

但中助・厚之丞よりも、御側役江向形行可申上越段
も承届候、

亥

八月廿四日

堀 平右衛門

(替入久高)
攝津様
不松清庵
帯刀様

(鳥津忠承氏所蔵本にて校訂)

八九〔高崎五六外二名ヨリ大久保利通へ書翰〕

一鎖港之幕議手を尽し探索仕候処、三港又ハ横濱一港拒絶之両議相決兼、一昨廿二日澤勤七郎三港拒絶之大議論痛ク建白いたし、一橋君も一応被同其議、大樹公江御同相成候処、大樹公ニは此際一港丈之御定論ニテ、尤板倉最初より其説ニ候ニ付、終ニ一港之処ニ御決定相成候段、一橋君より承知仕候、

一横濱鎖港は御決議相成、廿八日より応接御取掛之賦御座候得共、右応接之向委曲此方より理解致し、彼之本国江掛合相成候様成立候筋被相同、即より兵争之場ニは到り申間鋪欸との一橋君御口氣ニ御座候、

一御国本之事件、何分決着相付候様一橋君江度々申上候処、是非左様無之ては不相叶義ニ候間、鎖港之応接と一緒相発し候様、御取計可被下との事御座候、尤英人は別段其一事ニ付応接相成、私共も其席ニ連り候ハ、証拠人ニも相成、可宜との事御座候間、其心組罷在申

候、

一応接之模様大体相弁り候ハ、早速一橋君御西上之賦、来月三日方と日限迄も御内定之御直咄ニ御座候、其期ニ至り候ハ、是非

三郎様御出京被遊 御尽力之処、偏ニ御倚頼之向奉承知候、おのつから越前・土佐・因州・筑前等之名賢候、不殘御会合之御存慮之由承知仕候、

一応接之総裁役、大久保豊後守江幕命相下ル向ニ御座候、就右御国元一件、細々此仁江示談いたし置候様手筈仕候、尤板倉も応接ニ被預候賦御座候間、彼方へは先達より細事言達仕置候、

一猪太郎事昨日一橋邸江罷出候処、此節横濱鎖港一件ニ付乍苦勞上 京致し、是迄幕議紛興

叡慮通三港拒絶之大議迎も奉行難叶、依之一先一港丈之処決定仕、近日応接取掛候筋御座候ニ付ては、

京師

思召如何様可被為有御座哉、右旁之処 (殿力) 前天_{下様}ニ附て奉伺、迅速御報可申上之旨蒙仰、即刻出立ニテ昨晩方当処発程仕候、就右ては先便申上候通、奈良原_等小五郎より 京師之一左右昼夜相待申候得共、于今一報無

之、昨今之風説ニハ、京師ニ於て何欵一變事到来いたし候杯、取々之事ニ相聞へ候間、右様子探索彼是をも相兼、猪太郎老入ハ西上仕候、尤爰許応接立合ニ就ては、佐土原両士并仲介なども罷居候ニ付、差支有之間錦との衆議御座候、

一此度御国許より被仰越候御書面之趣、越前・肥後・久留米諸藩奮興之形勢等、一橋君へ細々申上、今様之時勢相成候上は、関東鎖港応接尾成候^{マ、(頭註米)首尾致}御上京相成候ハ、各藩合従大議御建立之機会御座候半と申上候処、御同人ニも御同意之体御座候、

一板倉方此節ニ至り候ては、懇心ニ我藩を倚頼之体ニ御座候、昨年

三郎様を奉疑候事共、実以不明之至と前非を被謝、此上は

御合体にて御尽力被成下候様可申上旨、直ニ承知仕候、一佛夷を以長藩を撃、英夷を以我藩を襲候策を立候者は、水野和泉守・井上河内守魁首にて、其議ハ決て不宜段一橋君より遮て御差止相成候得共、後事は右兩人請合可致とて、請合状迄も差出し候時宜にて、一橋君ニも再度御辭職之御決心迄相成候段、極内御直話承知仕候、

箇様之状態を以幕議混雜致推察候様、深ク御歎息ニ御座候、

右之条々急報申上候、猶追々可申上候、以上、

亥

重野厚之丞

八月廿四日

吉井仲介

大久保一蔵様

高崎猪太郎

(島津忠家氏所蔵本にて校訂)

九〇〔吉井友實重野安禪ヨリ大久保利通へ

書翰〕

一(ヲカ)タイフル并アルムストロンク砲之義、英人近年之發明

にて、戦争ニはあまり相用候儀無之、此節相用候処、本

込にて船中取扱ニは至て弁利也、乍然数発打時ハ筋立

ニ痛を生之患あり、又玉打ための処ニ参り兼、諸方ニ

飛散候、又火薬不上品ときは筋ニがす入り、おのつか

ら筋くされ込付、右之数弊あるを以、已後ハ取止候哉

之説ニ御座候、此一段松平丹波守殿藩士大砲懸、西郷

彌門と申人横濱にて聞得候新聞ニ御座候、尤府下砲術

者流よりも右之説承得候、此二種之砲之事ハ(ト)亜米利

佛蘭西ニても色々説あつて、未不用由御座候、

一蘭人ハ四ポントより十六ポント迄之タイフル并アルム
ストロンク相用候由、英ニては八十ポント以上も相用
候由、

一此節当所川口ニおゐて諸侯等調文^{注カ}ニて、六角之大砲本
込唐金鑄製出来候由、是も筋入同断ニて六角之俣ネヂ
リ之故角々痛無之、カス付候義も無之、至極弁利宜敷
候由承得候、然出来上り打試等御座候ハ、実証可申上
候、右肥後七左衛門より申出候ニ付、御心得ニも相成
候半と言上仕候、尤同人ニも実物取扱候儀ニは無之、
風聞而已承得申出候儀ニて、虚実之処ハ追て確報可申

上との事ニ御座候、

〔弘安 寺島宗則形色〕
〔文庫〕

一松木・五代両人之義、先便ニて申上候通、横濱又は箱
館何方江欽罷在候義、今以相分り不申候、夷人ニも深
ク秘シ置候体被察候ニ付、此節鎖港応接之序幕役江相
頼、夷人江承合可申合御座候、

亥

八月廿四日

重野厚之丞

吉井中介

大久保一藏様

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

九一〔吉井友實ヨリ大久保利通へ書翰〕

九一ノ一
尚々高崎儀、一橋公御問合有之、昨日出立上京被申
候趣意ハ、重野より申上候間略之、

御両殿様益御機嫌克可被為入、恐悦御同慶奉存上候、
二ニ貴公御堅固御尽力之筈、目出度奉存候、爰元ニも
皆々相揃無異周旋御座候、乍憚御放念可被下候、

一横濱鎖港漸々として決儀相成、先来廿八日応接之賦ニ
て、内評大久保豊後守と相定居候由、昨日一橋公より内
々高崎窺得候、就てハ一緒ニ奪舟之曲被相糺賦候間、
其節ハ踏戰場候者、其場江可罷出、尤鎖港之応接各国
江申渡、別段英江曲直分解之応接有之候様子御座候、
依て堀・重野并下拙ニも出張候賦御座候、野拙考ニハ
先奪舟之曲を此方よりひどく責掛、何分相決候ハ、生
麥一条之儀を彼方より必申懸、迎も承引致間敷候間、
其時無是非御秘策通之居合相付候ハ、可宜相考、一同
江も議論相立、一決之事ニ御座候、しかし出懸不申て
ハ何共不相分候、

一 大久保豊後守は余程前後を踏へ、おとなしき人物之由
御座候間、其内遂熟論置候ハ、大ニ都合可宜との吟
味ニ御座候、兎角此節は能所ニて居合可相付と見込申
候間、御安心可被下候、

一鎖港談判も彼方本國江可申遣との所にて、則戰爭ニハ及間敷との御見留ニ候由、一板より高崎承候、依て一橋公是非御上京可被遊との御事、尤板倉類ニ御勸メ申上候由、九州表も余程振立申候由、実ニ東西一時二勃興、時節到来ニ御座候、今朝板倉九州表之事情内分申出置候合にて參申候得共、登城差掛明朝參る筈御座候、何分横濱表之一条相片付不申候てハ、手之下し様無御座、折角責立申事ニ御座候、来月初迄ニハ何分相分可申候間、早々馳下彼是御直話可申上候、然処只今承候得は、京師も何やら變事有之たる哉ニ御座候、

陽明家など御危急之事共被為在候ハ、私丈ハ上京可致重野申事ニ御座候間、模様次第ニハ其方江振向ケ候歎も難計、何分一日も早く名賢公方御出京、当時第一之御急務と奉存候、猶委細之義は重野より申上越候間、荒増形行如此御座候、恐惶謹言、

八月廿四日

吉井中助

大久保一藏様

九ノ二

別啓

幕吏之因循筆紙難尽、已ニ今朝共ハ板倉門江張紙有之、

其趣幕府之御為を不思、京師并一橋公ハ詔ひ不忠之所業ニ付、退職不致候ハ、我々共兼て手練之鉄炮にて打可申との張紙有之候、是にて御推計可被成候、しかし下は随分振居候者も御座候、

一先日高崎板倉江出候節、薩州之義ハ去年三郎殿出府之時分迄ハ大ニ疑居、今更後悔千万ニ候、世上之流言且色々書付等も有之疑居候処、其後追々御尽力之御趣意承、実ニ不堪感服、只今ニ相成候てハ別て御なつかしく存居候、是非此節ハ御出京御尽力不被下候てハ不相濟、如何之御様子歎、御出可相成歎との事にて御座候由、此儀御因元江申上可呉との趣被申候由御座候間、高崎ニハ上京いたし候間、私より為御心得申上候、

一肥前老公

三郎様とならば、御合休御尽力可被成との御趣意御座候由、何分此人ハ英物ニ相違無御座候間、此御方より御打合ニ相成度ものニ御座候、〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

九二〔近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰〕

尚々俄ニ冷氣ニ相成候、御道中御保護專一ニ存候也、

昨廿四日到着候御答書之趣巨細承候、秋冷相催候処弥

御勇健珍重ニ存候、抑御申越之条々 関白へ申上置候、
委細ハ 関白御書翰ニ可在之、仍忠房よりハ別段不申
入候、何も不遠御上洛待入存候事、

八月廿五日

嶋津三郎とのへ

忠房

内密々

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

九三 〔近衛忠房忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

尚以參 朝掛大乱書御推覧可給候、猪太郎より委細
御聞可給候也、

寒冷候弥御勇猛珍重ニ存候、誠ニ方今
帝都形勢不容易次第、深此末之処被廻

叡慮、御心配ニ被為在候次第、就てハ当方抔甚心配
々々之至ニ候、昨烏其許被召候被 仰出も在之候ニ付
てハ、旁半時毛猶予無之急々発途在之、上京之儀深々
御待被遊候御事、当方抔別てくく御待申入候、遅
滞無早々御上京待入存候也、

八月廿九日認

〔山内書信〕〔編纂者正〕

尚以 容堂 閑叟ニも急速上京被 仰出候事ニ候也、

極内密啓 忠熙

嶋津三郎殿

忠房

御下

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

九四 〔近衛忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

尚以大ニ取紛居、吳々不束之書方、御推覧分て御頼
申入度候也、

残暑難凌候、弥御勇健珍賀候、抑別紙極秘ニ入覧候、
何卒深御周旋之程御頼申入度存候、忠熙此頃不快、代
筆不束文言共御推覧可給候也、

八月

忠熙

嶋津三郎殿

〔島津忠承氏蔵〕

九五 〔内田政風ヨリ大久保利通へ書翰〕

和州高取江浪人共押寄及戰爭候節之届書写、并浪人共
役割名前書、別紙式通為御見合差上申候間、御受取可
被成候、以上、

八月廿九日

内田仲之助

大久保一藏殿

総裁

藤本津之助(真金、備前)

松本謙三郎(兼堂、刈谷藩士)

土州

吉村寅太郎(重郷)

側用人久留米

池田蔵太

監察

筑前

吉田蔵太(重民、土州藩士)

那須真吾

久留米

酒井傳次郎(重感)

銀奉行

磯崎豊

小荷駄奉行

水野谷之助

武器取調方

合図掛り

三州刈屋

宍戸彌四郎(昌明)

森下儀之助(茂忠、土佐)

兵糧方

林兵四郎

嶋村清三郎

勘定方

牧岡鳩齋

小川佐吉(師久、久留米藩士)

記録方

伴林六郎(伴林光平周永、河内)

執筆方

澁谷伊與蔵(美行、下館藩士)

尾崎濤五郎(作)

石川(貞幹、因州藩士)

小荷駄方

前田繁馬

安藤嘉助
伊藤三彌

同下役

杜本傳兵衛

木村 棹馬

山口 松藏

兵糧方下役

福浦 元吉

槍一番組長

土州

上田 宗兒(則正)

土居 佐之助

久留米

荒卷 羊三郎(真刃)

伍長

原田 龜次郎(法橋中心)

中垣 謙太郎(天)

和田 登一

久留米

鶴田 陶司(道徳)

江澤 雅八

土州

森下 幾馬

市川 清一郎(長)

永野 一郎(寛道 河内)

保母 健(石田英吉)

伊吹 周吾

熊本

竹下 熊雄

水郡 栄太郎(正文、土州藩士)

嶋村 省吾(正文、土州藩士)

砲老番組長

半田 門吉(成久、久留米藩士)

田所 騰三郎(重道、土州藩士)

田中 彌三兵衛(俊)

田中 捕之助

葛目 清間

澤村 幸吉

嶋村 問

安藤 斧吉

鍋島 米之助

磯崎 寛

兼役

小川 佐吉

長野 一郎

兼役

土居佐之助

(島津忠承氏所屬本にて校訂)

九五ノ三

昨廿六日曉七ツ時頃、五條表致屯居候浪士共、凡千計

押掛、貝・太鼓足並ニテ、当城下土佐町西之方入口三

四丁前迄押懸候間、手配仕、西口ヨリ老町余人數押出、

向ヨリ大砲并小筒打懸候ニ付、無余儀及戰爭候処左之

通、

一雜兵首

七ツ

一同 生捕

凡五拾人

一木筒

六挺

但玉目六封度ヨリ十五封度迄

一小筒

三拾六挺

但玉目凡三四匁

一陣太鼓

老ツ

一槍

九筋

一刀

式拾五本

一弓

式張

一脇指

三拾九本

一兜

老ツ

一具足

老領

一陣笠

五拾六

一玉葉簞笥

式荷

一高張提灯

式本

一箱提灯

老

一法皮

三枚

右之通ニ御座候、味方ニテ鉄砲薄手式人、死人老人モ無御座候、此段不取敢先御届申上候、以上、

(家侯、高取藩主)
植村駿河守使者

八月廿七日

村田文四郎

九六〔林休左衛門ヨリ内田政風へ書翰〕

三條殿初欠落ノ公卿又ハ浪人等如何ノ模様モ難計、細々聞合何分可申上致承知、長州初当所へハ下坂無之、山崎街道通行西ノ宮ヨリ乗船ノ模様ニテ、於当地小早船段々借入差廻段相聞得候付、則慥成者兩人為聞合方、去ル廿日ヨリ西ノ宮・兵庫等江商人体ニテ差出候処、

左ノ通申出候、

一去ル廿日長州人数京都ヨリ山崎街道通行、西ノ宮江出、公卿三條殿・四條殿ノ由ニテ、外ニ一人ハ名前不相分、

イツレモ重立候人ト相見得、乘馬ニテ候由、附添候者共イツレモ解髮白鉢巻着込等ノ由、

一毛利讚岐守凡人数二百三十人計、吉川監物人数三百人〔元純、清水藩主〕計、長州家老益田彈正初其外藩中凡六百人計、惣人数

凡千百人計、何モ鉢巻イタシ、白装束ニテ、背ニ姓名ヲ記シ、銘々鎗又ハ鉄砲携居候故、所ノ者共驚惑何事

歎ト相尋候処、無別義万一京都ヨリ追手差越事モ難計候故ニト相答候由、西ノ宮参着ハ廿日暮前着、都テ止

宿ノ賦候処、前日十九日作州津山侯泊ニテ、廿日ニ出立ノ賦候得共、京都急変到来ノ段相聞候、滞在相成折

柄、土州女中泊リニ付、止宿為差支由候得共、公卿并長藩文止宿相成、俄ニ毛利・吉川等ノ人数ハ不残踏越、

兵庫江同夜四ツ過比着、止宿ノ由、一西ノ宮止宿人数ハ曉七ツ時出立ニテ、兵庫五ツ半時分

着ノ由、一公卿并警固人数六十八人兵庫旅宿猿込町豊島屋嘉兵衛

所ノ由、右下向ニ付テハ、日向船并小早船都合八十余

艘借入相成、廿一日夕方毛利・吉川ノ藩中致乗船候由、

公卿其外警固ノ人数同夜四ツ時分乗船相成、翌廿二日昼九ツ時分追々兵庫出帆相成候由、

一長州家老益田彈正事、跡押トシテ昼八ツ時過比乗船イ
タシ候由、惣藩中江一人ニ付仕舞料金一両ツ、僕江
モ一人ニ付金二步ツ、於兵庫渡方相成候由、

一津山侯廿二日五ツ時分、西ノ宮出立相成上京ノ由、

一廿日夜四ツ時分、兵庫小豆屋助右衛門所江、吉川監物
側廻ノ者共二十一人、供方ノ者共九人、都合上下三十

人止宿為致由候処、何レモ為何咄モ不致ニ付、何事ニ
テ罷下モ色地不相分候間、供方ノ者共江京都大變為有

之哉ニ承候、御下向ノ儀ハ何故ニ候ヤ、亭主共ヨリ相
尋候処、京都騒動ニ付長州受持ノ場所江出張相成候処、

先陣ニ薩州様御人数御出張相成居、少人数ニテ大砲相
備差向、此方人数ハ多人数ニ候得共、右次第殊ニ大困

ノ事ニモ候間、手向不致其俛々引取相成罷下段為申
トノ儀、小豆屋ノ者トモ為相咄由、

一小豆屋ノ儀、御国許本陣ノ儀ハ全不氣付由、然処出立
掛御紋付飾ノ旗ヲ目ニ懸、爰ハ薩州本陣ニテハ無之哉、

藩中ドモヨリ相尋候由、船問屋ニテ候段相答候由、

一公卿衆初警固ノ者トモ通行掛、楠公石塔參詣又ハ生田ノ森江參詣為有之由、

右ノ通承得候段申出候、此段早々為御知申上候也、

八月廿三日夜

林 休左衛門

内田仲之助殿

九七 〔高崎正風ヨリ大久保利通へ書翰〕

一昨廿七日三島彌兵衛上京、細詳御国許形勢承知、何は置て

三郎公御発駕弥来月十五六日ニ御決定相成候由、何共天下之大幸無此上御同慶奉存候、早速昨夜三島同伴陽明 御両殿様江拜謁、委曲及言上候処、無限御満足ニて御座候、就ては過日も申上候通、頃日之爰許形勢ニ付ては、其辺所之事ニては有之間敷欵とも奉存候已、何分一旦御見合相成候様と之

勅命も被為蒙候御事も有之候、且此機会ニ乗し候様而已有之候ては、益公平ニ

勅諭を被奉、御上京有之候方、諸藩居合ニ付ても可然哉と吟味仕、今朝 陽明家御父子様 中川宮様參殿、右之趣意得と及歎願候処、本より

叡慮は不及申、我々ニ至ては山々右之都合いたし度存居候得共、此勢ニ乗し、我得意之人々を真先ニ引出候様被引受候ては、居合も如何ニ付、上京相決候と幸ニ存、其沙汰ニ不及候得共、申出趣無趣意ニ候間、早速今日吟味可致との御沙汰ニ候処、夕剋御呼出ニて御召之

勅諭相発、何共難有仕合奉存候、就ては申も迂論ニ候得共、一日も早目ニ御発足之御都合相成候様、精々奉伏願候、委細形勢ハ内田より申上候通、猶亦猪太郎等より細詳御聞取可給候、以上、

八月廿九日

高崎左太郎

大久保一藏殿

〔島津忠家氏所藏本にて校訂〕

九八 〔内田政風ヨリ大久保利通へ書翰〕

猪々御家老座首尾相成候書付も可有之候間、御差廻可被下候、

去廿四日極急飛差上候後、格別相替儀無御座、追々朝議も御宜向被成、鷹司様御辞表御差出後御參 内不被為在候、いまた被免は無御座候、

一 中川宮様一昨廿七日於

禁中 御元服、彈正尹被為蒙 仰候由承知仕候、

一 御守衛兵士之儀、別紙之通伊勢・土州江結、會津侯江

一 昨廿七日差出申候、會津も同意ニ候得共、主人御職
掌ニ付連名不仕候、

一 和州江乱入之大将元中山侍従以下高取城ニ責詰候処、

植村様方より砲発ニ敗軍七人討取、生捕五十人計有之、
兵器を奪取、残党高野山江引取候風聞御座候、賊方残
兵何組と申儀相分不申候、紀州藤堂江討手被仰付差越
候得共、墓々敷評判も承不申候、

一 尾州前様一昨廿七日名護屋御発途之由御座候、当主ハ
御隠居御願之聞得承申候、

一 越前侯出京御差留、家士いづれも恐愕悶心仕居候、彼
是周旋も承候得共、何分いまた御慎解不 仰出、其上
異国交易之御沙汰專ニて、京師至て人氣不宜、

朝敵春嶽と呼捨ニ唱候、既ニ去十八日之騒會ニは、坂
本ニ陣を取、叡山より京師江責下候なと、あらぬ雑
説ニて人氣大ニ動揺、夫等之処より畢竟ハ更ニ御差留
為相成儀軟と申事ニ御座候、

一 先日長州江被下候

勅書、諸家江御布告相成候処、其後相替書替相成申候

間、写差上申候間、帯刀様江も御差出可被下候、

一 末筆乍恐

三郎様表向 御用召被 仰出候上は、別て 御早目御
発輿被遊被下候処、一同実ニ指を屈奉待上候付、何卒
々々一日も 御早目之処與々も御願申上候、 幕蒸氣
船之儀も最早町飛脚着、岩下・吉井等彼是取計可申と
奉存候間、不遠何分之都合も可申参候付、其節ハ早
速形行可申上候、右之通荒増存出候分形行申上候、乱
筆御高免可被下候、不遠拝顔万縷可奉得貴意、頓首九
拜、

八月廿九日

内田仲之助

大久保一蔵様

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

九九 〔内田政風ヨリ大久保利通へ書翰〕

金四拾兩

高崎猪太郎

右は江戸より昨廿八日着候処、折柄

三郎様 御用 召被 仰出、幸江戸表事情之趣も申上
候段承候間、直ニ右江

勅書携奉差下申候、尤当分下之關辺之儀ハ、到て掛念

之趣も御座候間、鶴崎等江渡海候筋ニ申渡、本行之通相渡申候間、跡引統之儀ハ追て可申上候間、左様御承知被玉被下度、此旨御届旁申上候、已上、

京都

八月廿九日

内田仲之助

大久保一蔵殿

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一〇〇〔内田政風ヨリ大久保利通へ書翰〕

谷村小吉儀去廿三日着伏見、御飯屋二本松新御屋敷江御引移之儀相達申候間、則吉田清十郎・村田源右衛門江御作事奉行掛寄被仰付候旨申渡、翌廿四日より相分り伏見出張、則より毀方ニ相成、牛車にて石居等運送罷成、精々取急キ御造立之手筈ニ御座候付、大頭迄御届旁申上候間、左様御聞置可被下候、此段申上候、已上、

京都

八月廿九日

内田仲之助

大久保一蔵殿

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一〇一〔宛名差出名不明書翰〕

一先達テ大砲買求方ノ儀御相談申置候処、御聞及モ候半、此度英国軍艦薩州江渡来、無抛及一戦候時宜成立候ニ付テハ、猶更大砲当用ノ時節相成候間、速ニ御調達給候様、偏ニ御頼申入候事、

一英人ト軍争ノ発端ハ疾ク御伝聞モ為有之筈、元来神奈川表ニ於テ英国商人ヲ致殺害候ヨリ事起リ、此節英船ミニストルヨリ書翰ヲ差出シ、書面ノ趣并応接ノ事体全ク押付ニテ、無礼驕傲難聞捨事共種々有之候得共、

於此方テハ飽マデ致堪忍、事穩便ニ取謀度応接不首尾内、兵器モ不貯脇方ヘ為逃置候此方ノ蒸気船三艘ヲ横奪イタシ、既ニ出帆ノ体見請候ニ付、不得已砲発及戦争候時宜ニ候、就テハ薩国上下一統実以憤激ノ至罷在候、情合能々御汲取給度存候事、

一就右又々英国ヨリ軍艦差向候ハ必然ニ候間、精力ノ限り致防戦度覚悟ノ前ニ候得共、左候テハ互ニ及損傷、実ニコノマザル義ニテ、其上此節ノ義ハ双方不熟談ノ処ヨリ応接ノ央ニ事起リ、近頃残多次第候間、此上ハ貴国ノ賢慮ヲ借り事ノ始末ヲ糺シ、曲直是非ヲ明白ニシ、世界各国ノ公論ヲ以テ英人ヲ納得為致、互ニ戦争ヲ相止メ候様御周旋ノ術ハ有之間敷哉、此等ノ処篤ト

御汲受給、可然様御断判給度儀、偏ニ御頼申入候事、

一 貴国ハ日本ト境界ヲ接シ、不致親近候テ不叶土地柄ニ
モ候間、向後御互ニ隣好ヲ結ヒ永々致親睦度、此方所
願ニ候事、

一 薩国ノ義、人氣ハ十分勇銳ニ候得共、何分器械未全備
セス、差当リ困入義候間、貴国ト親好ヲ結ヒ候上ハ、
大砲ハ勿論、船艦迄モ不事欠様追々預御世話候ハ、
大幸不過之事、

一 前文ノ箇条御承引於有之テハ、親睦ノタメ琉球諸島ノ
間ニ於テ貴国ト交易場相開キ、条約取換シ置、永年不
相変様被致度トノ主命ヲ受、我々共当地迄差越候間、
此旨貴国上官ノ方々へ御伝達相成、何分御返詞承度候、
左候テ御承引ノ向候ハ、則貴国船艦薩州江被差廻度、
我々共モ於彼地待合セ、御廻船ノ上国元重役ノ者共へ
御対面ニテ、諸事引結ヒ相成候様有之度候間、此等ノ
趣細々上官ノ方江御演説給度、御頼申入候事、

右ノ条々此節極内密御相談申入候義、屹ト他ニ不洩
様御含ミ給、何分ノ御報待入申候、以上、

〔表紙〕

忠義公史料

文久三年 自九月
至十月

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

一〇二 〔内田政風ヨリ小松帯刀へ書翰〕

書附一通

但三條御堅場内旅込屋にて、紀州脱藩野間休左衛門

同藩より召捕相成候一条御届之儀ニ付、

〔客保、京都守護職、会津藩主〕
松平肥後守様

取次

〔安任、会津藩士〕
廣澤富次郎

右江今朝差越右富次郎江面会、委細之形行得と演舌之上差出候処、肥後守様江遂披露、町御奉行衆江相廻ニ

て可有之旨申聞候間、相応申述罷帰申候、右之通相動

申候間、別紙相添此段御届申上候、以上、

亥九月十四日

〔政恩〕
内田仲之助

〔清康〕
帯刀様

別紙

三條中嶋町

宿屋職

萬屋甚兵衛

同町

町役

安田文蔵

町用人

大塚屋藤助

同町

宿屋職年番

惣代

刀屋忠次郎

右は夜前八ツ時比紀州藩士伊達五郎入来、右萬屋甚兵衛方江同藩脱士野間休左衛門、外ニ水藩柴田源太郎・中崎長雄・兜左右助・黒澤千次郎、長州藩名前不相知、

其外同断都合拾三人致止宿居、不容易企いたし候趣ニ相聞得候間、休左衛門儀は主用之趣有之候付、今晚人数差出召捕致候、乍併弊藩堅場所内之儀ニ付、一応及掛合候、尤同宿之者万一手向等いたし候ハ、無余儀取押可申時機も可有之、万々一手ニ余候儀も有之候ハ、心添致呉候様承候付、委細致承知候、廻場内之儀故、傍観いたし居候儀も於情義如何ニ付、其通心得可罷在旨相答、堅場詰合之者江其段申渡置候処、今晚紀州人数差越、右休左衛門儀無異儀取押連帰申候間、右宿屋甚兵衛儀、弊藩堅扣場江招呼、宿屋職之儀ニ付ては、追々被仰渡趣有之、殊ニ近比浮浪士等、御取締向も、嚴重被仰渡候儀ニ付ては職分相守、聊取違之儀は無之筈候処、

御膝本ニ居住乍致、甚心得違之段細々申聞候処、一々尤之儀ニて一言之申分も無之、恐入候旨申出候、右ニ付ては同職中以來御取締之一助ニも相成、且は諸方之宿屋江響合、第一心得ニ可相成と存繩掛置、町役安田文蔵・町用人大塚屋藤助方江引渡、逃走等不致様可取計旨嚴重申渡置候間、御沙汰次第御取計被下候様いたし度、且年番惣代刀屋忠次郎儀 御法嚴重相守、下職

之者心得違無之様折々可申聞當務ニ可有之候処、甚不束之申分等いたし候付、是以甚兵衛同様御呼出、夫々輕重を以御法様之御取扱被仰付置候ハ、以來一同心得違之儀も薄罷成、御取締可相成哉と存候旨、堅場所江出張居候者共より申出候、且亦伊達五郎より申聞候、右人数不容易企之儀は、同人江委細御尋相成候ハ、分明可仕儀と奉存、旁此段私より形行御届申上候、以上、

御名内

九月十四日

内田仲之助

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

一〇三〔内田政風ヨリ小松帯刀へ書翰〕

西町御奉行

瀧川播磨守殿

右より昨廿日八半時過比と申呼出ニ付、播磨守殿御役宅江私被差出罷出候処、御白砂於縁仁禮源之丞、是迄御用有之被留置候得共、今日より其方江預返候間、左様相心得候旨播磨守殿より御達ニて、与力三浦錦次郎より源之丞引渡候付、承知致印形候処、於使者之間右同人所持道具相渡候間相受取、源之丞儀は駕籠江召乘列帰候、右之通相動候付、此段形行申出候、以上、

亥

九月廿一日

御留守居附役寄

伊勢勤兵衛

内田仲之助殿

右之通相勤申出候間、此段御届申上候、以上、

京都

九月廿一日

内田仲之助

帯刀様

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

一〇四 〔内田政風ヨリ小松帯刀へ書翰〕

一〇四ノ一 去月十八日依非常形勢、守衛尽力之儀ニ付

天賜金、(池田慶徳、因州藩主)松平相摸守様衆より別紙端書之通御渡相成候

付、於爰許夫々配分頂戴仕可申候、此段御届申上候、以上、

京都

九月廿三日

内田仲之助

帯刀様

此御方人数

一〇四ノ二 松平相摸守様衆より被相渡候書付之写

覚

一百五拾人

金百七拾七両壹歩

錢貳百拾七文

惣人数

合八千四百六拾壹人

壹人

壹兩貳朱

永五拾六文八分九厘三毛余

金壹兩ニ付

六貫四百文

一〇四ノ三 百七拾七両壹歩ト

錢貳百拾七文

錢ニシテ

千百三拾四貫六百拾七文

但

兩ニ付六貫四百文替

百五拾人

内

士分百貳拾四人

足輕式拾六人

老人ニ付

七貫五百六拾壹文ツ、

金ニシテ

老兩式朱ト

三百六拾壹文

右之通相成候間、銘々配分頂戴仕候、以上、

九月廿三日

内田仲之助

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一〇五〔高崎正風ヨリ中山實善大久保利通へ〕

書翰〔

〔通冊〕

三島彌兵衛便より申上越候通、此節戦争之次第詳悉伝

〔野宮定功〕

奏野々宮卿江申上置候得共、第一

天聴ニ奉達度は、諸士之勇勳絶倫之処ニ候、然共此儀

は誇ケ間敷相聞得難申上訳ニて御座候間、前殿下江

細曲申上、御都合を以、奏聞被成下様奉願置候処、過

日被、召致参殿候処、御沙汰ニ、晦日會津馬揃

観覧之折

玉座ニ侍候は、我と議奏ニて候処、央ニ議奏手水ニ立

候透を以、其方より承候次第委細

奏聞いたし候処、

御感悦之

叙意

龍顔ニ相頭、頃日之配慮ニ鬱悵送日候処、此一左右不

測も相聞得、余リ之嬉しさニ祝盃を傾候処、飲過候て

両日少シ不気色候、今日亦々委敷承

朕意、実ニ不堪怡悦候間、此段可申聞置との

勅諭ニ候由、今ニ不始事とは乍申、何共難述言語、御

冥加御互ニ難有仕合ニ候、

今上天皇 御諱統仁 春秋三十三

親王 同睦仁 十二

准三后 同夙子 三十一

仁孝天皇皇女

敏宮淑子内親王 三十六

同

和宮 十八

御存も可有之候得共申上越置候、以上、

高崎

中山君

大久保君

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一〇六〔内田政風ヨリ小松帶刀へ書翰〕

一金千疋ツ、

隊長

嶋津 弾正

村田源右衛門

一同八百疋ツ、

伍長

有馬 彌兵衛

有馬 正右衛門

篠原伊藤次

宇都 良伯

是 枝 仲藏

鮫島新兵衛

石塚為兵衛

新穂仁左衛門

早水 正次郎

本田権右衛門

長野 九八郎

柚木崎六郎

一同六百疋ツ、

戦兵

是 枝 吉藏

面 高利兵衛

有 馬雄之丞

井尻甚五左衛門

佐 藤 休藏

馬 渡隆次郎

有馬量左衛門

有 馬 文藏

山 下 矢之助

宇 都 正太郎

重 信 良右衛門

黒川萬左衛門

安 楽 才右衛門

木 佐 貫十五郎

上 原 直助

村 田 十左衛門

松 崎 十次郎

實 吉 助次郎

二見源兵衛
海老原龍右衛門
田中郷右衛門
春田八右衛門
石神満右衛門
西平一
松尾宗左衛門
田尻仲左衛門
長野四郎太
徳丸字助
二宮仁壯太
房村雲章
阿多静儼
山口平右衛門
楠元六之丞
宮路正兵衛
江口善次郎
池田周助
上野武左衛門
古城壯太

松下清右衛門
是枝次右衛門
吉峯壯右衛門
春成仲左衛門
鮫島加次右衛門
田實平右衛門
指宿仲右衛門
小田原武左衛門
岩元作左衛門
本田卯右衛門

御警衛士御用所

姉小路駿河守

右は今廿六日御用之儀有之候間、可罷出旨相達有之候間、私罷出候処、右駿河守出会申渡候は、為御守衛上京被仰付長々滞京、且去月十八日之一挙二付、出精相勤候間被下之候付、請取印形可致旨申聞候間、致印形置候、左候て為御礼、伝奏飛鳥井中納言様(雅典)・野宮宰相(定切)中將様江廻勤可致旨申聞候間、嶋津彈正江申渡同人廻勤相勤申候、且亦頂戴被仰付候金子之儀は、村田源右衛門江相渡、銘々分配可有之旨相達置申候間、此段御

届申上候、以上、

京都

亥

九月廿六日

内田仲之助

帯刀様

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一〇七〔内田政風ヨリ小松帯刀へ書翰〕

書附巻通

絵図面巻枚相添

但

二本松御屋敷御門外江足輕共屯所取立候御届

京町御奉行

永井主水正殿〔尚志〕

取次与力

田中馬一郎

右書付私名前にて今日御届罷出候処、右馬一郎出会にて書付差出申候処、委敷相尋候上、何も御子細は無之様ニ相見得候付、多分被承置候事と存候得共、何分只今主水正留主中ニ御座候間、私より御返答ハ難申入候間、尚跡より御答可被申入候間、勝手ニ引取候様承罷届申候、

右之通相勤申候間、此段申出候、

九月廿三日

横田鹿一郎

内田仲之助殿

右之通相勤申出趣承届申候間、此段御届申上候、以上、

亥

九月廿六日

内田仲之助

帯刀様

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一〇八〔内田政風ヨリ小松帯刀へ書翰〕

今熊野村

百姓

〔朱〕

「橋口李左衛門長男故ありて脱藩」伴右衛門

右は被 仰渡置候通、伏見辺より山崎街道筋聞合方之儀申付、別紙之通印紙相渡置申候間、此段御届申上候、以上、

京都

九月廿七日

内田仲之助

帯刀様

〔別紙〕



〔直径二五センチ〕

〔朱書なし、島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一〇九 〔近衛忠房忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

尚以兩日中御上京と待入存候事、

秋寒増加候処、弥御勇猛珍重ニ存候、此度ハ小松帶刀

上京ニテ御伝言之趣、委細ニ忝承申候、〔高橋五六〕続て猪太郎・

健吉等上京何モ承候、近日御上京ト深々待入候、長岡

澄之助・良之助等ニも上京ニ相成候事、其許ニも過日

來御上京之程御待申入候所、今日と相成深々忝存候、

何モ高崎〔正恩〕佐太郎へ当地之事情申含置候、御尋問之様存

候、藤井良藏〔簡方〕ニも久々ニテ上京面会致し候事ニ候、何

モく佐太郎より事情御聞取ニテ御賢察可給候也、

九月廿八日

忠熙

嶋津三郎殿〔内々〕

忠房

御下

〔外針〕亥十月朔日西之宮駅ニテ拝読ス、高崎左太郎持參、
〔島津忠房氏所藏本にて校訂〕

一一〇 〔正親町三條實愛ヨリ島津久光へ書翰〕

印

島津三郎殿

三條大納言

追々寒冷相加候処、弥御安米珍重不斜存候、先頃ハ無御滞御帰着之旨、恭賀御同慶存候、御在京中段々御幹旋御輔佐被成上 御満足、於拙子共モ大幸存候、猶又其後御献米等重畳御感悦之事ニ御座候、扱其後之次第御家頼中ヨリ巨細御承知之通之義ニテ、於御家臣衆周還尽力是又 御感於一同モ忝存候、抑当地形勢日々変化ニ付テハ、品々深被惱 宸衷候上、此頃徳川刑部卿上京之趣ニ付テハ、色々被尋下度 思食候儀共多端被為有、屹ト御輔弼有之候様被遊度候ニ付、早々御上洛有之、御尽力之様被 頼思食候、其後関白殿江御沙汰有之、御達ニ相成候得トモ、猶又於下官共モ色々御案痛申上、何卒被安 宸襟候様仕度存念、且ハ何様ニモ致シ、此御使着次第一日モ早ク御上京可有之様、心配可仕段別段御内沙汰モ拜承仕候ニ付、以書状申入候、何分急遽御出京有之御羽翼被成上、被安 叡念候様仕度存候、御帰国後未幾幾程忽御再出事、御都合モ如何可有御座哉、御察申入候儀モ有之候得トモ、何分治乱之境、成敗之間、実ニ無此上一大事之御場合ト心配仕候ニ付、万事不相省申入候、何卒厚御照察被下度、書余ハ藤井氏ヨリ御聞取可給候、仍早々如此候也、恐惶

謹言、

三條大納言

實愛

齋

九月三十日

嶋津三郎殿

再陳、返々本文之趣御汲察給、神速御発途之程偏ニ所仰候、追々寒光モ可相加、折角御保衛之様ト奉存候也、

一一一 道嶋五郎兵衛墓碑 (道島家記鈔戊亥年モ合

セ記ス)

(第二卷番号三四と同文により削除)

一二二 口上手控

一二二ノ一 (正邦)

亡道島五郎兵衛伏見ノ一挙蒙抽撰ノ任候儀、於武門冥加至極、無此上仕合ノ至御座候得共、何分ニモ其身一人遂戦死候儀、家内ノ者共愁歎難尽筆弁、実ニ不被忍次第二御座候、乍然

公深ク是ヲ哀憐シ、洛陽東福寺ノ内即宗院ニ厚葬、殊ニ賜祿テ世々令為祭祀事、思慮ノ厚一統難有奉存候、此上ハ金石ニ誌シ、後世永ク其功績ヲ伝ム事ヲ、親源

五郎始至親族希候トイヘトモ、何事モ其子細ヲ不弁候得ハ、漫ニ是ヲ誌ス事不能、又其俛墓モ不誌シテ、常死ト共ニ墳ヲ同フセハ、後世ニ至リ其功績草苔ト共ニ朽果候半事、遺憾ノ至奉存候間、願クハ追福菩提被為、即宗院中ニ墓誌ヲ建ム事ヲ偏ニ奉願候、故ニ不得止事、乍恐当ノ形勢ト世ノ噂ヲ承聞仕候儀ヲ奉推量、漫ニ相認申候付

御高覽被下、御差図被成下候ハ、如何様共書改可差上候間、何卒御免許被成下候様、御吹挙幾重ニモ奉願候、以上、

(文久三年)

戊九月

亡道島五郎兵衛親族

東郷伊八郎

中島源左衛門

一二二ノ二

(實)

右ニ付、奈良原喜八郎ハ五郎兵衛別テ懇意ニ付、ケ様ノ儀ヲヲモヒ立候事、相談ナクテモ不本意トゾシ、戊九月十七日、伊八郎ヲ以テ奈良原江遣候ヘハ、折節二丸御方泊番ノ儀ニ付、此時喜八郎御小姓ナリ明後日小松帯刀殿出立ノ段承リ、急速ノ儀ニ付抑テ二丸ヘ差越、喜八郎ヘ面談イタシ及相談候処、何モ存寄無之、以初刀討魁首、

繼テ斃一人トノ文言抔丁度此通也ト申事ニテ、何分我々共ヨリコソ取計モ可致候ヘトモ、小松家ニ被仰込候ハ、尚又拙者共ヨリモ、急埒イタシ候様可致トノ事ニ付、中島源左衛門殿ト伊八郎同道ニテ、小松方へ被差越候得共、用達ノ鎌田十郎殿帰宅ノ由ニテ、直様鎌田氏へ差越細々申込候処、別テ能受合ニテ、明早朝可申込トノ事ニテ候、左候テ小松家十九日立出ニテ、猶更當日伊八郎ヨリ喜八郎へ承合候処、帯刀殿ヨリ大久保市藏へ細々申上置候段承知イタシ候間、九月廿三日中島源左衛門・伊八郎同道ニテ、大久保氏へ差越相頼候処、小松家ヨリ委曲承居候間、御都合相待居候得共、

三郎様別テ御繁多ニテ、夜分迄モ御用御取込候筋ニ被相頼候付、四五日中ニハ、何分相頼可申トノ事ニ有之由、返答承届候事、
戊十月三日、二丸御用部屋ヨリ御用有之罷出候処、書役税所喜三左衛門ヨリ得ト被遊 御覽、他藩ノ者モ可(伊地知貞重旧名)見事ニ付、実意不相分様ニ相見得候間、堀小太郎事能々存知、其上文筆共ニ相心得候者ニ付、彼者へ相頼候様御張紙迄モ相付居候得共、小太郎殿相頼候様御沙汰(被為脱力)ニテ在候儀ニ付、則日七ツ時分伊八郎堀氏へ差越相頼

候事、尤堀事当分常盤ノ岸山彦一郎方へ同居イタシ居候事、同十五日小太郎方取シラへ相済候間、則清書イタシ、十七日伊八郎ヨリ税所へ差出候処、直ニ御前へ差上相成候由、竹下猪之丞ヨリ源左衛門へ十八日朝出勤中途ニテ嘶候ナリ、同十九日マタ御用部屋ヨリ御用有之罷出候処、某々ヲシテト姓名ノ八人ノ名ヲシルシ、制討ノ所ヲ討伐ト相直候様、

三郎様御直ニ被仰渡候由ニテ相下候間、当日直ニ堀氏へ推参イタシ、猶又相頼候事、同廿三日清書相成候間、廿四日伊八郎ヨリ税所へ差出候処又不宜、此節ハ二丸ヨリ堀方へ直下リニテ、取込ニ相成候由ニテ、廿六日ニ此通ニテ清書イタシ候様ノ事ニテ、廿七日朝又木方へ伊八郎ヨリ推参イタシ候事、廿八日清書相成候付、同廿九日伊八郎ヨリ又々税所へ差出候事、

一三三〔近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰〕

十月八日夜

忠房

内々
嶋津三郎殿
御下

尚以乱書御推覽可給候也、

寒冷ニ候、弥御勇健珍重、過日ハ先々御上京ニて深く
安心々々之事ニ候、併御不快御事如何之事と御案事申
入候、扱尾張前大納言明日巳刻頃被來候間、何卒小松
帶刀巳刻前ニ愚亭へ入來候様御申付御頼申入候、実ハ
前大納言事帶刀ニ面会被致度旨ニて、愚亭へ招候様頼
ミニ候間、態々御頼申入候間、何卒巳刻前ニ入來候様
御申付御頼申入候、仍右要用而已、取紛乱書荒々如此
候也、

十月八日戌刻

緘

嶋津三郎殿

内用

御下乱書御推覽

忠房

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

一四 〔大原重徳ヨリ島津久光へ書翰〕

今朝ハ嚴霜寒威強候、愈御堅固珍重此事ニ候、陳ハ此
度御登京御道中御無事、殊被
召候御次第も御座候由、はやくと御上着、可為御安
堵珍喜万々候、其砌聊表寸志候処、御挨拶并為御土産
品々被贈下痛入、芳意之程千々々辱厚御礼申入候、

殊ニ太平布ハ珍敷名も面白候、天下渴望いたし候儀、全
太平ハ、貴国之周旋より天下ニ布キ候儀とはんじ候て、
深相案申候、将去年ハ種々之儀、段々御世話ニ相成候事
共御礼難申尽、決て忘却ハ不致候へとも、何妨障ル事
ともニて、意外之御無音無申条候、御量察可被下候、
此品ハ去年御帰国之砌、進上いたし候御襖之上ニ被押
候続キ色紙ニ候、出来早々為持可進之処、前文之障り
勝ニて差扣居候内、小子も蒙

勅免、再青天白日ヲ奉拜候身となり、表立御通信も相
成難有幸、御登京之上と存シ心組候へとも、御上着早
々ケ様之品御覽被成候どころニても有之間敷と、思案
罷在候処、漸時日も経候故為持進上候、差当り御旅宿
之御慰ニも相成候ハ、^{〔此〕}重畳本懐ニ候、何軟申度事も
候得共、先要用而已如之候、不典、

十月廿一日

二白

御国元とハ寒氣も強候、一入御自愛專要と存候、
当世之事只々御案し申候計ニ候、猶期後便候也、

嶋津三郎殿

楯下

大原入道前左衛門督不薄

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

二一五 〔服部政次郎ヨリ内田政風へ書翰〕

去ル廿一日曉丹州龜山出立、廿三日朔当地江着仕、仙

石讚岐守様、町奉行手付京田戸一右衛門江出会仕承合、

且又生捕ノ者モ有之由承候付、弥美玉三三平仕候哉、追

々尋問仕候得共、風聞ニハ三三平播州六粟ニテ被討候儀、

人口ニ御座候得共、証拠ト申事一円無御座候付、段々

手ヲ付、銀山辺迄モ相探候得共、今少手不屈哉ニモ相

考申候、適々遠方被差越候義ニ御座候間、今一涯手ヲ

付度筋合御座候ニ付、余リ延々相成恐入奉存候得共、

三三平首級為見届候都合、今日手筈出来申候間、今暫御

猶予被成下度奉願候、就テハ只今マテノ成行、別紙三

冊老紙差上申候、

一別紙ニ相見得候自滅切腹人数モ、異口異音ニテ不慥候

処、漸今朝入手仕候別紙書付ハ、相違有御座間敷御座

候、

一右願上候通、依時機ハ四五日延引可仕儀モ難計御座候

間、一先町飛脚仕立、此段御届申上候、以上、

十月廿五日

服部政次郎

但馬出石ヨリ

内田仲之助様

追テ、当国豊岡京極飛驒守様手江、平野三平生捕相

成候風聞御座候得共、是モ未慥ニ相分不申候、

一攝州尼ヶ崎ニテ、大将召捕候哉ニ出石出張役人ヨリ

申来候由御座候、是以時日慥ニ無之由御座候、以上、

二一六 〔銀山代官届書一〕

此書附ハ銀山代官ヨリ
所司代其外江届書ノ写

十月廿五日二番ヨリ入手

当八月中旬京師出奔イタシ候七卿之内澤主水正殿

事、錦小路五郎磨ト申唱候者、去ル十日播州姫路辺

ヨリ屋形泊ノ由ニテ、翌十一日夕陣屋元生野統播州

森垣村江着致、今般敷願ノ筋有之、七卿惣代ニテ上

京ノ趣申立、同勢三十人宛俄陣屋許江逗留致度旨、

家来ヲ以申込有之、右五郎磨ハ兼テ長州江罷下居候

由、然ル処川上猪太郎儀、備中国大竹左馬太郎支配

所村々代検見留主中旁ニ付、手代共ヨリ速ニ及断候

得共不聞入、右家来引取候後押テ陣屋許江罷越、生

野銀山廻ノ内猪野々町大山師太田次郎左衛門方江止

宿イタシ候ニ付、先ツ穩ニ止置、取計方江風罷在候

処、同夜八ツ半時頃、甲冑着込等ニテ鎗・長刀等拔
 刀ニテ、鉄砲ヲモ携、不意ニ陣内江乱入致候間、玄
 閑ヲ開手附手代共罷出及応接候処、当八月京師一大
 事ノ御變動ニテ、右五郎磨并正義ノ輩危急迫不得止
 事次第ニ付、陣内当分借用イタシ度旨強談、及狼藉
 候間、再応及断候得共、不聞入差拒候得ハ暴発候旨
 申聞、左右ヨリ鎗ヲ組合候間無余儀本陣丈ハ明渡、
 役所并銀山方御藏ニハ手附手代・地役人一同詰合罷
 在候処、軍奉行ト唱候者ヨリ支配所内江触渡シ、村
 役人小前ノモノ共呼寄、銀山内出口々々江浪士兩三
 人宛出張、巷ヶ所人足五十人又ハ百人位ツ、差置、
 討手ノモノ引受、要害夫々手配イタシ、京・坂并長
 州ヨリ追々加勢ノモノ到着イタシ候趣申触、且右党
 ノモノヨリ兵糧トシテ米五十石程、軍用トシテ金三
 千兩借受度旨申聞、及断候得共不聞入候ニ付、抛ナ
 ク御藏詰米ノ内五十石、御運上蔵有合ノ内金三千兩
 貸置候処、十三日夜中五郎磨ハシメ党ノモノトモ三
 四人ツ、落行候様子ニテ、十四日朝ニ至リ不殘退散
 致候義ニ御座候、
 一浪士乱入ノ次第、早速出石表江可及通達候処、浪士

ノ方ヨリ口々へ固メノ人数差置、出入悉相致候間、
 通達難出来候ニ付、閑道通路心得候モノ江申合、密
 々ニテ山越ニ書状差出候間、自然出石表ニテ承知ノ
 儀延引致候義ニ可有之候、
 右書附振ト事実相違ノ儀モ御座候得共、御見合ニモ相
 成申間敷候間、猶帰京ノ上委敷可申上候、畢竟銀山役
 人所置振相違之事御座候、

一七 〔銀山代官届書二〕

浪士名前書

十月廿四日夜京田持參

水戸藩

關口泰次郎〔知信〕

前木祐次郎〔七郎〕

大川藤藏〔小河吉三郎変名〕

川又左一郎

薩州藩

美玉三平〔高橋祐次郎、親輔〕

肥後藩

旭太健藏〔新吾、又の名入江千兵衛〕

筑前藩

平野次郎(国臣)
藤四郎(茂親)

長谷川丹三郎(義則)
堀六郎

阿州藩

長曾我部太七郎(盛澄)

伊豫藩

二名二郎

深尾源次

因幡藩

横田友次郎(増之)

筑前

秋月藩

戸原雨橘(継明)

但馬

出石藩

多田彌太郎(立德)

高橋甲太郎(重健)

丹波

柏原藩

川勝主税殿家来(祐之)

伊藤龍太郎

但馬銀山支配所(國道)

北垣晋太郎

銀山領農兵生捕

右同討取

討取

藝州藩

田中軍太郎(正雄)

長州藩

南八郎(河上弥市正義変名)

家来徳藏(慶之丞)

長野瀬介(熊之丞)

妙見山ニ於テ自滅

下瀬猛彦(熊之進)

伊藤三郎(百合五郎)

小田村信一(信之進)

井關英太郎(忠國)

關二郎(宗祐)

久富豊(通繼)

和田小傳次(唯之)

生捕

西村晴太郎(前義)

大村辰之助(包房)

白石諒藏

京都公家藩(Ar)

池田左衛門

京師

明暗寺役僧

上田淨觀

ノ三十七人

長州藩十一人但州朝來郡於山口村自滅致、其内南八郎

懐中ニ有之名前書写、

美玉三平

右播州三日月領穴栗郡木野谷村ニ於テ、農兵共鉄砲ニ

テ討取候趣相違無之候、

一同所ニ於テ、河原中島太郎兵衛・黒田與一郎此兩人

モ農兵共鉄砲討取候趣申上候、

一一八 (銀山代官届三)

澤殿御内

官軍要路懸リ役面々

御軍議評定衆

兼役旗本備惣督

死

死

旭健事

入(巴)新吾

農兵隊惣督

穴栗ニテ死

美玉三平
多田彌太郎

使番

高橋甲太郎

深尾源次

外二十八人浪士

穴栗ニテ打取

打取

播磨追上村ニテ討取

虚無僧

姫路へ召捕

但馬竹田町

清 閑
矢名瀬屋

播磨屋

淀屋

外ニ郡中重立候者少々有之由相見候、

首

十三

山口村妙見台

老

柚村

二ツ

追上村

二ツ

穴粟

ノ十八

大略御陣屋役割張り紙残り居候趣ニテ候、

南八郎辞世御座候、

右小谷村庄屋ヨリ借写、

銀山百姓彼地ニテ写取候由、

一出石江生捕二人浪士、

銀山支配

四人 富農ノ由

二二九 (川又左一郎尋問ノ次第)

二二九ノ一

水戸藩

出石江召捕

川又左一郎

右尋問ノ次第

一澤殿三田尻ニテ中山侍従十津川ニテ敗軍ノ由ヲ聞、中山ハ無二ノ朋友聞ニ不忍候間、彼地ニ罷向、中山ニ致

合力度候間、人数借度趣長州江被頼候得共、藩主断ニ

付、南八郎以下亡命随従仕候、

一大川藤蔵自滅ノ折川又ハ申聞候ハ、カ、ル奸賊共江与

シ各切腹致候テハ、奸賊ノ名ヲ受候儀無念ノ事故、貴

様ハ生捕、此度ノ一条委敷申演呉候様末期頼候ニ付、

自分ヨリ繩ニ懸リ候事、

一南八郎ハ下ノ關農奇隊大将ニ候、

一浪士方不致一致、是非京師江歎願宜敷ト申者モ有之、

自分杯モ其賦ニテ候処、南八郎至テ壮勇ノ者ニテ、旗

揚ト申暫時議論区々争論ニモ及候、終ニ暴発ニ極リ、

代官所江討入、帳面金蔵ノ鍵迄受取候事、

二二九ノ二

此節一条出石ニテ調掛ノ手先ノ者探索候義、当人ヨ

リ承得候次第

一十月十一日銀山門外森垣ト申所遠納寺へ浪士休息、

一銀山役人江飯五十人前手当頼置候由、

一同夜銀山討入、

一近村百姓ヲ集致手配候へ共、姫路勢・出石勢大軍ニテ

抑寄候ト申義、百姓共ノ内ヨリ申者有之、皆々山ヲ伝

ヒ谷ヲ越テ過半落散様子故、十三日昼早馬ニテ南八郎

其外、二里計北ノ方江出張居候所江落去ノ注進有之、

大将初銀山陣屋ニ残り居候浪士ハ、十三日夜落行候由、

一山口村出張南八郎以下ハ大将初早落去ノ段聞、百姓杯

ノ手ニカ、ランモ無念故、同藩十人ノ介借致シ、後切

腹致候由、

一山口村へ出張ハ、但馬口ノ固メト相見得候、

此所妙見山ト申山上へ上リ、眼下往還故、但馬口ノ

寄手防候賦ノ手賦ノ由、

一浪士五人連ニテ、播州赤粟郡カネベ村ト申所ニテ、因

州路ノ道案内ヲ百姓江頼候ニ付、教へ候由、其初八人

ノ由候処、三人ハ酒ヲ吞跡へ少々オクレ、五人丈先候

ヲ、オクレ候三人ハ、赤粟ニテ狎師筒ニテ二人ハ打レ、

一人ハ手負ノ介錯致候内、農兵集生捕候由、

此三人

中山 太郎

黒田與一郎

美玉 三平

十月十四日昼七ツ時過

右跡江又三人因州路案内ヲ頼候由、先ノ道ヲ教候者有

之、然処十七日夜、浪士八人因州路ヨリ蘆野権現ノ方

マテ立戻リ候儀ハ相分リ居候得共、夫ヨリハ落行先不

相分、

一右ノ通承得申候、就テハ美玉三平ト申慥成証ハ無之、

銀山辺ニテ酒吞候義ハ有之、三人オクレ候由ハ其辺ノ

者共申居候、弥三平ト見留候者モ無之由、又死体懐中

書附類為有之ト申ニテモ無之、色々問詰候処、右ノ通

手先ノ者申居候事、

一当所ハ勿論、銀山表モ未大混雜ニテ、夫々生捕ノ者調

へモ不行届由ニ御座候、

二〇〔生野変覚一〕

覚

亥十月朔日、防州三田尻出船上下三十一人

澤 主水正殿

家来壹名

水戸藩

自滅

大川 藤藏

生捕

川又左一郎

關口泰次郎

前木佐次郎

筑前

平野次郎

堀六郎

藤四郎

長谷川丹三郎

平野次郎

家来老人

伊豫

二名二郎

外二吉人

出石藩

多田彌太郎

高橋甲太郎

長州

南八郎

家来老人

生捕

長野 瀬介

小田村信一

白石 諒藏

井關英太郎

久富 宗助

和田小傳次

西村晴太郎

下瀬 猛彦

肥田 (マ)

大村辰之助

秋月

戸原 卯橘

河内

池田右衛門

但馬

北垣新太郎

三十一人

生野銀山川上猪太郎殿

陣屋乱入ノ浪士

一二一 (生野変覚二)

羽田十左衛門

川上猪太郎

支配料

播州宍粟郡三方谷村々百姓共鉄砲・竹槍ニテ、森伊豆守領分同郡木ノ谷村ニ於テ、

十四日

薩州

討取

美玉 三平

右ハ生野御陣屋ニテ、渡邊仁左衛門聞合ノ者

十月廿六日

生野銀山ニテ

御用向

渡邊仁左衛門

京田戸一右衛門殿

一二二 (生野変覚三)

覚

一 今月十日夜、姫路城下南飾萬津湊ヨリ浪士三十人余高瀬船江乗込、千葉川ヨリ一川ト云テ登リ、同十一日生野銀山江押入ル、
一同十二日生野銀山江浪士乱入ノ趣、姫路江飛脚到着ス、

一同十四日朝、姫路家士三百人・足輕其外上下合八百人程森垣へ出張陣取ス、先手ハ銀山江押入候由、

一同十四日以前出石ヨリ人数数百人、浪士取押トシテ生野江出張候得共、浪土方ナカク強手ニ及ハス、同十

四日、姫路人数森垣へ出陣ノ段相聞得、浪士随從ノ野武士・百姓等心変リシ、裏切イタシ候故、浪士人数ヲ

山口ニ引、爰ニテ出石ノ人数ニ出合浪士敗走、此時浪士二十余人死ス、

一 右死亡ノ内、澤主水正ト云者アリ、

一 南八郎事美玉三平偶名ト云、徒党野武士共十人余、殺害イタシ切腹スト云、

一 浪士取首都テ出石江送候由、

一 左用郡三ヶ月ニテ浪士討取、

一 宍粟郡辺ニテ浪士三人何レエカ紛失、

一 生野銀山御代官川上猪太郎事、備中辺江差越居、浪人銀山江押入ノ節ハ留守ニテ、事治テ備中辺ヨリ帰路、

廿二日姫路止宿、廿三日森垣泊リ、廿四日銀山江帰ル、

但

路次国々ヨリ警護人差出候由、尤御代官至テ浪士ヲ恐畏イタシ候由、

路次国々ヨリ警護人差出候由、尤御代官至テ浪士ヲ恐畏イタシ候由、

路次国々ヨリ警護人差出候由、尤御代官至テ浪士ヲ恐畏イタシ候由、

路次国々ヨリ警護人差出候由、尤御代官至テ浪士ヲ恐畏イタシ候由、

但

路次国々ヨリ警護人差出候由、尤御代官至テ浪士ヲ恐畏イタシ候由、

路次国々ヨリ警護人差出候由、尤御代官至テ浪士ヲ恐畏イタシ候由、

一本田小太郎〔隆助後素行、膳所藩士〕

右ハ京都明闇寺ノ虚無僧聖眼ト申者ノ由ニテ、本書ヨリ但馬ノ森垣辺江取締方ト入来ノ由申触居、此節浪士江会ス、

一三宅何某

但

当分大病ニテ療治矣、

右本田・三宅兩人姫路ニ捕、当分糺方矣、

一生野江押入候浪士三十余人ノ内、逃延候者三四人ノ外ハ無之、右ハ六栗辺ニテ三人紛失トイフモノナルヘシ、
但

右六栗辺ニハ姫路人数ノ内ヨリ浪士ヲツケ認マ、(忍)ヒ候

由也、

右ハ、此節於姫路ニ聞合仕候形行ニ御座候、以上、

但

別紙名書相添差上申候、

尤右名書ハ外手ヨリ手ニ入候故、名前相違ノ者モ相見申候、

十月廿四日

日野成之進

二三三〔近衛忠房ヨリ島津久光へ書翰〕

封

島津三郎殿
内用
御下

忠房

尚以寒光御自愛之様存候事、

今日は快霽寒冷ニ候、弥御勇猛御滞在珍重ニ存候、扱容堂旅館之義、輪門里坊内々借用之事、昨鳥從尹宮先方留主居石井と申者へ被及掛合候処、異儀無承知之趣答候由ニ候、定テ從尹宮其許ニハ御承知ニ相成候事と存候、自当方ハ一兩日前輪門へ前殿下御書中ニテ、巨細ニ被仰遣候事ニテ候、是テ決テ故障有間敷ト安心之事ニ候、今日当方へも石井呼寄可申聞心得ニ候、最早是ニテ決テ故障無之安心候、右之趣猪太郎呼寄可申聞処、取紛居荒々以書中申入候、尚土州へも宜御通達希存候、扱又内々申入度儀在之、帯刀入来候様御頼申入候、併今一応可申入候間、今一応申入候上入来候様、御申聞置御頼申入候、何レ明日ニ相成候半と存候、一寸序ニ任セ申入置候、荒々要用計如此候也、

十月廿八日当賀

三伸

日々要用ニテ大取紛之仕合、甚御不沙たニ相成候
事、

緘

嶋津三郎殿 内々

御下

忠房

(嶋津忠承氏所蔵本にて校訂)

二二四 (嶋津久光上京ニツキ沙汰書)

国事之儀ニ付忒

召早速登京、

叡感不斜候、内患外憂切迫之御時節候間、滞在有之厚

致尽力、可奉安

叡慮之旨

御沙汰候事、

二二五 (嶋津久光上京ニツキ賜物)

酒 三樽

鯉 十尾

二二六 (嶋津久光上京ニツキ沙汰書)

上封上意振

兼々国家ノ為尽力致シ、去八月十八日被為復正議候節、
滞京ノ家来共不一方周旋致シ候段、兼テ申付方行届候
儀ト満足致、依之道具遣之、

〔表紙〕

忠義公史料

文久三年自十一月
至十二月

〔扉に、表紙の文字の外に市米四郎編の記載あり〕

一二七 〔土持平八ヨリ長野彦七外二名へ書翰〕

此表動静旁致探索、不寄何事時々御国許江申上候様致
承知、左候て違変到来、御見合相成儀共承得、差急候節
同案を以、其御方江差向可申上旨、御戴物掛最上善之
助より致承達、承合候形行左ニ申上候、

一豊前英彦山江浪士式三拾人相見得、将又当座主院権僧
正始山門之宗徒等、長州江交を結候聞得等有之、小倉
中家老二木飛馬・番頭青木庄七・物頭平林仁右衛門已
下士分凡三百人、当月初彦山江差向、執頭役政所坊・

正應坊・儀俊坊三人召捕、城下江曳出銘々糺明有之、
政所坊・儀俊坊申出候は、長州浪士江致加担候儀共一
切無之段申募、正應坊申分ニは、右体致同意候ては、
変革之訳合一山之後難差見得、決て不宜段申断、尤一
同致血判候得共、私式連判不相加、追て形行寺社奉行
江及内訴存含之処、召捕付ては直様不差置可致言上候
処、無其儀今更無調法之段申出、右糸口を以入もつれ
筋段々糺方相成、宇都之宮貢・良野什良・〔嚴璋坊光親〕江
〔若手坊豊〕佐竹織部・〔教頭坊成
門〕柏木民部・水口寛次・宇都之宮堯・常照主水・藤山衛
門・阿部豪一等九人、変名を以一味致連判候儀共及露
頭、其後追々相捕、当月廿二日使番大塚所右衛門・物
頭平林仁右衛門以下五拾人又々登山、座主院権僧正并
右簾中母堂附女中・側医師・役僧・家来・小者等都合
式拾人余山門より曳出、御本陣村上銀右衛門方江召留、
番頭諸士式拾人昼夜致立番、寺社奉行より致対談候処、
座主院儀は隠謀之次第全不存段申出候由、右事発は当
八月中旬比長州藩中山田幹太郎・〔若手坊豊〕椎野熊太郎兩人、彦
山江差越、此節正親町少将殿より、
勅命ニ依て夷賊致弘攘候付、勤王合体可致哉否、若同
意不致候ば一山悉焼払、死刑ニ可取行、併無二心致同

意候は、長州より事仕濟天下平均之上、知行拾万石寄附可致、左候て武器為調達方金三千兩位は則可差贈、強て申進候処より、無余儀勤王攘夷無疑心条神文ニ表し、致血判候段及白状、政所坊等外ニ為取繕致申分者も有之、未札明約兼候形ニて、僧徒六人脱衣ニて揚屋牢込等相成、夜白札方有之由、左候て奉行格淨園坊事、先月未比より為廻壇肥後諸所江差越、徒党之張本ト相見得、段々不宜聞得等有之、先達て盜賊方三四人同十九日比より出立、諸所足配相繫、於肥後ニ召捕昨夜列帰、其外段々防長江四五人差越居、右人数之内より京都江同様紛入候風説有之、右一卷付ては一山座主院迄も召呼相成程之事ニて、一通ならぬ一變之訳合候半、右次第長州江相洩候は不意ニ人数差向候欵、何様致到来候儀も難計人氣ニて、台場等江大砲玉葉迄も相備、諸士昼夜出張、且客屋江も凡三百人余交代を以詰切、役々始商儀区々之形ニ相見得申候、

一当八月彦山江長州より差越候節、当

將軍始奸賊之幕役共、右加担之大小名等調伏之法相行候聞得有之、其旨糺相成候処、曾て左様之所業無之、併天下太平国家安全夷賊降伏之法取行、右祈禱頼且武

器用金三千兩可差贈段承候儀は有之、然共右之金子未相請取段申募候由、乍然下々流評ニは調伏取行候儀共專申触、突留証拠は無之形ニ相見得、然ニ段々逃去候者も有之、自然相捕糺相約候上追て分明可致哉、差当風評迄ニて、一々碎兼候儀有之、猶又手を付置申候間、追々相分次第何分可申上候、

一右付一山之僧徒相捕牢込等相成、又は当分他所江拔出候者共名前別紙相添差上申候、

一諸国動靜探索等付ては大久保一藏より致承知、是迄時々同人江申上越候得共、当分關東出府之哉ニ致伝承、別段不申越候間、可然御聞取被下度、為念此儀も申上置候、右通御座候、以上、

長州下之關詰

唐物締横目

亥

十一月廿九日

土持平八

奥掛

書役勤

長野彦七殿

岩切八兵衛殿

東郷源左衛門殿

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一三八 〔土持平八報告〕

彦山執頭

政所坊事

不動院

右入牢

執頭

正應坊

右揚屋

奉行役

義俊坊

右同

良叶坊

右入牢

近習役

城島主税

奉行役

橋本坊

宗觀坊

來榮

目明し

玄清

勘市

又兵衛

右七人評定所預

淨圓坊

右為廻壇拔出、於肥後相捕昨日列越候、

教觀坊

裕玉坊

水口坊

中之坊

巖瑤坊

右五人長州江差越居、且此内より名前不相分候得共、京都江紛入候風説有之由、右通御座候、

以上、

亥 十一月廿九日

土持平八

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一三九 〔吉井信發津輕承昭宛大目付達〕

酒井雅楽頭殿御渡候御書付写八通相達候間、被得其意、

〔忠練、姫路藩主〕

御同列中不残様無遅滞早々可有通達候、答ノ儀ハ先々

從銘々不及挨拶、各ヨリ溝口讚岐守方江〔重清、大目付〕可被申聞候、
以上、

十二月四日

大目付

〔吉井信英、矢田藩主〕
松平左兵衛督殿
〔承明、弘前藩主〕
津輕越中守殿

右留守居

一三〇〔島津久壽ヨリ京都詰御側役衆へ連絡〕

別紙

公義御触達拾通、老鈍おのつから御家老方より可被達
御聴候得共、為御含写書いたし差越候、以上、

江戸

十二月五日

〔久壽〕
嶋津主殿

京都詰

御側役衆 〔島津忠承氏所蔵本にて校訂、番号一三四と同封〕

一三一〔伊達慶邦宛廻状連絡〕

以廻状致啓上候、只今大目付様ヨリ御廻状、并御書付
写八通被差越候ニ付、右写各様迄致通達候様左兵衛督・
越中守被申付、廻状数通相認持廻リ申付候、以上、

津輕越中守内

平井修理

比良野助太郎

松平左兵衛督内

酒井清兵衛

増尾新兵衛

御次第不同

〔伊達慶邦、仙台藩主〕
松平陸奥守様

御留守居中様

〔島津茂久、薩州藩主〕
松平修理大夫様

御留守居中様

〔慶親、久留米藩主〕
有馬中務大輔様

御留守居中様

〔鍋島直大、佐賀藩主〕
松平肥前守様

御留守居中様

〔忠寛、佐土原藩主〕
島津淡路守様

御留守居中様

一三二〔畠山助右衛門ヨリ木場傳内へ書翰〕

一筆啓上仕候、然は今日加世田大崎浦之金山丸嘉介船当

加世田大崎浦之

嘉助

御国許亥十二月二日出帆仕候、

地入津仕、別紙書付之通承知仕、全以製鉄所蒸氣船二御座候、然ル処只今肥後船入津承り候得は、右蒸氣船御乗付人数凡三十人位も相助、小倉領へサキ江上陸為致候様申居候、右之通承知仕候ニ付、今般三時限仕立飛脚を以不取致御注進奉申上候、先は右奉申上度、如斯ニ御座候、恐惶謹言、

亥十二月廿八日

島山助右衛門

木場傳内様

別紙一

追啓奉申上候、本文之次第第二付、私共御届旁罷登

可申筈ニ御座候得共、御承知之通

公方様御事何時御着船も可有之哉も難計候ニ付、不取致三時限を以御届奉申上候、以上、

別紙二

尚々肥後船より承候得は、別紙三十人之外十人、

淡路船より相助上陸被致候様申居候、左候ハ、都合四十人相助候哉ニ奉存候、此段申上候、

別紙三

金山丸船頭

当亥十二月廿四日夜五ツ時田之浦江入津仕、未船仕舞申間ニ、蒸氣船壹艘帆柱毎ニ目印ト相見得燈燵を掛ケ入津仕、已ニ碇泊之模様ニ相見得申候処、無程陸地より炮発之声三ツ四ツ追々相重、都合拾発位も相及候哉、其間ニ船中よりも炮発之様ニも相窺申候、然は右蒸氣船帆柱之燈燵を壹本ニ集メ、少々其場を引退キ、又々碇泊之様子ニ相見得申候間、私共ニも先安心ニて一統打臥、明早朝出帆之存心ニて船仕舞仕候処、右碇泊候之蒸氣船滿面燈燵を掛ケ候様相見得申候処、其内夜もほの／＼と明渡り、能々一見仕候得は、都て焼失之模様ニて、頭燵少々相残、船印・帆印等一円相分り不申、船身ハ已ニ波涯迄燃付、外車相残り、赤地ニ相見得申候、船の長凡廿六七間位ニ相見得申候、外ニ橋船又は乗組之人数は一切相見得不申、尤其近辺ニ橋船之様物も相見掛不申、然ル処西風吹起り、小船之事ニ御座候間其場を走り、其後は相分り不申候、此段奉申上候、以上、右之通金山丸嘉助より承り申候、此段奉申上候、以

上、

亥

十二月廿八日

小豆屋助右衛門

木場傳内様

尚申上候、折田要藏様事下拙方ニ御逗留被遊候付、

右之次第奉申上候処、直様今日四ツ時過山崎越ニテ、

京都江大早ニテ御届ケ旁御出立ニ相成申候間、此段

御心得迄奉申上候、以上、

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

一三三三〔葛城彦一報告〕

覚

豊前小倉寺社町奉行上條八兵衛ニ致面会、彦山一件
承合申候処、左之通ニ御座候、

一当八月より小倉領内之者は、一人たりとも長州江渡海
之儀差留ニ付、彦山江も其趣寺社方より達ニ相成候処、
同山之者共折々長州江渡海之様子相聞得、役々不審ヲ
起し、密々為聞合寺社方下役之者遣しニ相成候処、彦
山麓村之商人ニ出合、兼て知人故暫時嘸どもいたし候
処、商人申ニハ、此比彦山坊中諸所ニてあぢな咄仕申
候間、小倉表江訴出可申存候との事ニ付、如何之次第

ニ候哉と尋候処、先比より坊中ニてちら／＼咄承候ニ
ハ、長州江合体いたし居候へハ、小倉ハ一山之もの、其
上当分勢ひ強キ長州之事ニ候へハ、何ニしてもあしき
事ハ有之間敷、殊ニ金子等も可渡との事なれハ、一山
之任合杯とさま／＼之咄有之候ト申ニ付、詮議方之役
人則立帰り、其趣役筋江申出、夫より及詮議為申由御
座候、

一政所坊ハ彦山執当役之者ニ御座候処、座主より被申渡
候ニハ、其方事執当役として、一山滅亡ニ相及候儀共
企、不届ニ付法衣取上、小倉表江相渡との儀ニ付、小
倉より役方差越召捕来り、牢舎ニ相成申候、外ニ拾貳
三人同断ニ御座候、

一座主院家内共ニ、十一月廿二日より小倉表江出方ニ相
成、村上銀右衛門方江止宿、昼夜不審番付ニ御座候、
一召捕之者共糺明御座候処、当七月十六日石州者之由ニ
て彦山江登山いたし、座主院役僧ニ取合、御座主江申
上儀有之候付、御目通り相願との事候故、役僧共申談、
座主御逢被申義御断被申旨申聞候処、右兩人大ニ気色
ヲ変し候て、是非共御逢被下様御執成相頼との事ニ付、
強て断候ハ、打果も可致勢ひ故、無抛座主逢ニ相成、

左候て虎之間ト申ニて、役僧とも酒肴差出取持候処、
兩人之侍共申ニハ、各方ニハ皇朝之尊キ事御存御座候
哉と申ニ付、成程

尊王之儀忘却不仕と答候処、然ラハ攘夷ヲ被成間敷哉
と申ニ付、異国降伏等之御祈禱ハ仕申事ニ御座候得共、
長袖之身分ニ御座候ヘハ、劍・鎗・砲術等之稽古も不
致候ヘハ、御祈禱之外、攘夷と申儀出来兼之由相答候
之処、勤王之志さへ候ハ、只今より練兵等被致候共
不遅、必攘夷可被成、是當時之急務ニ候旨相進メ候ニ
付、当山近年甚困窮いたし、兵器等相求候儀も出来不
致、殊ニ京都表之御祈禱も仕、御札相納不申候て不叶
之処、夫さへ出来兼、于今上京も不仕得程之事ニ御座
候由申聞候処、弥勤王之志於有之は、兵器等ハ勿論金
子等も御世話可申、当分金子何程位有之候ハ、山中
御立行可被成哉との事ニ付、役僧共夫ニハ渴ニ水呑心
持ニ相成、申談之上三三两計候ヘハ、当座等ハ相凌可
申と答候処、夫ハいと御安キ事ニ御座候、然ラハ可申
候、我々ハ石州者之由偽り候得共、実ハ長州藩中ニて
山田幹太郎・椎木熊吉郎（トウキチ）と申者ニ御座候間、主人江申
聞早速金子調達いたし御渡可申ニ付、誰そ御越可被下、

其上当季三千石相納可申候間、

尊王攘夷御同意可成給、当冬とは不相掛乱ニ相成申ニ
付、其上ハ以前之通拾貳万八千石ハ御一山ニ差出可申
杯と旁申聞ニ付、其比ハ長州勢ひ強、小倉領内田之浦
等江長州より台場築立、奇兵隊等多人数相渡居候時分
之事ニ付、小倉ハ実ニ長州之物ニ可相成存候て、旁致
同意連判迄も仕為申由、且兵糧差送之道筋之事より、
大砲等差登せ候談合ニ相成候処、兩人申ニハ、大砲等
ハ目立候儀ニ付、彦山江勅使仕立、其荷物ニ仕込候て
送り候ハ、如何可有之哉との事候処、役僧共申ニハ、
御勅使と号候ハ、小倉より役々附添可申ニ付、京都
九條殿・醍醐殿等ハ座主院之御親族ニ付、右之諸大夫
等より送り、荷物之所ニ取計可然との事ニて、右諸大
夫等之名前等書付、兩人江相渡候、尤長州より師範等
被遣稽古等いたし候ハ、小倉より察度等ハ入申間敷
哉と役僧共懸念候処、兩人申ニハ小倉ハ風前之塵、其
儀ハ少シも心配有之間敷とて稽古場所地見分いたし、
後ハ陣屋ニ可致とて、其見賦手筈等迄もいたし、兵糧
ハ小倉表より取寄候ハ、目立へくとて、豊後日田表よ
り取寄る手段ニ相成、金子等ハ引取之上可相渡約束、

若相違之儀於有之は、兩人之首ヲ可渡、其替り山中約
一彦山ニテ連判変名左之通、

定違変之儀も有之候ハ、可打譴と堅約定いたし候て、

兩人引取候ニ付、比合見合候て、八月下旬彦山より嚴

瑤坊・良什坊兩人長州山口ニ差越、約束之金子三千兩

之儀、山田幹太郎・椎木熊吉郎ニ申入候処、折節八月

十八日京都騒働之一件申来、右ニ付長州腰ヲ折混雜中、

金子出来不致、山田・椎木ニも甚心配ニて、奇兵隊之

世話役人瀧矢太郎と申者杯ニも、兩人より談合いたし

候得共、何分出来不致趣ニ付、兩人も是非ニ不及、此上

ハ約諾之義ニ付切腹いたし御断申とて、既ニ其場ニて

切腹可致格護ニ付、彦山之兩僧并瀧矢太郎押留候て、

切腹ニハ不及候由、乍然彦山之兩僧其俣帰國も難出来

存候処、折柄三田尻江三條公杯御越ニ付、兩僧申合座

主院之使僧と号シ、三條公江御目見いたし候処、彦山

一統勤王攘夷之志有之段、格別之至、猶弥志ヲ不変様

ニ可有之との趣ヲ、三條公より座主江御書被遣候由、

然其金子渡し方ニ不相成候ニ付、彦山より追々往返い

たし候内ニ及露頭候間、五人欠落いたし長州江這入込、

其内式人ハ長藩之者、兩三人家来分として召連上京之

処、伏見ニて小倉より召捕家来ハ逃去為申由御座候、

成圓坊事

宇都宮貫

嚴瑤坊事

佐竹織衛

良什坊事

良野什郎

祐玉坊事

柏木民部

教觀坊事

藤山衛門

中坊事

阿部蒙一

水口坊事

水口寛次

本覺坊事

宇都宮堯

橋本坊事

常照主水

同断
以上

詮議中

同断

詮議中

出奔

詮議中

出奔

同断

同断

同断

詮議中

同断

右は於小倉是迄糺方いたし候処、形行一通り如此ニ御座候由、此外ニ不容易企も為有之致ニ御座候得共、八月十八日後長州腰ヲ折為申ニ付破れ不申、八月中也長州本通り之儀ニ候へハ、彦山江人数三四百人も楯籠、豊後日田打取并小倉ヲ攻申之賦ニ御座候由、且又年内中糺方取止にて、座主院等ハいまた糺も無御座段、是迄糺之形行一通り幕府迄小倉より御届ニ相成候由御座候、

一九州国々旅人取締殿敷御座候ニ付、浪人体之者罷居不申候、

一長崎製鉄所御借入蒸気船、十二月廿二日昼前兵庫出帆、同廿四日之夜五ツ時比、小倉領内田之浦江着碇泊いたし、目印ニ御挑灯机柱ニ揚候処、長州台場より数発砲發ニ付、碇巻揚引戻し、田之浦之上地之方、裏手之青濱ニ申沖ニ碇泊ニ相成候処、間もなく船表之火焚釜床之下荷積之綿ニ火燃付、消方手ヲ尽し候得共、手ニ不及、終ニ及焼失候付、海ニ飛込、皆々およき候て青濱浦ニ上り、乗組六十八人之内四拾人上陸、残り二十八人不相和、其内士官九人有之候由、廿五日之朝、大原林左衛門より小倉詰唐物締横目方ニ掛合来候間、土持

平八直ニ出張候、翌廿六日大原林左衛門初惣人数小倉之様引取来候、土持一人ハ田之浦ニ残り、廿七日晚小倉江罷帰申候、

一長州台場より砲發三十発計之由御座候、

一蒸気船燃最中比長州台場ニ声ヲ揚為申由、且夜明比より酒宴相催候由御座候、

一廿五日下ノ關ニ触達申ニハ、昨夜異船打沈メ候ニ付、異人等死体流寄候共取揚申間敷、且右之異船江日本人乗組居候も難計、若日本人流寄候共、同断流捨候様申渡候由ニ御座候、

一同日、昨夜異船打沈候ニ付、いろく風説等いたす間敷旨触達御座候由、

一蒸気船江三発当り候由下ノ關にて之評判、且田之浦之者共も同断ニ御座候、眼前ニ見物いたし居候処、三発目之玉当り候由杯と女共迄申候事、

一廿五日之朝、蒸気船之橋船一艘田之浦江流寄居候ニ付、浦人より其趣同所番所江届出候処、繫置候て青濱浦江上陸、人の方ニ掛合可致とて役人手筈いたし候内、長州之方より小船三四艘乘来、渚遭廻候処、右橋船見当引行へくいたし申ニ付、浦人其船ハ御番所江も届申出

置申候ニ付、御待被下候へと為申由御座候得共、返答も不致、むやみに船式艘にて引行申候由、且番所より人遣し候処、最早沖ニ引行候跡にて御座候由、右橋船之内ニ、十文字之紋付候弓張挑灯一張有之候由、浦人共慥ニ見当為申との事ニ御座候、

右之通承合申候間、此段申上候、以上、

十二月

葛城彦一
(島津忠承氏所藏本にて校訂)

一三四 (江戸留守居ヨリノ幕府沙汰書)

一三四ノ一

大目付江

今度

御上洛ニ付、供奉相動候万石以上之面々、

禁裏御始江献上物、関白殿始江贈物之儀、当春

御上洛之節相達候通相心得、尤四品以下之面々も、式

拾万石以下並之通献上物等有之筈ニ候間、被得其意、

差上方之儀は、所司代可被承合候、

右之通、万石以上之面々江可被相触候、

十二月

一三四ノ二

大目付江

御軍艦にて

御上洛被遊候付、

御先江上京、供奉相動候万石以上之面々、大坂表江御

出迎ニ不及、京地ニ罷在、

二條

御城 御着座之節、同所東御門内外江御出迎

御目見致し、直ニ登

城之上、御供之謁老中御機嫌可被相伺候、尤

御目見場所等之儀は、御目付江可被承合候、

右之通、万石以上供奉相動候面々江可被相達候、

十二月

一三四ノ三

大目付江

御上洛ニ付、二條

御城 御着座之節、

御目見罷出候面々、御供之向は旅装着用可致候、京地

在役之面々は、熨斗目麻上下着用、

御目見可被罷出候、尤御出迎

御目見場所等之儀は、掛り御目付江可被承合候、
右之通可被相触候、

十二月

二三四ノ四

大目付江

今度

御上洛ニ付、武家方一季居之奉公人、主人より暇出候
儀は、格別奉公人より暇取候儀仕間敷旨、町中江可被
相触候、

右之通相触候間得其意、若違背致し候者有之候ハ、
其段町奉行所江可被達候、右は御供御留守之面々同様
之儀ニ候事、

右之通向々江可被相触候、

十二月

二三四ノ五

大目付江

今度

御上洛之節、下々不及難儀様との厚御趣意ニ付、大坂
伏見・京都

御通行筋屋敷々々窓蓋等不及、町家其外都て平常之通

相心得、二條・大坂

御在城中も市中商売等相休ニ不及、御警衛筋之外は諸
事常々之通相心得、

御上洛ニ付て、屋敷々々・町々等一切取飾ケ間敷儀仕
間敷候、

但

御通行筋江往来人立集候儀は難相成、都て横小路
江蹲踞可罷在候、

右之趣京・大坂・伏見ニおゐて相触候筈ニ付、右最寄

御料・私領江可被相触候、

右之通可被相触候、

十二月

二三四ノ六

大目付江

御軍艦ニて

御上洛被遊候ニ付ては、風様次第相州浦賀、豆州網代・

下田、駿州清水、志州鳥羽・安乘、紀州須加留^(實利)・三木

嶋浦・大嶋・由良・塩津、淡州由良、攝州兵庫港等江

御碇泊等被遊候儀も可有之候間、右港々入口海岸暗礁

隠洲等有之場所々々は、兼て目印之品仕附置候様可致

候、

一御通船ニ相成候海岸ニ領分知行有之面々は、

御通船之御程合見計、海岸御警衛向嚴重ニ可相心得、

且又港々江は別段人数差出置、風波之模様ニ寄、自然

御碇泊等被遊候儀も有之節は、夫是御便宜筋取計可申

候、尤海岸所砲台場江備置候大砲等は、御警衛ニ附候事

ニ付、其俣据置不苦候、遠見番等も下し候ニ不及候、

一御通船相成候海岸人留・船留ニ不及、平常之通漁業等

為致不苦候、

右之趣海岸浦々江、御料は御代官、私領は領主・地

頭より不洩様可被相触候、

右之通可被相触候、

十二月

一三四ノ七

大目付江

御上洛之節、二條

御城

御着座、翌日且

御参 内被為濟候、翌日并御暇

御参 内被

仰出候、翌日共万石以上以下之面々、在京之分は二條

御城江登

城、御祝儀可被申上候、

但病氣之面々は、雅楽頭旅館江使者可被差出候、

一在国在邑之面々は、隠居之分共承知之上、同人旅館江

飛札可被差越候、尤御暇

御参 内被

仰出候御祝儀は、御留守月番之老中江飛札差越候様可

被致候、

一在府之面々且御留守ニ罷在候万石以上以下之面々は、

相達次第御留守月番之老中宅江相越、御祝儀可被申上

候、

但病氣・幼少・隠居之面々は、御留守月番之老中江

使者可差出候、

一御在京中御供等にて上京之面々、御用之外平日二條

御城江罷出候ニ不及、朔望其外出仕之節着服之儀は、

都て江戸表之通相心得可申候、

右之通可被相心得候、

右之趣万石以上以下之面々江不洩様可被相触候、

十二月

大目付江

此度之

御上洛は再度之御儀にて、格別御手輕可被遊

御上洛御主意ニ付ては、御持越相成御道具等も格別御

減省、可也御用相弁シ候丈ニ、精々御省略御持越可被

遊旨、被

仰出候ニ付ては、向々ニても其心得を以取調持越候様

可被致候、右御道具等御行列ニ相立候御品、其外共惣

て有来を相用可申、尤御損し相成候分は、御手輕御取

繕可相成候間、其段向々より可申出候、右ニ付ては、

銘々持越候品は猶更格別ニ減省致し、御趣意行届候様

可致候、

一 諸向請取候新規御道具之内、油簾・桐油之類

還御以後外ニ御用無之分は、御用済御細工所江可相返

候、尤断書差出候節、其旨可被書加候、

一 諸組役羽織之儀も新規相渡不申候間、在来品を相用可

申、損し候て難用分は、其筋見分之上相渡にて可有之

候、

但御徒以下江は、木綿股引・脚半・合羽等相渡にて

可有之候条、可被得其意候、

右之趣向々江可被相触候、

十二月

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂、前書ニ通省略力〕